578–126
1200501520614
578
126

89.13

青森縣

遊覽指針

青森縣醫師會特編

帝國圖書館藏

青森縣遊覽指針

578-126

何者かを、より能く見よう、而してより能く知らうとするに當り、幾分夫れに關する豫備智識を備へて有うと、其有らざるとの間に、理解、興味、將た印象等に於て萬里の經庭を生ずべきは蓋し云ふ迄でもない、杖を未踏の異鄉に曳く者、智識を無邊の學海に求むる者、比々皆然らざるなしである。

偶々本年六月二十三日から本縣醫師會の主催で、第十八回關東東北醫師大會が當地に開かるゝ事に決定した、民富や人文の比較的劣つてと云はれてる丈に、本縣は未だ廣く紹介されて居らぬ。一府十三縣の同業者の中に、或は北極探險に似た氣分を持し好奇の眼を以て吾等を訪ふ者のないでもなからう、此際何にものか參考になるべきものを豫め此等の僚友に提示せん者をと、官公衙や書店其他について旣刊册子十餘種を得たが、其何れも、所謂帶に短かく襷に長く、一瞥して本縣の全豹を達觀し得るものかなかつた、本書特編の必要は如斯にして遽々然擡頭し、曩きの日本縣々會を通過し吾が主催會に交附する事となりし補助金により、此事の實行を難なく早めたのは感謝に堪へぬ所である。

予が友人西田源藏氏は今は油川の町宰として納まつて居る、彼れ曾つては長く操觚界にあり、頭腦明晰、詩に能く文に亦能く、稀れに見る人格の所有者で、曩日靑森縣誌を編し、近く油川町誌を出たし、史眼の凡ならざるは識者の等しく認めて居る所である、本書は予の囑に應じて彼れにより起草され、而かも或る種の感激中に脫稿

された者で、彼れこそは即ち隱れたる本書の著者なのであるのである。

書中遠くは蝦夷時代の昔から、延いて維新前に於ける南部、津輕兩藩の榮枯興癈を悉くし、明治、大正、昭和の三世を貫ける本縣の狀勢を順序よく記載してある、細心、周到、然しながら簡潔にして要領を把摑してある、就中其風景を叙するや、文人墨客の詠草を拉し來つて一讀已に其境にあらしめたるが如き親切そのものである、措辭流麗にあらざるも行文淸楚にして澁滯なく、風韻自ら備はる所、彼れの人格を表現して剩まさず、かの俗間賣文業者の卑しき影を印せない所は、予の推奬を吝まざる所以で、又而かも本書發行の素志に適應した者なのである

題して『青森縣遊覧指針』とせるは恐らくは當るまい、予の未た本書の內容を閱せざる以前に命名した爲と、期間が逼まつて製本を急く所とより改め得なかつた事を遺憾とする、此點著者及讀者に陳謝したいと思ふ。

聊か顛末を述べて卷頭に序する事とした。

昭和三年六月八日

於青森市寓居

醫學博士　神竹之助

青森縣全圖

141°
40′
10′
北海道
亀田郡
函館區
函館灣
五稜廓
大島崎
汐首岬
青森縣里程圖
青森灣
秋田
岩手
津
輕
海
大間崎
尻屋岬
大湊
田名部町
大畑
大湊灣
20′
10′

陸奥湾
野邊地湾
青森湾
平館海峡
津軽
田名部町
青森市
野邊地町
大間崎
尻屋崎
大湊
川内
朝比奈岳
縫道石山
吹越山
六ケ所
秋田
岩手
自函館至萩ノ濱二百六十一浬
至函館百三浬
41°

於青森市寓居

醫學博士 神竹之助

青森縣全圖

◎大日本分縣地圖（三府四十三縣 北海道東部西部 樺太 臺灣北部南部 朝鮮北部南部 南滿洲 關東州及青島 南洋諸島 日本全國總圖）全五十六枚之內

樺太 關東州 及青島 總圖

全五十六枚之内

陸奥
中津輕郡
南津輕郡
秋田
山本郡
後
陸中
十和田湖
弘前市
弘前市
五万分之一
記號
縣界
國界
郡國界
國道
縣道
里道
村道
鐵道 隧道 停車場
市及縣廳所在地
町(人口一万以上)
町
村(連擔櫛比セル)
村界
大字界
字
郵便局
神社.佛閣
名勝.古蹟
古城.古戰場
温泉.鑛山
航路.燈台
碇泊地.海底電線
川
滝
砂地.岩
備考 山嶽標高數字ハ米突ヲ以テ示ス
四十五万分一
0 1 2 3 4 5里
140°
10′
20′
30′
40′
50′
141°

官公署電信郵便局所在便覧

大工町 塩…町（一部判読不能）
蜆貝町〒 榮町〒
大野字長島〒 造道字浸打
瀧內字古川 浦町

◎陸奥 弘前市

弘前市役所 元寺町
弘前稅務署 奈良町
同小林區署 住吉町
弘前警察署 元寺町
弘前區裁判所 本町
第八師團司令部 富田町
歩兵第四旅團司令部 同町

春日町 若黨町
馬屋町 馬喰町
平岡町 新町
覆ノ町〒 在府町
發町 塩分町
茂森町〒 元大工町
茂森新町 森町
古堀新割町 新寺町
土手町〒 山道町
新品川町 桶屋町
新鍛冶町 檜町
南川端町 禰宜町
和德町〒 龜甲町
富田町〒 小人町

同 筒井村
歩兵第五聯隊 同村
第二區癩療養所北部保養院 新城村

新城村（新城㋳ 石江〒 岡町 戶門 鶴阪）
大野村（大野㋳ 細越 安田）
筒井村（筒井㋳ 幸畑 濱田）
瀧內村（沖館㋳ 新田 三內 古川 西瀧 濱館）

橫內村（橫內㋳ 四ツ石 雲谷 新町野 野茂木野 野尻 大矢澤 合子澤 牛館）
高田村（高田㋳ 入內 野澤 小館 大谷 小畑澤）
油川町（油川㋳〶 羽白）
奥內村（奥內㋳ 前田 內眞部 西田澤 清水 飛鳥 瀨戶子）

同深浦出張所
同木造出張所
同車力出張所
鰺ケ澤町
木造町
稻垣村

大戸瀨村（關村㋳ 風合瀨 北金澤〒 柳田 轟木〒 岩阪）
深浦村（深浦㋳〶 追良瀨 月屋 廣戶 橫礒 艫作）
岩崎村（岩崎㋳〶 澤邊 久田 大間越〒 黑崎 正道尻 森山 松神）

陸奥國中津輕郡

目屋小林區署 西目屋村
弘前區裁判所高杉出張所 高杉村
歩兵第三十一聯隊 清水村
同第五十二聯隊 千年村
騎兵第八聯隊 堀越村
輜重兵第八大隊 清水村

清水村（富田㋳ 紙漉町 阪元 悪戶 小澤 常盤阪 下湯口）
堀越村（門外㋳ 大清水 堀越 取上）
豐田村（新里㋳ 境關 福 高田 福田 外崎 小比內）
和德村（堅田㋳ 高崎 大久保 清野袋 津賀野 和德 撫牛子 向外瀨 百田）
千年村（小栗山㋳ 松木平 大和澤 原ケ平 清水森 一ノ渡）
駒越村（駒越㋳ 眞土 島井野 一丁田 宮地㋳ 瀧ノ口 如來瀨 兼平 五代）

岩木村（新岡 新法師 常盤野 葛原 百澤〒 松代）
裾野村（大森㋳〒 鬼澤 十面澤 貝澤 楢木 十腰內）
藤代村（船水㋳ 土堂 島町 町田 三世寺 藤代 石渡 濱中 中崎 大川）
新和村（種市㋳ 靑女子 三和 小友 笹館）
相馬村（五所 紙漉澤㋳〒 藍內 藤澤 湯口 水木在家 阪市 相馬 大助 澤田 黑瀧）
高杉村（獨狐㋳ 前阪 高杉〒 藥師堂 糠坪）
船澤村（富栗㋳ 折笠 中別所 細越 宮館 蒔苗）
大浦村（賀田㋳〒 熊島 橫町 鼻和 高屋 八幡 植田）
東目屋村（國吉㋳〒 櫻庭 中野 米ケ袋 中畑）
西目屋村（田代㋳〒 杉ケ澤 大秋 藤川 砂子瀨 白澤 村市 居森平 河原平）

陸奥國南津輕郡

黑石小林區署 中鄉村
大鰐小林區署 大鰐町
黑石警察署 黑石町
同浪岡分署 浪岡村
弘前區裁判所黑石出張所 黑石町
同浪岡出張所 浪岡村

同柏木町出張所 柏木町村
同藏館出張所 藏館村
同藤崎出張所 藤崎村
靑森縣農事試驗場 黑石町

黑石町（市ノ町㋳ 內町〶 寺町 甲裏町 中町 濱町 片裏町 油橫町 元町 甲大工町 乙大工町 甲德兵衛町 株梗木橫町 乙德兵衛町 後大工町 前町 山形町 鍛冶町 馬喰町 橫町 乙裏町 寺小路 上町 大板町）
大鰐町（大鰐㋳〶 宿川原 居土 島田 三目內〶 早瀨野 虹貝）
石川町（石川㋳〒 八幡館 小金崎 大澤 乳井 鯖石 藥師堂 森山）
田舍館村（田舍館㋳ 諏訪堂 畑中 高樋 大根子 十二川原 垂柳 大曲 八反田 枝川 豐蒔）
中鄉村（株梗木㋳ 境松 野際 北田中 西馬場尻 東馬場尻 上目內澤 下目內澤 飛內 黑石 東野添 小屋敷）
畑岡村（林崎㋳ 深味 太田 橫澤 長野 辻 飯田）
金田村（南田中㋳ 金屋 新屋町 李平）
尾上村（追子野木㋳ 尾上〶 久米 高木）

猿賀村（八幡崎㋳ 大袋 蒲田 猿賀 中佐渡 西野曾江 日沼 新山 原 長田）
山形村（花卷㋳ 牡丹平 豐岡 上山形 南中野 坂留 沖浦 石名坂 下山形〒 溫湯 大河原 二庄內 袋）
六鄉村（高館㋳ 三島 上十川 竹鼻 赤阪 二雙子）
光田寺村（前田屋敷㋳ 川部 境森 堂野前 和泉 土矢倉 東光寺）
藤崎村（藤崎㋳〶 葛野 藤越）
淺瀨石村（淺瀨石㋳ 中川 高賀野）
大光寺村（大光寺㋳ 本町 杉館 館山 松館 荒田 小和森 館田 苗生松 松野）
町居村（㋳）
柏木町村（柏木町㋳〶 小杉 石畑 岩館 石鄉 高畑 四屋 大坊 原田 吹上）
竹館村（沖館㋳ 小國 葛川 新館 切明 唐竹 廣船）
尾崎村（新屋㋳ 尾崎 平田森）
浪岡村（浪岡㋳〶 五本松 王余魚澤）

〶郵便電信局

同小泊出張所
同金木出張所
同板柳出張所
同原子出張所
靑森區裁判所
同金木分署
五所川原警察署
喜良市小林區署
中里小林區署
相內小林區署
五所川原稅務署

陸奥國

藏館村
碇ケ關村
十二里村
常盤村
大杉村
野澤村
富木館村
女鹿澤村
五鄉村

…中郷村 …大鰐町 …黑石町 …濱岡村 …黑石出張所 …濱岡村

（津輕郡）

葛原 百澤〒 松代 貝澤 槇木 十腰内

藤代 石渡 瀧中 中崎 大川

小友 笹館

相馬 大助 澤田 黑瀧 阪市

藥師堂 練坪

細越 宮館 蒔苗

高屋 八幡 植田

米袋 中ケ畑

白澤 村市 居森平 河原平

同柏木町出張所　柏木町村
同藏館出張所　藏館村
同藤崎出張所　藤崎村
青森縣農事試驗場　黑石町

黑石町（クロイシ）　市ノ町㋳ 内町〒 寺町 甲裏町 中町 濱町 片横町 油町 元町 甲大工町 乙大工町 甲徳兵衛町 株梗木横町 乙徳兵衛町 後大工町　山形町 前町 鍛冶町 馬喰町 横町 乙裏町 寺小路 上町 大板町

大鰐町（オホワニ）　大鰐㋳ 宿川原 居土 島田　三目内〒 早瀬野 虹貝

石川町（イシカハ）　石川㋳〒 八幡館 小金崎 大澤　乳井 鯖石 藥師堂 森山

田舍館村（イナカダテ）　田舍館㋳ 諏訪堂 畑中 高樋 大根子 十二川原　垂柳 大曲 八反田 枝川 豐蒔

中郷村（ナカガウ）　株梗木㋳ 境松 野際 北田中 西馬場尻 東馬場尻 上目内澤 下目内澤　飛内 黑石 東野添 小屋敷

畑岡村（ハタヲカ）　林崎㋳ 深味 太田 横澤　長野 辻 飯田

金田村（カナタ）　南田中㋳ 金屋 新屋町　李平

尾上村（ヲノヘ）　追子野木 尾上〒 久米　高木

猿賀村（サルガ）　八幡崎㋳ 大袋 蒲山 猿賀 中佐渡 西野曾江　日沼 新山 原 長田

山形村（ヤマガタ）　花巻㋳ 牡丹平 鬱岡 上山形 南中野 坂留 沖浦　石名坂 下山形〒 溫湯 大河原 二庄内 袋

六郷村（ロクガウ）　高館 三島㋳ 上十川　竹鼻 赤坂 二雙子

光田寺村（クワウデンジ）　前田屋敷㋳ 川部 境森 堂野前　和泉 土矢倉 東光寺

藤崎村（フヂサキ）　藤崎㋳〒 葛野　藤越

淺瀬石村（アセイシ）　淺瀬石㋳ 中川　高賀野

大光寺村（ダイクワウジ）　大光寺㋳ 本町 杉館 館山 松館　荒田 小和森 館田 苗生松 松野

町居村（マチヰ）　㋳

柏木町村（カシハギマチ）　柏木町㋳〒 小杉 石畑 石館 岩郷 高畑　四屋 大坊 原田 吹上

竹館村（タケダテ）　沖館㋳ 小國 葛川 新館　切明 唐竹 廣船

尾崎村（ヲザキ）　新屋㋳ 尾崎　平田森

浪岡村（ナミヲカ）　浪岡㋳〒 五本松 玉余魚澤

五郷村（ゴガウ）　本郷㋳ 北中野 細野　吉内 相澤

女鹿澤村（メガサハ）　下十川㋳ 女鹿澤　增館

富木館村（トミキダテ）　水木㋳ 久井名館 富柳　福館

野澤村（ノザハ）　橡澤㋳ 鄕山前　銀 吉野田

大杉村（オホスギ）　高屋敷㋳ 大釋迦 長沼　杉澤 徳才子

常盤村（トキハ）　常盤㋳ 若松 福島　徳下 榊

十二里村（ジフニサト）　矢澤㋳ 柏木堰 下俵升 中野目 吉向 小畑　本沼 俵升 五林 龜岡 中島 西中野目

碇ヶ關村（イカリガセキ）　碇ヶ關㋳ 古懸　久古

藏館村（クラダテ）　長峰㋳ 藏館 駒木　苦木 唐牛

陸奧國北津輕郡

五所川原税務署　同町
相内小林區署　相内村
中里小林區署　中里村
喜良市小林區署　喜良市村
五所川原警察署　五所川原町
同金木分署　金木村
青森區裁判所五所川原出張所　五所川原町
同小泊出張所　小泊村
同金木出張所　金木村
同板柳出張所　板柳村
同原子出張所　七和村

縣立農學校　五所川原町

五所川原町（ゴショガハラ）　〒㋳

飯詰村（イヒヅメ）　飯詰㋳〒 下岩崎

松島村（マツシマ）　吹畑㋳ 金山 米田 石岡 唐笠柳　大刀打 一野坪 漆川 水野尾

長橋村（ナガハシ）　神山㋳ 野里 戸澤 福山　松野木 豐成 淺井

七和村（ナナワ）　羽野木澤㋳ 原子〒 下石川 前田野目　高野 持子澤 俵元

三好村（ミヨシ）　鶴ヶ岡㋳ 藻川　高瀬

小阿彌村（コアミ）　大俵㋳ 柏木 牡丹森 五幾形　高増 狐森

沿川村（ソヒカハ）　常海橋㋳ 五林平 館野越　夕顔關 瀧井

梅澤村（ウメザハ）　梅田㋳ 横萢 中泉　瀬良澤 沖

板柳町（イタヤナギ）　板柳㋳〒 灰沼 三千石 欠落林　福野田 赤田 小幡

六郷村（ロクガウ）　胡桃館㋳ 石野 中野　境 野中 山道

鶴田村（ツルダ）　鶴田㋳〒 大巻 菖蒲川　強巻 大性 鶴泊

榮村（サカエ）　濱田㋳ 稲實 姥萢　七館 湊

豐崎村（トヨサキ）　七崎㋳ 豐潤内　境澤

淺田村（アサダ）　淺水㋳〒 扇田

野澤村（ノザハ）　西越㋳ 手倉橋

…八甲町 …宜町 …町 …屋町 …道町 …寺町 …町 …大工町 …分町 …府町 …町 …喰町 …黨町 …町

步兵第五聯隊　同…
第二區療養所北部保養院　新城村

新城村（シンジヤウ）　新城㋳ 石江〒 岡町　戸門 鶴ヶ阪

大野村（オホノ）　大野㋳ 細越　安田

筒井村（ツヽヰ）　筒井㋳ 幸畑　濱田

瀧内村（タキウチ）　沖館㋳ 新田 三内　古川 西瀧 濱館

橫内村（ヨコウチ）　橫内㋳ 四ツ石 雲谷 新町野 野木茂野　野尻 大矢澤 合子澤 牛館

高田村（タカタ）　高田㋳ 入内 野澤　小館 大谷 小畑澤

油川町（アブラカハ）　油川㋳〒 羽白

奥内村（オクナイ）　奥内㋳ 前田 内眞部 西田澤　清水 飛鳥 瀬戸子

同深浦出張所　深浦村
同木造出張所　木造町
同車力出張所　車力村

鰺ヶ澤町（アヂガサハ）　本町㋳〒 田中町 新町 漁師町 富根町 七ツ石町　米町 濱町 釣町 新地町 淀町

木造町（キヅクリ）　〒㋳

稲垣村（イナガキ）　沼崎㋳ 吉出 福富　沼館〒 豐川

越水村（コシミヅ）　吹原 三ツ館 丸山 福原 …

舞戸村（マヒド）　〒㋳

鳴澤村（ナルサハ）　南浮田㋳ 北浮田 建石　湯船 小屋敷 出來島

中村（ナカ）　中㋳ 長平　濱橫澤 蘆萢

赤石村（アカイシ）　赤石㋳ 館前 小森 鬼袋 南金澤　日照田 深谷 一ツ森 種里 姥袋

陸奧國上北郡

七戸税務署　同
野邊地小林區署　野邊地町
三本木小林區署　法奥澤村
橫濱小林區署　橫濱村
七戸警察署　七戸町
同野邊地分署　野邊地町
同三本木分署　三本木町
青森區裁判所野邊地出張所　野邊地町
同七戸出張所　七戸町
同甲地出張所　甲地村

〒郵便電信局　〒郵便局　㋳役場

著者 黒岩芳馬

㊦郵便電信局　〒郵便局　○役場

四和(シワ)村　米田㊦　奥瀬　大不動　傳法寺

藤阪(フヂサカ)村　相阪㊦〒　藤島

三澤(ミサハ)村　三澤㊦〒　天ヶ森

下田(シモタ)村　〒㊦

百石(モヽイシ)村　〒㊦

東通(ヒガシトホリ)村　㊦田名部　野牛　岩屋〒　大利　目名　蒲野澤　砂子又　田屋　白糠　尻屋　尻勞　小田野澤〒　猿ヶ森

大湊(オホミナト)村　大湊㊦〒　大平　城ヶ澤

大畑(オホハタ)村　大畑㊦〒　正津川

風間浦(カザマウラ)村　易國間㊦〒　下風呂〒　蛇浦

堤町　馬場町　徒士町　上組町　當番町　寺横町　六日町　長横町〒　二十八日町　柏崎所町　田向　稲荷町　上徒士町　本鍛冶町　山伏小路　三日町　岩泉町　十一日町　下組町

窪町　常海町　本徒士町　新荒町　二十三日町　鳥屋部町　鍛冶町　八日町　朔日町　下大工町　柏崎町　中居林　荒町　十三日町　大工町　十六日町　鷹匠小路　十八日町　塩町　類家

是川(コレカハ)村　㊦

小中野(コナカノ)村　㊦

湊(ミナト)村　湊通㊦〒　大久保

鮫(サメ)村　鮫通㊦〒　金濱

館(タテ)村　賣市㊦　前面木　根城　八幡　阪牛　櫛引　上野　澤里　沼館

十日市　松館

五戸(ゴノヘ)町　〒㊦

倉石(クライシ)村　中市㊦　石澤　又重

市川(イチカハ)村　㊦

川内(カハウチ)村　上市川㊦　切谷内

戸來(ヘライ)村　〒㊦

市町村名官公署電信郵便局

青森縣

縣廳位置 青森市字長島

管轄 陸奥國ノ内二市八郡

◎陸奥 青森市

青森市役所 新町
青森稅務署 浦町
青森警察署 新町
青森地方裁判所 長島
青森區裁判所 同
青森測候所 警察署内
青森縣水産試驗場 縣廳内
師範學校 濱打
女子師範學校 浦町
縣立青森中學校 造道
同同高等女學校 浦町
同同商業學校 濱打
市立青森工藝學校 橋本

松森町　博勞町　大町　新町〒　鍛冶町　莨町　安方町〒　濱町〒　大工町　蜆貝町〒　大野字長島〒　瀧内字古川

新安方町　柳町　堤町　新蜆貝町　米町　寺町　鹽町　榮町〒　造道字濱打　浦町

◎陸奥 弘前市

弘前市役所 元寺町
弘前稅務署 奈良町
同小林區署 住吉町
弘前警察署 元寺町
弘前區裁判所 本町
第八師團司令部 富田町
歩兵第四旅團司令部 同町

弘前聯隊區司令部 同町
同憲兵隊 同町
同陸軍兵器支廠 下白銀町
野砲兵第八聯隊 富田町
縣立弘前中學校 新寺町
同同高等女學校 藏主町
同工業學校 下銀白町

元寺町　北横町　植田町　上瓦ヶ町　阪本町　總田町　一番町　笹森町　上鞘師町　茶畑町　綠町　中瓦ヶ町　南柳町　山下町　徒町　元寺町小路　下白銀町　百石町　田町　春日町　馬屋町　平岡町　濱ノ町〒　發町　茂森町〒　茂森新町　古堀新割町　土手町〒　新品川町　新鍛冶町　南川端町　和徳町〒　富田町〒

百石町小路　茶畑新割町　萱町　北瓦ヶ町　田代町　北柳町　徒町川端町　藏主町　鐵砲町　田茂木町　代官町　南瓦ヶ町　西川岸町　南横町　親方町　下鞘師町　長阪町　東長町　大浦町　若黨町　馬喰町　新町　在府町　塩分町　元大工町　森町　新寺町　山道町　桶屋町　楮町　禰宜町　龜甲町　小人町

鷹匠町〒　本町〒　元長町　覺仙町　古堀町　北新寺町　住吉町　北川端町　松森町　富田新町　西茂森町

西大工町　五十石町　品川町　鍛冶町　銅屋町　新寺町新割町　新楮町　駒越町　紺屋町　相良町　上白銀町

陸奥國東津輕郡

青森大林區署 瀧内村
同小林區署 同村
内眞部小林區署 奥内村
蟹田小林區署 蟹田村
増川小林區署 三厩村
青森警察署小湊分署 中平内村
同蟹田分署 蟹田村
青森區裁判所蟹田出張所 蟹田村
同小湊出張所 中平内村
同今別出張所 今別村
青森聯隊區司令部 筒井村
歩兵第五聯隊 同村
第二區癩療養所北部保養院 新城村

新城村（シンジヤウ） 新城㋲　石江〒　岡町　戸門　鶴阪

大野村（オホノ） 大野㋲　細越　安田

筒井村（ツツヰ） 筒井㋲　幸畑　濱田

瀧内村（タキウチ） 沖舘㋲　新田　三内　古川　西瀧　濱舘

造道村（ツクリミチ） 小柳㋲　澤山　古舘　濱田　八重田　戸山　駒籠　松森　田屋敷　淺道

原別村（ハラベツ） 原別㋲　平新田　築木舘　桑原　八幡林　矢田前　諏訪澤　後萢　戸崎　泉野

東嶽村（アヅマダケ） 宮田㋲　馬屋尻　瀧澤　三本木　矢田

野内村（ノナイ） 久栗阪㋲　野内〒　淺虫〒

西平内村（ニシヒラナイ） 山口㋲　増田　中野　濱打　稻生　藤澤　小豆澤　土屋　茂浦

中平内村（ナカヒラナイ） 小湊㋲〒　福島　淺所　白砂　沼舘　内童子　盛田　福舘　東田澤　東澤　濱子　田茂木

東平内村（ヒガシヒラナイ） 清水川㋲　狩場澤　松野木　口廣　藥師野　外童子

荒川村（アラカハ） 荒川㋲　上野〒　大別内　八ツ役　野木　金濱

横内村（ヨコウチ） 横内㋲　四ツ石　雲谷　新町野　野茂木野　野尻　大矢澤　合子澤　牛舘

高田村（タカタ） 高田㋲　入内　野澤　小舘　大谷　小畑澤

油川町（アブラカハ） 油川㋲〒　羽白

奥内村（オクナイ） 奥内㋲　前田　内眞部　西田澤　清水　飛鳥　瀬戸子

岩渡　孫内

蓬田村（ヨモギタ）

後潟村（ウシロガタ）

一本木村（イツポンギ）

蟹田村（カニタ）

平舘村（タヒラダテ）

今別村（イマベツ）

三厩村（ミウマヤ）

陸奥國（西津輕郡）

鰺ヶ澤小林區署
深浦小林區署
鰺ヶ澤稅務署
鰺ヶ澤警察署
同木造分署
弘前區裁判所
同深浦出張所
同木造出張所
同車力出張所

鰺ヶ澤町（アヂガサハ）

木造町（キツクリ）

稻垣村（イナガキ）

大戸瀬村（オホドセ） 關村㋲　風合瀬　北金澤〒　柳田　驫木〒　岩阪

深浦村（フカウラ） 深浦㋲〒　追良瀬　月屋　廣戸　横磯　艫作

岩崎村（イハサキ） 岩崎㋲〒　澤邊　久田　大間越〒　黒崎　正道尻　森山　松神

陸奥國中津輕郡

岩木村（イハキ） 新岡　新法師　常盤野　葛原　百澤〒　松代

裾野村（スソノ） 大森㋲〒　鬼澤　十面澤　貝澤　楢木　十腰内

藤代村（フヂシロ） 船水㋲　土堂　島田　町田　三世寺　藤代　石渡　瀧中　中崎　大川

新和村（ニヒワ） 種市㋲　青女子　三和　小友　笹舘

同柏木町出張所 柏木町村
同藏舘出張所 藏舘村
同藤崎出張所 藤崎村
青森縣農事試驗場 黒石町

黒石町（クロイシ） 市ノ町㋲　内町〒　寺町　甲裏町　中町　濱町　片裏町　油横町　元町　甲大工町　乙大工町　甲徳兵衛町　前町　山形町　鍛冶町　馬喰町　横町　乙裏町　寺小路　上町　大板町

猿賀村（サルガ） 八幡崎㋲　大袋　蒲山　猿賀　中佐渡　西野曾江　日沼　新山　原　長田

山形村（ヤマガタ） 花卷㋲　牡丹平　豐岡　上山形　南中野　坂留　沖浦　石名阪　下山形　温湯〒　大河原　二庄内　袋

六郷村（ロクガウ） 高舘㋲　三島　上十川　竹鼻　赤阪　二子

五郷村（ゴガウ）

女鹿澤村（メガサハ）

富木舘村（トミキダテ）

野澤村（ノザハ）

〒郵便電信局

（上段・切れ）……八甲宜屋道寺大工分府喰鬣浦長阪緒師方横川岸瓦ケ宮茂木砲主川端柳代瓦ケ畑新割石町小路白銀主寺田白銀 町

字長島管轄 陸奥國ノ内二市八郡

鷹匠町〒　本町〶　元長町　蓬仙町　古堀町　北新寺町　任吉町　北川端町　松森町　富田新町　西茂森町
西大工町　五十石町　品川町　鍛冶町　銅屋町　新寺町新割町　新楮町　駒越町　紺屋町　相良町　上白銀町

陸奥國東津輕郡

青森大林區署　瀧內村
同小林區署　同村
內眞部小林區署　奥內村
蟹田小林區署　蟹田村
增川小林區署　三厩村
青森警察署小湊分署　中平內村
同蟹田分署　蟹田村
青森區裁判所蟹田出張所　蟹田村
同小湊出張所　中平內村
同今別出張所　今別村
青森聯隊區司令部　筒井村
步兵第五聯隊　同村
第二區癩療養所北部保養院　新城村

新城村（新城㋳　石江〒　岡町　戶門　鶴阪）
大野村（大野㋳　細越　安田）
筒井村（筒井㋳　幸畑　濱田）
瀧內村（沖舘㋳　新田　三內　古川　西瀧　濱舘）

（岩渡　孫內）
造道村（小柳㋳　澤山　古舘　濱舘　八重田　戶山　駒籠　松森　田屋敷　造道）
原別村（原別㋳　平新田　築木館　桑原　八幡林　矢田前　諏訪澤　後萢　戶崎　泉野）
東嶽村（宮田㋳　馬屋尻　瀧澤　三本木　矢田）
野內村（久栗坂㋳　野內〒　淺虫〶）
西平內村（山口㋳　增田　中野　浪打　稻生　藤澤　小豆澤　土屋　茂浦）
中平內村（小湊㋳〶　福館　淺所　白砂　沼館　內童子　盛田　東瀧　東田澤　濱子　田茂木）
東平內村（清水川㋳　狩場澤　松野木　口廣　藥師野　外童子）
荒川村（荒川㋳　上野〒　大別內　八ツ役　野木　金澤）
橫內村（橫內㋳　四ツ石　雲谷　新町野　野茂木　野尻　大矢澤　合子澤　牛舘）
高田村（高田㋳　入內　野澤　小館　大谷　小畑澤）
油川町（油川㋳〶　羽白）
奥內村（奥內㋳　前田　內眞部　西田澤　清水　飛鳥　瀨戶子）

蓬田村（蓬田㋳　瀨邊地　長科　阿彌陀川　廣瀨　鄉澤　中澤）
後潟村（六枚橋㋳　四戶橋　小橋　後潟〒　左堰）
一本木村〶㋳
蟹田村（蟹田㋳　中師　小國　大平　石濱〶　山本　南澤）
平館村（根岸㋳〶　石崎　今津　平館　野田　石濱）
今別村（今別㋳〶　大川平　鍋田　濱名）
三厩村（三厩㋳〶　增川　宇鐵）

陸奥國西津輕郡

鰺ケ澤小林區署　同町
深浦小林區署　深浦村
鰺ケ澤稅務署　鰺ケ澤町
鰺ケ澤警察署　同町
同木造分署　木造町
弘前區裁判所鰺ケ澤出張所　鰺ケ澤町
同深浦出張所　深浦村
同木造出張所　木造町
同車力出張所　車力村

鰺ケ澤町（本町㋳〶　田中町　新地町　漁師町　富根町　七ツ石町　米町　濱町　釣町　新地町　淀町）
木造町〶㋳
稻垣村（沼崎㋳　吉出　福富　豐沼〶　館川）

（下繁田　穗積　千年　繁田）
館岡村（館岡㋳〒　大湯町　筒木阪　龜ケ岡　平瀧　蓮植）
出精村（林㋳　野里　出野　大畑　永田　下遠山里　兼館　善積　土瀧　蓮華田）
川除村（川除㋳　小曲　蘆沼　豐田　蓮川）
柏村（桑野木田㋳　上古川　鷺阪　玉水　下古川　廣須　稻盛）
車力村（車力㋳〒　下牛潟　豐富　牛潟　下車力　富萢）
十三村〶㋳
水元村（廻堰㋳　野木　尾原　木筒　妙堂崎）
柴田村（柴田㋳　千代田　福原　中館　菊川　瀧川）
森田村（森田㋳〒　大館　山田　上相野　床舞　中田　下相野）
越水村（越水㋳　三ツ館　吹原　福原　丸山）
舞戶村〒㋳
鳴澤村（南浮田　北浮田　建石㋳　湯船　小屋敷　出來島）
中村（中㋳　長平　濱橫澤　蘆萢）
赤石村（赤石㋳　館前　小森　鬼袋　南金澤　日照田　深谷　一ツ森　種里　姥袋）

中川村（川山㋳　田川　長橋　沖飯詰　新宮　種井　櫻田）
嘉瀨村（嘉瀨㋳　長富　毘沙門　中柏木）
喜良市村〒㋳
金木町（金木㋳〶　蒔田　川倉　神原　藤枝）
武田村（宮野㋳　豐島　福浦　田茂木　豐蘆　長泥　野岡）
脇元村（脇元㋳〒　磯松）
相內村（相內㋳〶　太田）
內潟村（薄市㋳　高根　尾別　今泉）
中里村（中里㋳〶　深鄉田　宮ノ澤　八幡　大澤內　宮川）
小泊村〶㋳

陸奥國上北郡

七戶稅務署　同町
野邊地小林區署　野邊地町
三本木小林區署　法奥澤村
橫濱小林區署　橫濱村
七戶警察署　七戶町
同野邊地分署　野邊地町
同三本木分署　三本木町
青森區裁判所野邊地出張所　野邊地町
同七戶出張所　七戶町
同甲地出張所　甲地村

（左欄）

……和子市㋳　寺田町　堂㋳　澤澤㋳〒　野師岡……
小笹　友館　大中瀧石藤　川崎中渡代　十楷　腰貝　內木澤　松代　百葛　澤〒　原

同柏木町出張所　柏木町村
同藏館出張所　藏館村
同藤崎出張所　藤崎村
青森縣農事試驗場　黑石町
黑石町（市ノ町㋳　內町〶　寺町　甲裏町　中町　濱町　片裏町　油橫町　元町　甲大工町　乙大工町　甲……町　前町　山形町　鍛冶町　馬喰町　橫町　乙裏町　寺小路　上町　大板町）

猿賀村（八幡崎㋳　大袋　浦田　猿賀　中佐渡　西野曾江　日沼　新山　原田　長田）
山形村（花卷㋳　牡丹平　豐岡　上山形　南中野　坂留　沖浦　石名阪　下山形　溫湯〒　大河原　二庄內　袋）
六鄉村（高舘㋳　三島　上十川　竹鼻　赤坂　二子……）

五鄉村（本鄉㋳　中野　北野　細野　吉內　相澤）
女鹿澤村（下十川㋳　女鹿澤　增館）
富木館村（水木㋳　久井名館　富柳　福館）
野澤村（樽澤㋳　銀　山鄉　前田　吉野田）
（高屋敷㋳……）

縣立農學校　五所川原町
五所川原町〶㋳
飯詰村（飯詰㋳〒　下岩崎）
松島村（吹畑㋳　金山　米田　石岡　唐笠柳　大刀打　一野坪　漆川　水野尾）
長橋村（神山㋳　野里　……　松野木……）

豐崎村（七崎㋳　豐間內　境澤）
淺田村（淺水㋳〒　扇田）
野澤村（西越㋳　手倉橋）

〶郵便電信局　〒郵便局　㋳役場

- 八戸區裁判所百石出張所　百石村
- 同三本木出張所　三本木町
- 縣立畜產學校　同町

- 七戸町 〶㋳
- 野邊地町：野邊地㋳〶、馬門、有戸
- 三本木町：三本木㋳〶、赤沼、切田
- 六ケ所村：平沼㋳〒、倉内、出戸、泊村〶、鷹架、尾駮
- 六戸村：犬落瀨㋳〒、上吉田、下吉田、鶴喰、柳町、小平、折茂
- 天間林村：天間舘㋳、榎林、附田、二森、野崎、中岫、花松
- 浦野館村：大浦㋳、上野、新館
- 大深内村：洞内㋳〒、深持、大澤田、立崎、八斗澤、馬洗場
- 四和村：米田㋳、奧瀨、大不動、傳法寺
- 藤阪村：相阪㋳〒、藤島
- 三澤村：三澤㋳〒、天ケ森
- 下田村 〒㋳
- 百石村 〒㋳

陸奥國下北郡

- 法奥澤村：奥瀨㋳〒、法量、澤田
- 甲地村 〒㋳
- 橫濱村 〶㋳

- 田名部稅務署　同町
- 川内小林區署　川内村
- 佐井小林區署　佐井村
- 大畑小林區署　大畑村
- 田名部警察署　田名部町
- 同大間分署　大奥村
- 青森區裁判所田名部出張所　田名部町
- 同大間出張所　大奥村
- 同川内出張所　川内村

- 田名部町：田名部㋳〶、關根、奥内、中野澤
- 脇野澤村：脇野澤㋳〶、小澤
- 川内町：川内㋳〶、檜川、宿野邊、蠣崎
- 東通村（㋳田名部）：野牛、岩屋〒、大利、目名、蒲野澤、砂子又、田屋、白糠、尻屋、尻勞、小田野澤〒、猿ケ森
- 大湊村：大湊㋳〶、大平、城ケ澤
- 大畑村：大畑㋳〶、正津川
- 風間浦村：易國間㋳〶、下風呂〶、蛇浦

陸奥國三戸郡

- 大奥村：大間㋳〶、奥戸
- 佐井村：佐井㋳〶、長後

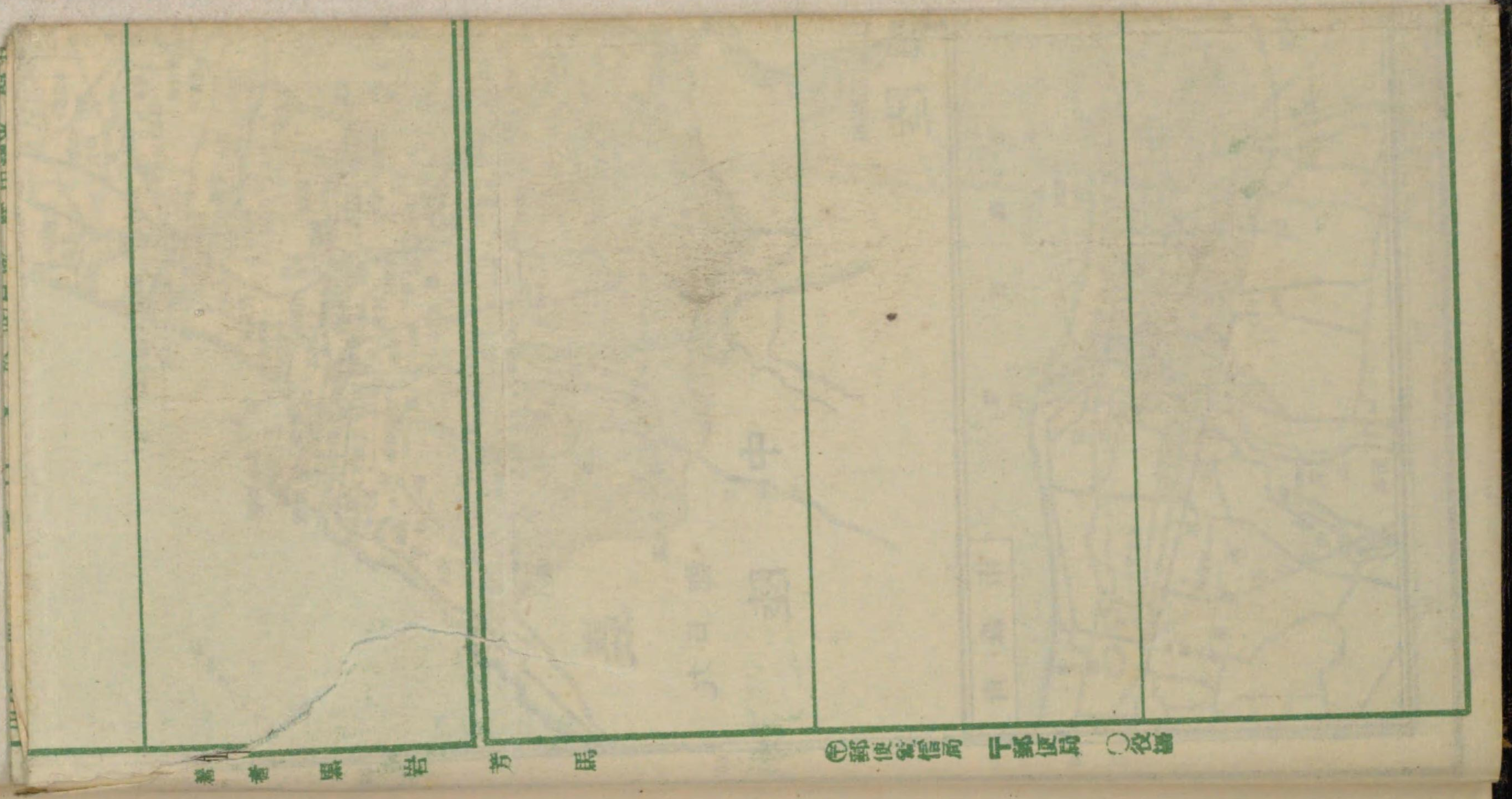
- 八戸稅務署　同町
- 三戸小林區署　田子村
- 八戸警察署　八戸町
- 同三戸分署　三戸町
- 同五戸分署　五戸村
- 八戸區裁判所　八戸町
- 同三戸出張所　三戸町
- 同五戸出張所　五戸村
- 同戸來出張所　戸來村
- 同田子出張所　田子村
- 同中澤出張所　中澤村
- 同劍吉出張所　北川村
- 縣立八戸中學校　八戸町
- 郡立實科高等女學校　同町
- 八戸町立工業徒弟學校　同町

- 八戸町：番町㋳、堀端町、堤町、馬場町、徒士町、上組町、當番町、寺橫町、六日町、長橫町〶、二十八日町、柏崎所町、田向、稻荷町、上徒士町、本鍛冶町、山伏小路、三日町、岩泉町、十一日町、下組町、八幡町、窪町、常海町、本徒士町、新荒町、二十三日町、鳥屋部町、鍛冶町、八日町、朔日町、下大工町、柏崎町、中居林、荒町、十三日町、大工町、十六日町、鷹匠小路、十八日町、塩町、類家

- 石手洗、森、塚
- 三戸町：在府小路町㋳、同心町、八日町、馬喰町、六日町、二日町〶、久慈町、川守田町、川守田村、梅内ノ内
- 田部村：福田㋳、法師岡、森越、杉澤、樺本、埖渡
- 中澤村：市野澤㋳〒、中野、泥障作、大森、泉清水
- 上長苗代村：尻内㋳〶、大佛、花崎、根岸、根市
- 下長苗代村：河原木㋳、石堂、長苗代
- 北川村：劍吉㋳〒、虎渡、斗賣
- 地引村：苫米地㋳、片岸、麥澤、小泉、高橋
- 島守村：島守㋳、頃卷澤
- 是川村 ㋳
- 小中野村 ㋳
- 湊村：濱通㋳〶、大久保
- 鮫村：濱通㋳〶、金濱
- 館村：賣市㋳、前面木、根城、八幡、阪牛、櫛引、上野、澤里、沼館

- 階上村：角柄折㋳、平内、田代〶、晴山澤、鳥屋部、金山澤、赤保内、道佛
- 名久井村：上名久井㋳、下名久井、平、高瀨、法光寺、鳥舌内、鳥谷
- 留崎村：梅内㋳、泉山、目時
- 斗川村：斗川㋳、豐川
- 猿邊村：貝守㋳、蛇沼、椿田
- 田子村：田子㋳〒、相米
- 上郷村：石龜㋳、原、茂市、山口、關〒、夏阪、遠瀨
- 平良崎村：沖田面㋳、玉掛、相内、赤石
- 向村：大向㋳〒、小向
- 大館村：新井田㋳、妙、十日市、松館
- 五戸町 〶㋳
- 倉石村：中市㋳、石澤、又重
- 市川村 ㋳
- 川内村：上市川㋳、切谷内
- 戸來村 〒㋳

〶郵便電信局　〒郵便局　㋳役場



(十和田湖) 六方石と操の崎

（淺虫溫泉名所）東北大學臨海實驗所並水族館全景

合浦公園（青森市）

青森縣遊覽指針　目次

青森縣小史……一
總　說……一
阿倍比羅夫の征討　伊治呰麿の亂　田村將軍の大討伐　貳薩體の蝦夷叛す　元慶の亂と津輕夷　奧羽の豪族——安部氏——清原氏——藤原氏　平泉の報復戰　津輕南部の管領者——安東氏——曾我氏——工藤氏——南部氏——盛岡南部氏——八戸南部氏——後の八戸氏　鎌倉時代の末期より津輕爲信の一統まで——鎌倉の殘黨平ぐ——浪岡北畠氏　南部の三分族——大浦——大光寺——堤氏　津輕爲信の獨立——南部信直の苦心　津輕藩政時代——信政の功績　南部氏藩政時代——八戸

氏の分封　明治の小沿革
名所舊蹟……………………………………一九
東津輕郡（外ヶ濱）……………………………一九
青森市　青森舊陣屋跡　善知鳥神社　合浦公園　神社佛閣　青森市から八
甲田へ——八甲田から十和田湖へ　歩兵第五聯隊　妙見堂　横内城址　青森
水道　雪中行軍遭難記念碑　淺虫温泉——泉質——附近名勝——臨海實驗所
烏頭前の梯　野内村の石油タンク　平内の郷　雷電宮と白鳥　東田澤の椿山
豆坂と津輕坂　新城村と北部保養院　油川町　阿彌陀川　蓬田城址　玉松臺
蟹田村　平舘　野田の玉川　裴月　今別　三厩港　算用師越　宇鐵の
鮑　龍飛の景
西津輕郡（鼻和郡）……………………………三三
鰺ヶ澤町　種里城址　八幡宮　海藏寺址　大戸瀬、小戸瀬——古跡の多い關
村　深浦港——深浦みず漬　岩崎の景勝　十二湖　森田の竪穴　木造と新
田　屛風山　龜ヶ岡城址　十三湖
南津輕郡（平賀、田舍の郡）………………四一
黑石町　浪岡名所——城址——八幡宮——西光院　藤崎町——城址——堰神福田
宮　模範村光田寺　奥の身延　淺瀬石川の沿革　温湯温泉　中野の紅葉
板留温泉　黑森山　河南大平賀の郷　温泉——大鰐——阿闍羅山　藏館
國寶大日如來と萩桂　碇ヶ關　國上寺　平河の河鹿　城址古舘——大光寺城
址——田舍館城址——石川楯　縣社猿賀神社　乳井の毘沙門堂　柏木の郷

北津輕郡（宇麻江流末郡）……五一
五所川原町　高舘城址　金木町　十三福嶋城安東氏の居舘　今泉と相内
小泊港　權現岬　梵珠山　松倉神社　七和村　高野の千坊　舘野越
板柳町　鄕社海龍神社
中津輕郡（平賀、鼻和の郡）……五五
弘前城（大手城）——築城——城郭——公園　弘前市——神社——寺院　岩木山——
岩木山神社——お山參詣　高照神社　城址古蹟　大浦城　堀越城　和德城
福村城址　宮舘と中別所　高舘　岩木川　目屋溪　乳穗ケ瀧　津輕山革
秀寺　護國山久渡寺　長慶天皇御山陵（參考地）
下北郡（北郡、又斗南半嶋）……六四
田名部町　近川開墾地　恐山（宇曾利湖）　地藏堂　大畑村　優婆堂　風
間浦　下風呂温泉　大奥村　奥戸の牧　佐井村　矢越の岬　佛ケ浦
大湊村　城ケ澤　川内町　蠣崎城址　安部城鑛山　脇野澤村　東通村
尻屋の燈臺　白糠港
上北郡（北郡、海上郡）……七三
七戸町　七戸城址　法蓮寺　三本木町　太素塚　相坂孵化場　野邊地町
公園と競馬場　馬門温泉　十符の浦　壺の石文　尾鮫の牧　泊漁港　小
河原沼　氣比神社　十和田湖——日暮の崎——御占塲——自籠森の入江——休屋
（十和田神社）十和田道——奥入瀨口——八甲田越——蔦温泉——淺瀨石口——小坂口
——毛馬内口

三戸郡（貳薩體、糠部）……八五
八戸町　八戸城址　公園と三八城神社　南宗寺　根城址　櫛引八幡宮
矢倉の懸崖　湊　舘鼻の遠景　鮫港　蕪嶋の鷗　鮫の野　恵比須濱
南方海岸　金山澤洞窟　相内の觀音　田子の舘　石龜　劍吉　淺水
五戸町　新井田城址　對泉院　松舘溪流　嶋守溪　三戸町　三戸城址
唐馬の碑　住谷野の牧　長慶天皇行宮址　長谷寺　應物寺の燈明臺

現況大要……九四

土　地
地勢　山脈　山岳　河川　港灣　湖沼　耕地　原野

產　業
農業―米作―麥作―林檎―藁工品―養蠶―林業―畜產業―鑛業
水產業―工業―商業―交通―運輸―國道―縣道―鐵道―海路　學事―社寺―新聞―圖書舘　神社佛閣―神社―寺院―諸教會

目次【終り】

青森縣小史

總説

青森縣は陸奥國から二戸郡を除いた全部であつて今は二市八郡を包括して居る。舊陸奥國は以前は磐城岩代以北の總稱であつたが明治元年、陸前、陸中、陸奥の三國に分割され出羽の羽前、羽後と相對稱する事となつた。

本縣は地勢上早くから八甲田山系を境として東西別々に發達した、即ち東部は古來より糠部（ヌカノブ）の地と稱され、夫れより先には閉伊、貳薩體、都母等の名を傳へ、北上河以北の麁蝦夷の棲窟であつたが、文治建久以後（一一九〇年）南部氏の支配下に屬した。西部は津輕（津刈又は東日流と書す）と稱し津輕蝦夷に占據され、元慶以後（八七八年）和夷の雜居行はれるに及び俘囚族の統率する所となり、承久以後（一二二二年）鎌倉の御家人曾我氏と俘囚長安東氏の支配する所となつた。

奥　羽　蝦夷の叛亂に關しては正史詳しく之を記述し一々列擧するを要せぬ、左に其の梗概を載せる事とする。

阿倍比羅夫の征討　蝦夷地の争乱及び征討の中で最も著名な者は阿倍比羅夫の肅愼人征服であつて當時水軍百八十艘が津輕の有間の濱に上陸して蝦夷を饗し、郡領を置いて歸つたと日本書記齊明記に詳説して居る

伊治の呰麿の乱　光仁天皇寶龜十一年、陸奥上治郡の大守伊治の呰麿（アダマロ）反して按察使紀廣純を殺し、多賀城を襲うて軍糧を奪ひ、大亂となつた、朝廷苦心の結果翌天應元年辛うじて之を鎭定した

田村將軍の大討伐　桓武天皇延曆二年、出羽の夷人叛き、更に七年には陸奥膽澤の夷首阿低利爲（アテリヰ）の叛となつて形勢は重大となつた、是に於て朝廷は紀ノ古佐美を征夷大將軍とし兵五萬二千餘を授けて討伐に向はしめたが戰績思はしからず、滿廷震駭して更に大規模の計畫を立て、延曆十年十萬の大兵を派遣した、軍の大將は征夷大使大伴弟麿、副使坂上田村麿である、討伐は延曆十一年から始まり、十三年には悉く之を平定した。

貳薩體の蝦夷叛す　其の後十七年目の弘仁二年に閉伊（ヘイ）、貳薩體（ニサタイ）の蝦夷が叛いた、貳薩體の地は今の三戸郡地方であると言ふ、朝廷は文室綿麿（ブンヤノワタマロ）を按察使として之を討平せしめた、敗退した貳薩體の夷首は都母（ツボ）蝦夷と合して閉伊の蝦夷を誘ひ形勢侮るべからざる者あつたが出羽の蝦夷を先陣として餘賊を討平した、都母は坪

又は壺と書し今の上北郡地方に當ると言ふ。

元慶の乱と津輕夷　貳薩體、閉伊の蝦夷か討滅されてから夷地は暫く平穩に過ぎたが陽成天皇、元慶二年に秋田の蝦夷叛き官府を燒き、吏人を殺し、終に大乱となつた、幸に藤原保則、小野春風等に依て鎭定されたが此の時朝廷の最も憂慮したのは津輕の蝦夷が此の乱に加はる事であつた。

奥羽の豪族（安倍、清原 藤原の興亡）

强大な勢力を有し、勇猛他に比なしと畏怖されて來た津輕の蝦夷は一面に文化の度も高く既に王朝に歸服して居たと見え、數百年間、一度も叛亂を起す樣の事はなかつた、元慶の亂後難を津輕に避ける者多く、爾來和夷の同化が盛んに行はれた、其他の陸奥、出羽地方に於ても叛亂は止み、土豪が漸次地歩を占め終に俘囚長安倍氏の如き勢力者を生ずるに至つた。

安倍氏　の祖先は崇神天皇の兄大毘古命であるとも稱し又長髓彦の兄安日（アビ）長髓彦であるとも傳へらる、寶龜の頃高丸と言ふがあり羽州鎭狄將軍となり爾來奥羽に居住して勢力を占め賴時、貞任に至つたと言ふ、天喜二年（一〇五四年）賴時謀反して源賴義、義家に對抗し九年を經て康平五年、遂に滅亡した、然るに貞任の遺孤、

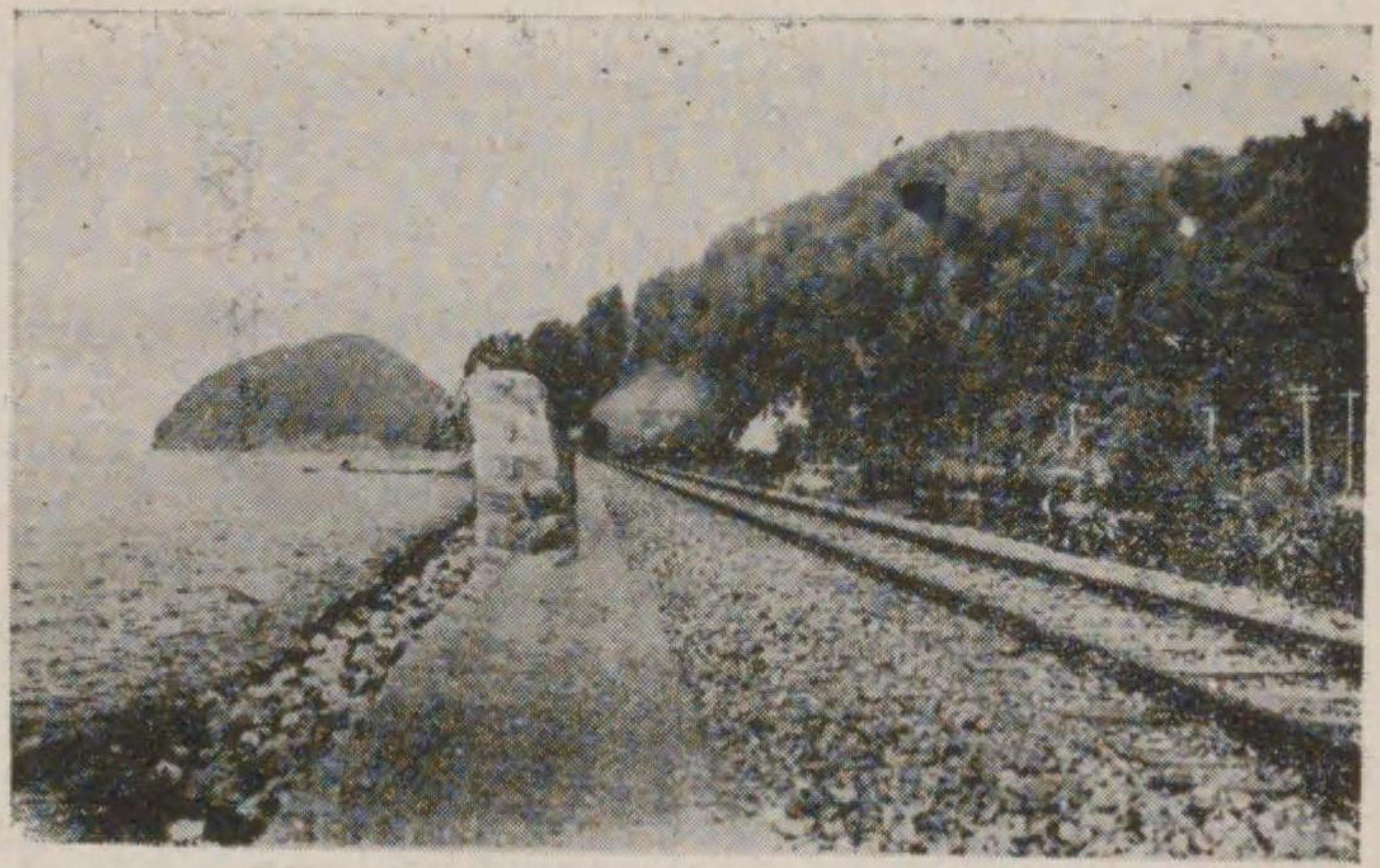
高星丸（タカアキ）當時三歳、乳母懷いて津輕藤崎に逃れ、長じて此處に築き、子孫安東又は下國姓を稱し、津輕より、松前秋田等に繁衍した、今三春の秋田子爵家は其の後胤である。

清原氏　安倍氏の根據地は衣川と厨川とであつた、頼義父子は難戰苦鬪したが俄に捷つことを得ず當時仙北金澤に根據を構ゐて居た清原武則の援助を得て辛くも討平した、武則は功に依つて陸奥、出羽の鎭守府將軍となつた、其の後清原氏は同族間に不和を生じて所謂後三年の役となり、寛治元年脆くも滅亡して藤原氏が之に代はる事となつた

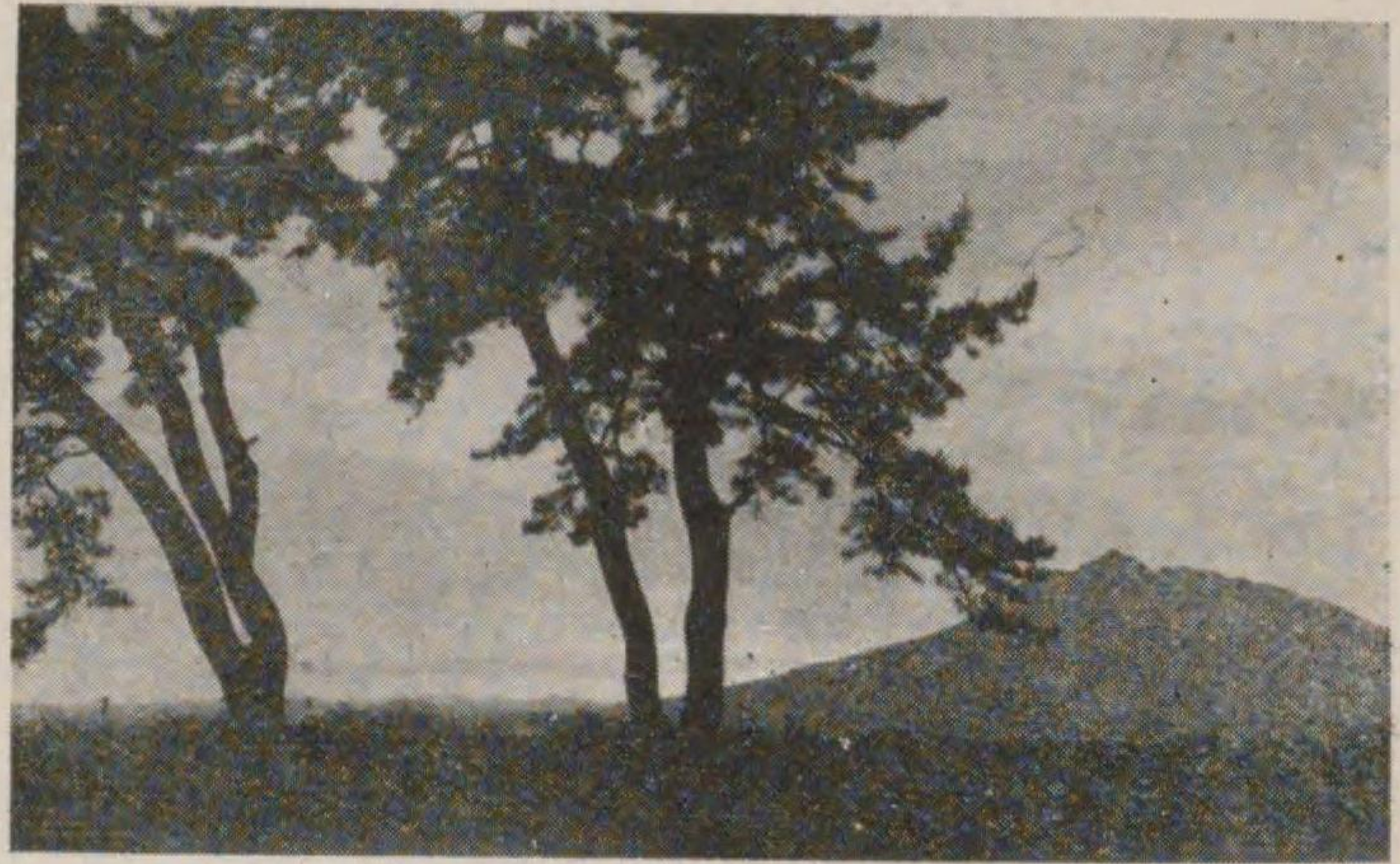
藤原氏　俵藤太秀鄕の後と言ふ、久しく奥羽に居住し、安倍、清原兩氏と婚し、俘囚の混血となつて居る藤原經清の妻中一ノ前は安倍頼時の長女である、經清、安倍に黨して戰死し、中一ノ前は美人であつたので二歳の子清衡を伴つて清原武貞に再縁した、淸衡が長じて後清原家に不和が起り大亂となつた時能く大義を辨へて源義家に加擔したので遂に清原家沒後の奥羽に於ける勢力を把握する事になり、庚和年中、江刺（エサシ）郡豐田城から移つて岩井郡平泉を經營した、其子基衡、孫秀衡に至り最も榮ゐたが、曾孫泰衡に至り、文治五年九月亡んだ。

平泉の報復戰

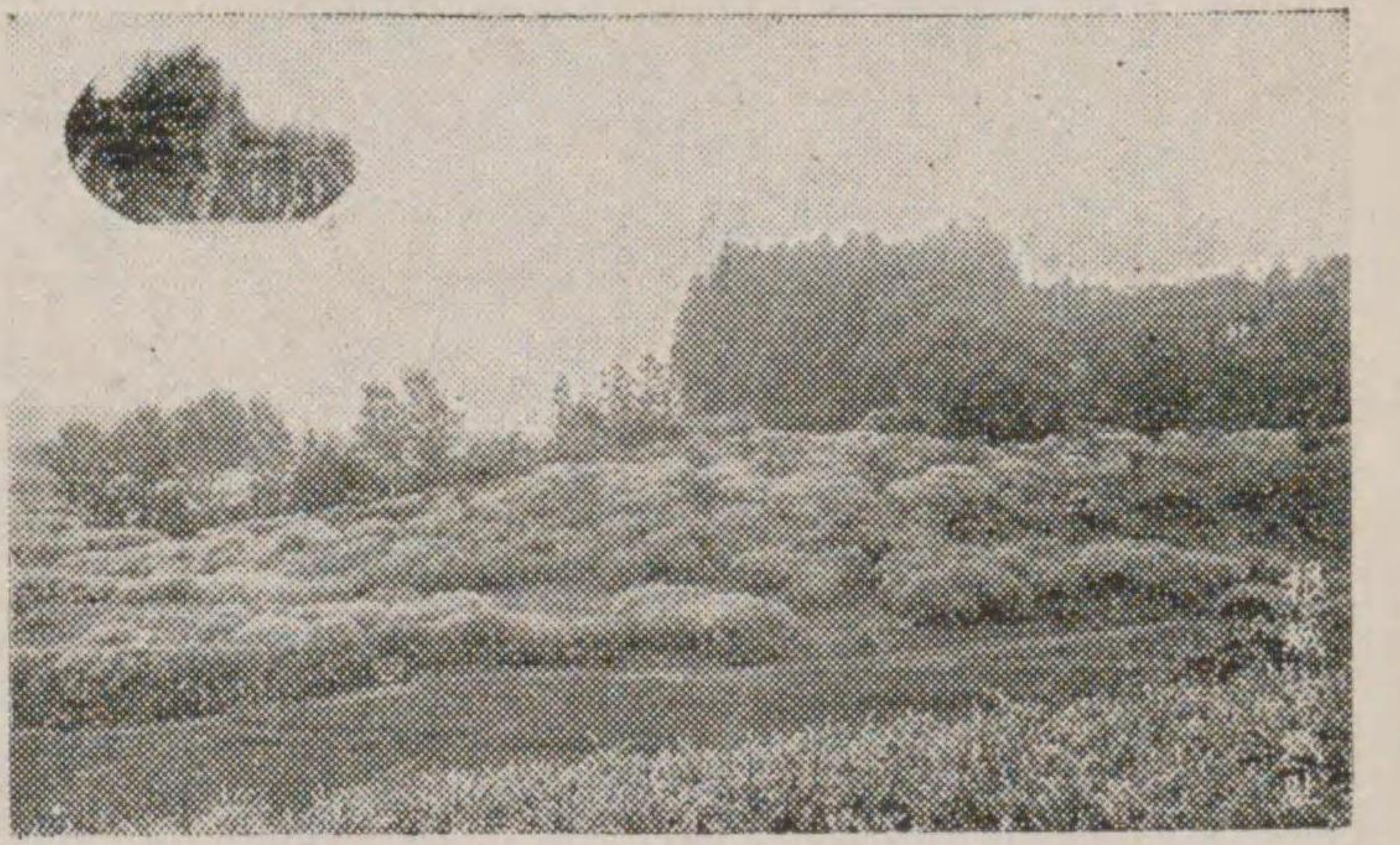
（大河兼任の亂）



鳥頭前の梯（東津輕郡野内村）



藤崎城址（南津輕郡藤崎町）



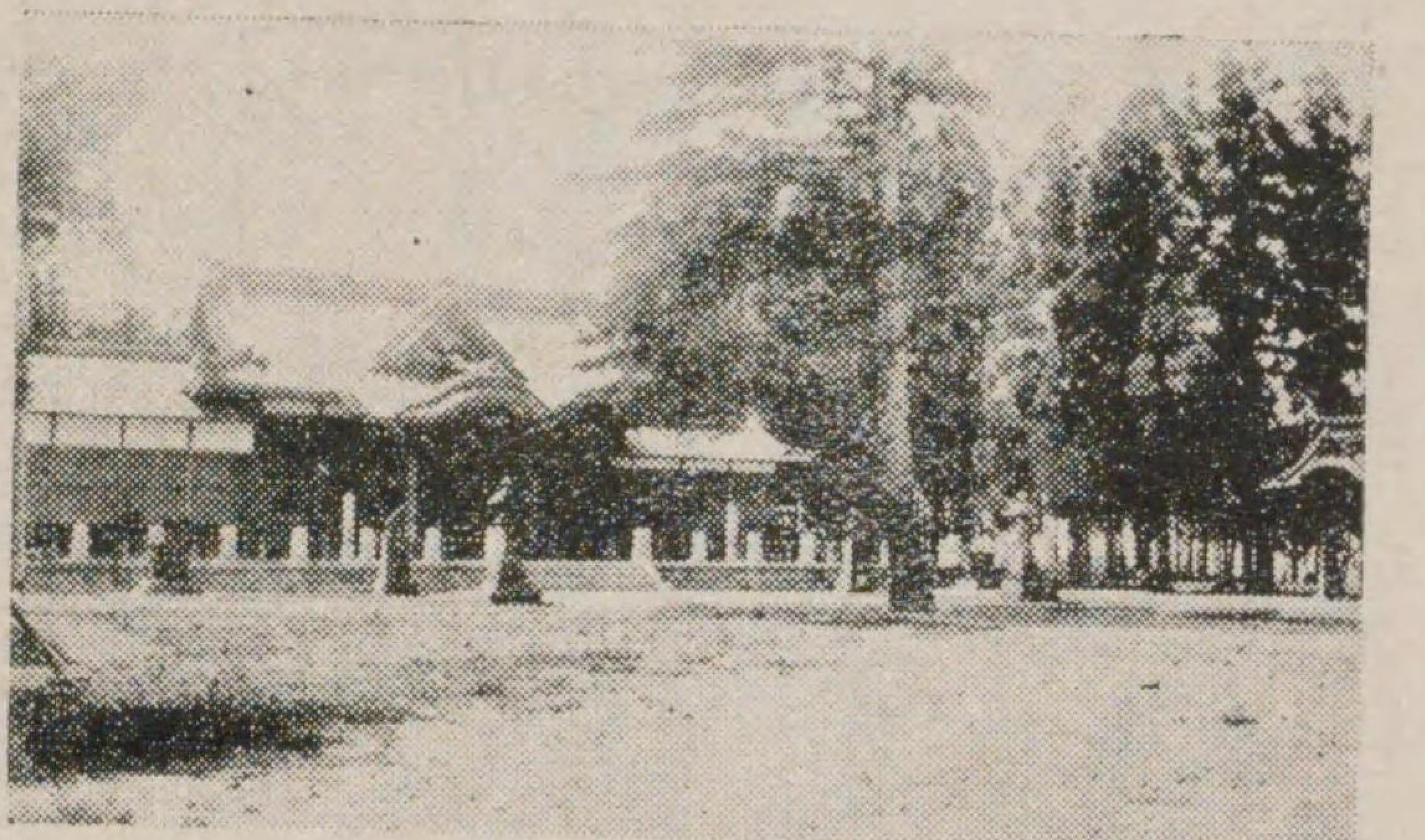
根城古城(H)址

平泉九十餘年の榮華は秋草の露と共に消ゑた、然し藤原家數代の恩顧を蒙つた奥羽の大丈夫の中一人の主家を弔ふ熱血兒が無い筈は無い、果然此の年の極月、胡馬朔風に嘶き、翌六年正月、藤原家の世臣大河次郎兼任が一族を率ゐて旗揚したとの報は櫛の齒を布くが如く鎌倉に注進された、兼任は八郎潟で大軍を失つたが屈せず、由利八郎を破つて之を斬り、小鹿島の橘公成を走らし、津輕に侵入して宇佐美實政を殺し、進んで糠部に入り、南下して栗原一ノ迫（ハザマ）に進軍した時は殆んど無人の境を進むの概があつた、鎌倉は此の注進を聞いて震蕩し、千葉常胤、足利義兼を始め十餘名の大將に數萬の兵を授けて之を攻めた、衆寡敵せず兼任の軍敗れ平泉、衣川に防戰して又破られ、終に逃亡して外ヶ濱と糠部の間、多宇末井（タウマ井）の險を阨して防戰したが永く支ゑる事が出來ず、又逃げて秋田の山本に至つて殺され、平泉の回復戰は空しく悲愴な最後を遂げた、
以上は東鑑に詳細記述されて居る、書中の『多宇末井』は今淺虫のトンネルの在る所で本縣の最古戰場である。

津輕、南部の管領者

安　東、曾　我、工　藤、南　部

平泉藤原氏　が勃興しつゝある間に是より先津輕藤崎に逃げ匿れた安倍高星丸は成長して同地に城を築



縣社三八城神社（三戸郡八戸町）

北畠城址（南津輕郡浪岡村）

き、附近の夷俘を糾合して日增勢力を張るに至つた、孫貞季に至り安東太郎と稱し、又日下（ヒノモト）將軍外ヶ濱殿などの尊號を受け津輕全郡に威力を振ふた、其子堯季（別に季信と云ふ）北條義時から蝦夷管領の補任狀を受けた、後百餘年北條氏の末年、元亨、嘉曆年中、安東家に內訌があり、延いて北條家との對戰となるに及び安東北條兩家の衰亡を來すべき原因となつた、建武中興の時、安東家は宮方と武家方の二派に分れ其の結果、安東の一族は秋田湊にも占據して後年秋田の全郡に威を振ふに至つた、津輕に於ける安東氏は後下國姓を稱し、應永より永享、嘉吉に至るまで南部氏と屢々戰ひ、終に敗れて蝦夷地渡島に渡海した、其の後下國氏は蝦夷地上ノ國（今の江差地方）から秋田の檜山に移り、津輕に侵入して回復戰を試みたが終に功を遂げる事は出來なかつた。

曾我氏

源賴朝が平泉藤原氏を亡ぼして後、功臣を各所に配置し、津輕には勇將宇佐美平治實政を留め、南部の厨川、不來方（コジカタ）地方は工藤小次郎行光に與へ、糠部地方を南部三郎光行に分封した、然も津輕に於ける宇佐美實政は大河兼任に殺されたので其後の代官として曾我小太郎眞光が津輕に入部したらしい、其の長子太郎兵衛尉助光は大光寺に次男小次郎惟重は岩楯に置かれ、二家相對して支配し、後元弘、建武の年に至り、大光寺の曾我氏は北條方に岩楯の曾我氏は勤王黨となつて激しく戰つた、其の後岩楯の曾我貞光は足利尊氏に屬し、宮方の八戸南部氏、鹿角の成田氏等と抗衡したが爾後の曾我家の事は全く傳はらない。

承久四年、北條義時から津輕の安東太郎季信と曾我五郎二郎惟重に與へた補任狀は津輕六郡の中

外三郡、興法（オキノリ）、江流澗（エルマ）、宇廲（ウマ）（京役）

は夷地は酋長舊に仍るとして蝦夷の管領者たる安東氏に委任し

内三郡、平賀（ヒラカ）、鼻和（ハナワ）、田舍（イナカ）（鎌倉役）

は收納力の多い地たるを以て曾我氏に管領せしめた者である。

工藤氏　岩手地方に於ける工藤氏は其の後子孫著るしく增殖し、橫溢して糠部に入り、三戶、八戶、七戶等に盤踞し、更に餘力は進んで津輕田舍郡地方に及んだ、唯建武中興の際岩手、糠部の工藤氏は鎌倉方に屬し、爲めに其の地を沒收されたが惟り、津輕田舍郡黑石鄕に居た工藤右衛門尉貞行は宮方に屬して南部師行と共に終始一貫して王事に勤めた

南部氏　南部家は八戶南部氏と三戶南部氏との二家に分れる、又八戶南部氏は前の八戶家と後の八戶家とは全然別流である、讀史者は先づ此の區別を明かにせねばならぬ。

本縣の東三郡、上北、下北、三戶郡は今も尙西部の津輕に對して南部と稱して居る、是は固よりの地名ではなく南部家が所領して居た所から自然地名ともなつたので斯る事は全國中にも多く類が無い。

盛岡南部氏 は新羅三郎源義光の後である、義光甲斐の地を賜り、四代の孫遠光に至り、三男三郎光行に巨摩郡南部の郷十八邑を分與した、光行因つて南部氏と稱した、治承四年、源頼朝、石橋山に兵を擧げて以來軍に從つて功あり、文治五年、頼朝が陸奧藤原泰衡を亡ぼすに及び功を以て糠部の地を與へられた、後子孫此の地に分據し、元弘元年、北條氏討伐の事あるや、南部茂時は北條方に屬し、軍敗れて高時と共に自殺し、糠部の所領は陸奧國衙の手に沒取された、其の弟信長勤王方となり、其の長子政行は北畠氏を援けて功あり云々と傳へらるゝも其の詳を得ない、政行の子守行、足利方に屬して勢力を得、勤王黨であつた八戸南部氏の所領の大部分を手に収め、三戸城に居り應永年中、秋田、津輕に於ける安東氏と戰ひ、永享年中に至り其の領土は岩手、津輕、秋田の各地に及んだ、是から義政、光政等を經て文明年中に至り一時衰へたが、明應年中、南部信時出でて四方を經略し、再び南部、津輕の全部に勢力を振ふに至つた、是から津輕は南部の一族及び同家が支持する北畠家の支配を受け、津輕爲信の一統に至るまで續いた。

八戸南部氏 南部光行の六男實長、甲州波木井の郷を授けられ、依つて波木井氏と稱した、僧日蓮の爲め身延山久遠寺を開いたのは此の人である、三代長繼に至り、津輕に安東氏の亂あり、命を受けて是が鎭定に當り爾來糠部に根據を置くに至つた、四代南部師行は又次郎と稱し、元弘三年十月、北畠顯家に從ひ國代となつて糠

部に入り、始めて城を八戸に築いた、顯家之を視して曰く是れ本州を蕩平する根本の城なりと、因つて根城と稱した、是より師行は津輕、糠部の凶徒を平げて大功を擧げたが後尊氏叛くに及び延元三年、北畠顯家に從ひ泉州石津に於て戰死した、其の子政長、孫信政、曾孫信光、政光等五代の間南朝の爲め苦節を盡したが、南北朝合一の當時足利方に屬した三戸南部氏の勢力に壓倒され、自然是が配下たるに至り、後年九戸の亂宗家南部氏危殆の時特に忠節を盡して南部信直を援けたが酬ゐらるゝ所なく、彌六郎直義に至り信直の子利直に迫られ、寛永四年八戸の根城を引渡して岩手領下遠野に移つた、師行が根城を築いて後約三百年後である。

後の八戸氏 南部利直の三男重直卒して子なく、遺臣等黨を立て五男重信、七男直房を擁立して相爭ひ、終に上裁を乞ふに至つた、將軍家綱、兩人を召し、南部十萬石中八萬石を重信に二萬石を直房に分與した、直房、八戸に築く、是れ後の八戸氏の祖である。

鎌倉時代の末期より

津輕爲信の一統まで

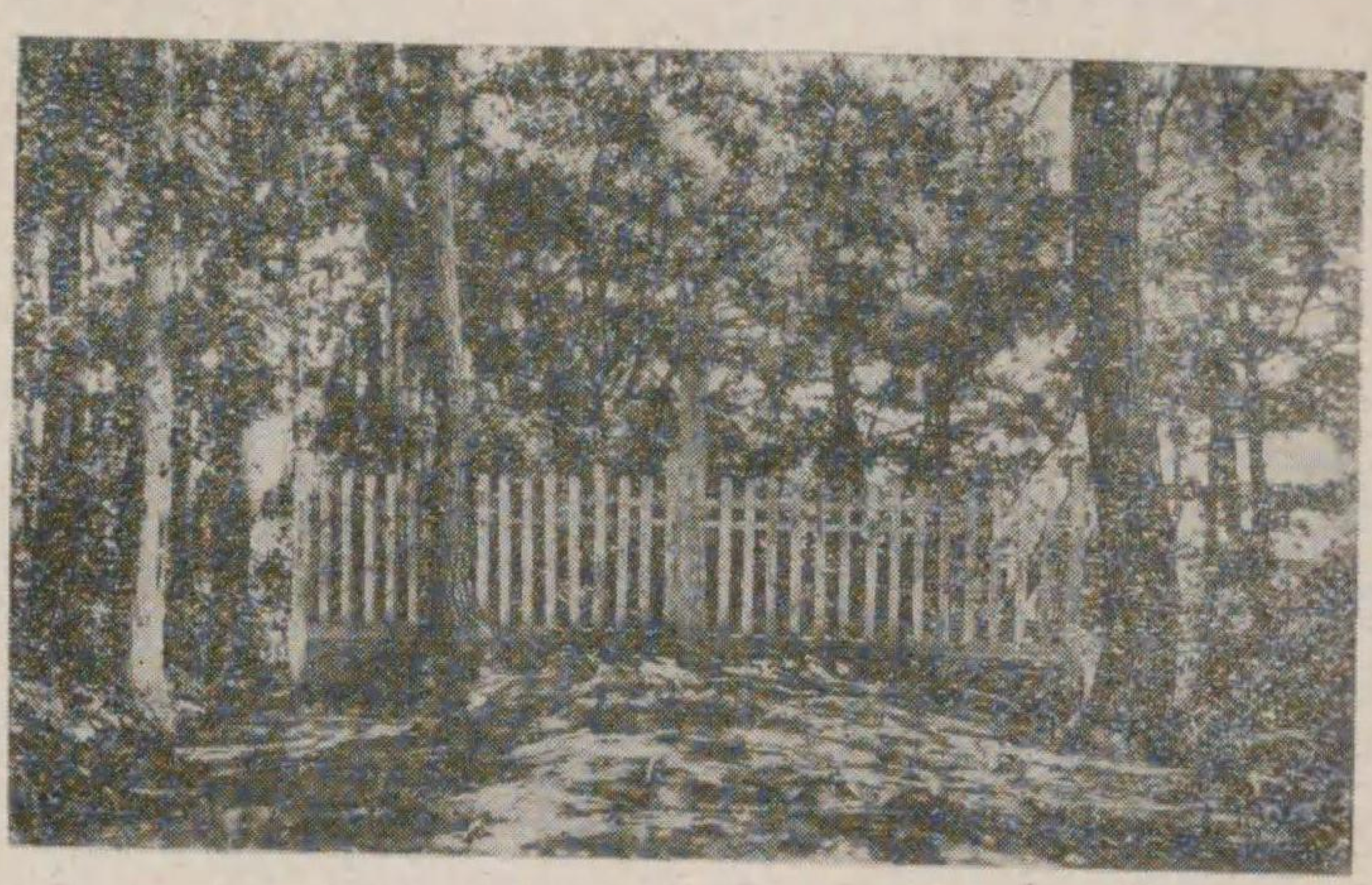
北條氏の執權時代 津輕と糠部の兩地には是と云ふ事變もなかつた、想ふに此の頃和人は頻りに繁榮し

て舊仵の夷人は漸次北遷を餘儀なくされたであらう、北條氏の末期、安東氏嫡庶二家に分れて戰ひ、北條氏兵を向けて命に服せざる兩家を討伐した時、安東軍は夷人を催して戰ひ、其の勢ひ猛烈で關東の大軍も苦戰したとある、是れ本土に於ける夷人が和人の壓迫に對する最後の反抗であつた

建武中興の際は岩手、糠部の工藤一族は皆北條方に屬し、津輕の曾我氏は宮方、武家方の二派に分れたが獨り安東氏は一族を擧げて宮方に屬した、是れ元享、嘉曆年中、北條家から兵を加へられたるに對する報復であらう。

鎌倉の殘黨平ぐ 元弘三年、北條氏亡び、王政古に復して陸奥國府再興され、北畠顯家國司に任ぜられた、當時津輕の曾我、工藤兩氏は宮方、武家方の二派に分れ、曾我氏は大光寺に工藤氏及び鎌倉の餘黨は石川楯持寄城等に寄つて皇軍に抗した、建武元年正月から十一月に至るまで各城を攻落し翌二年三月には行賞があり、一時少康を保つたが、十月足利尊氏叛くに及び、安東五郎二郎家季、曾我與一太郎貞光等之に應じ、延元元年には藤崎及び平內に戰が開かれ、爾來曾我貞光一族と八戸南部氏、鹿角成田氏との戰爭は興國四年まで八年間繼續したが其の結末は明かでない。

浪岡北畠氏 延元三年、北畠顯家が石津の露と消えてからは其の弟顯信が陸奥介鎭守府將軍を兼ね、奥羽



長慶天皇御陵址

横内城址（東津輕郡横內村）

津輕爲信の銅像（弘前市公園）

にたて興復を計つたが成らず其の子守親陸奥の國司として活動した、又顯家の子顯成、其の子顯元に至り、南部氏は國司の後なるを以て閉伊郡船越に舘を建てて之を奉じた、時人之を船越御所と曰ふ、應永年中、南部守行が陸奥の國司となるに及び北畠氏を閉伊から津輕浪岡に移した、之を浪岡御所と云ふ、其の後南部氏は津輕の安東氏を一掃するに及び北畠氏は其の領地を廣め、具永の時には官は左近衛中將に進み、所領は田舍郡、興法（オキノリ）郡、外ヶ濱等に及んだが其の孫具運の代、永祿五年、河原の御所の反逆あり、俄に勢力を失ひ、津輕爲信興るに及び天正六年、是が爲めに亡ぼされた。

南部の三分族

大浦、大光寺、堤氏

安東氏と南部氏　この對抗は應永の初年に始まつたが、永享、嘉吉に至り津輕安東氏の蝦夷地渡海となつて一段落を告げた、其の後文安年間から長享二年まで約四十年間再び爭奪戰は繰返されたが結極英傑南部信時の勝利に歸した、是に於て信時は延德三年、南部光信を鼻和郡に置いて秋田の檜山安東の押へとした、此光信は津輕の始祖であるが信時の何に當るか明かでない、始め西津輕郡赤石川の上流種里に築いて居つたが後には中津

輕郡賀田に別城を築いて其の子盛信を居らしめた、其の地は大浦と稱するので地名を以て家號とし、漸次勢力を占め政信、爲則より爲信に至つて遂に津輕を一統した。

鼻和郡に一族を置いた後信時は明應年中、外ヶ濱に入り、堤浦を平げ、横内城を築き、四男田子彈正光康を居らしめ、更に一歩を進めて文龜二年には藤崎の安東敎季を攻めて之を破り大光寺城に其の族人を置いた、堤氏の後は堤彈正と稱し、津輕氏と緣戚を重ねたが天正十三年、津輕爲信に亡ぼされ、大光寺は天正の初年、左衛門滿愛死し、其の子幼少なるを以て弟瀧本播麿城代となつたが、天正三年正月爲信に攻められて開城した。

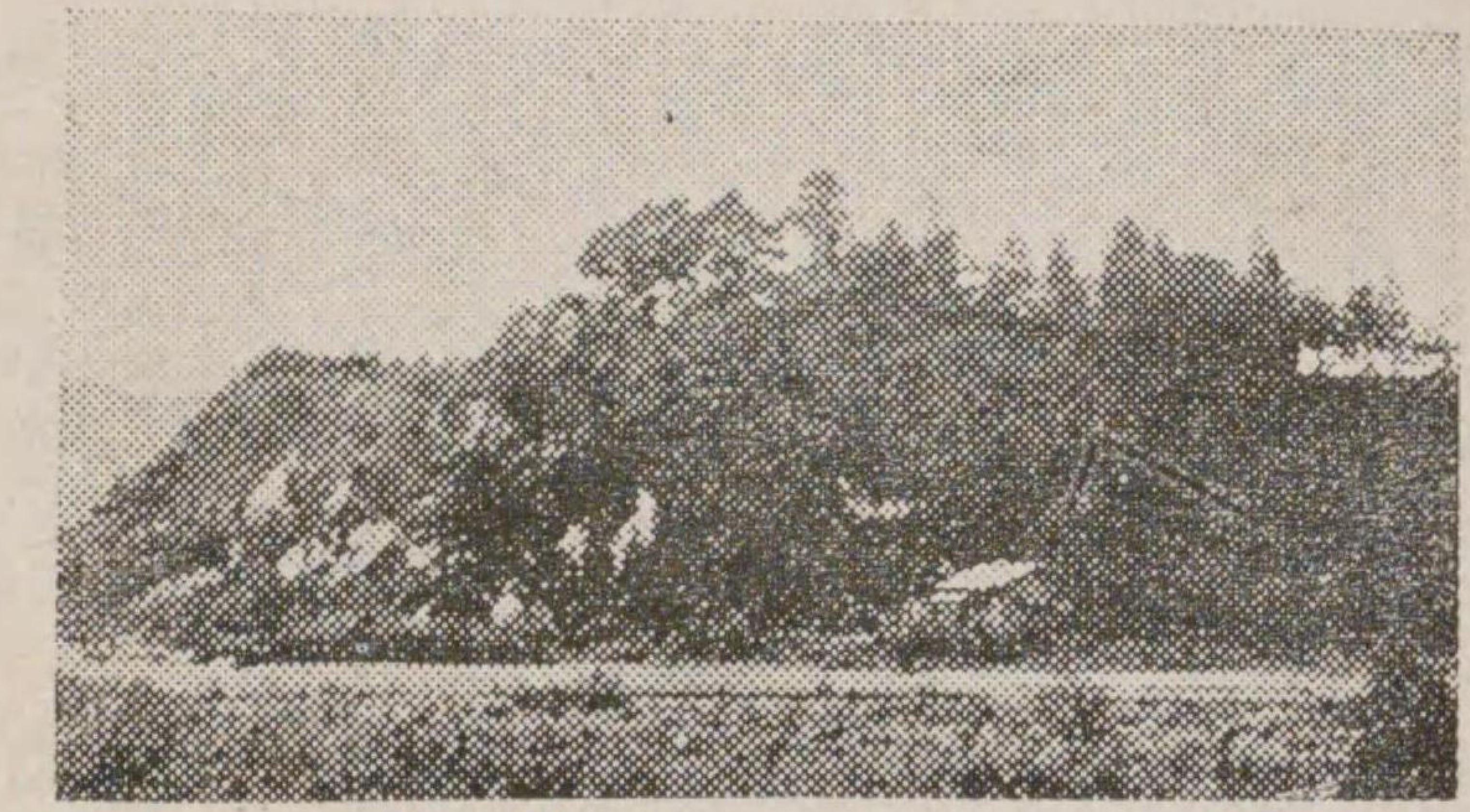
津輕爲信の獨立

南部信直の苦心

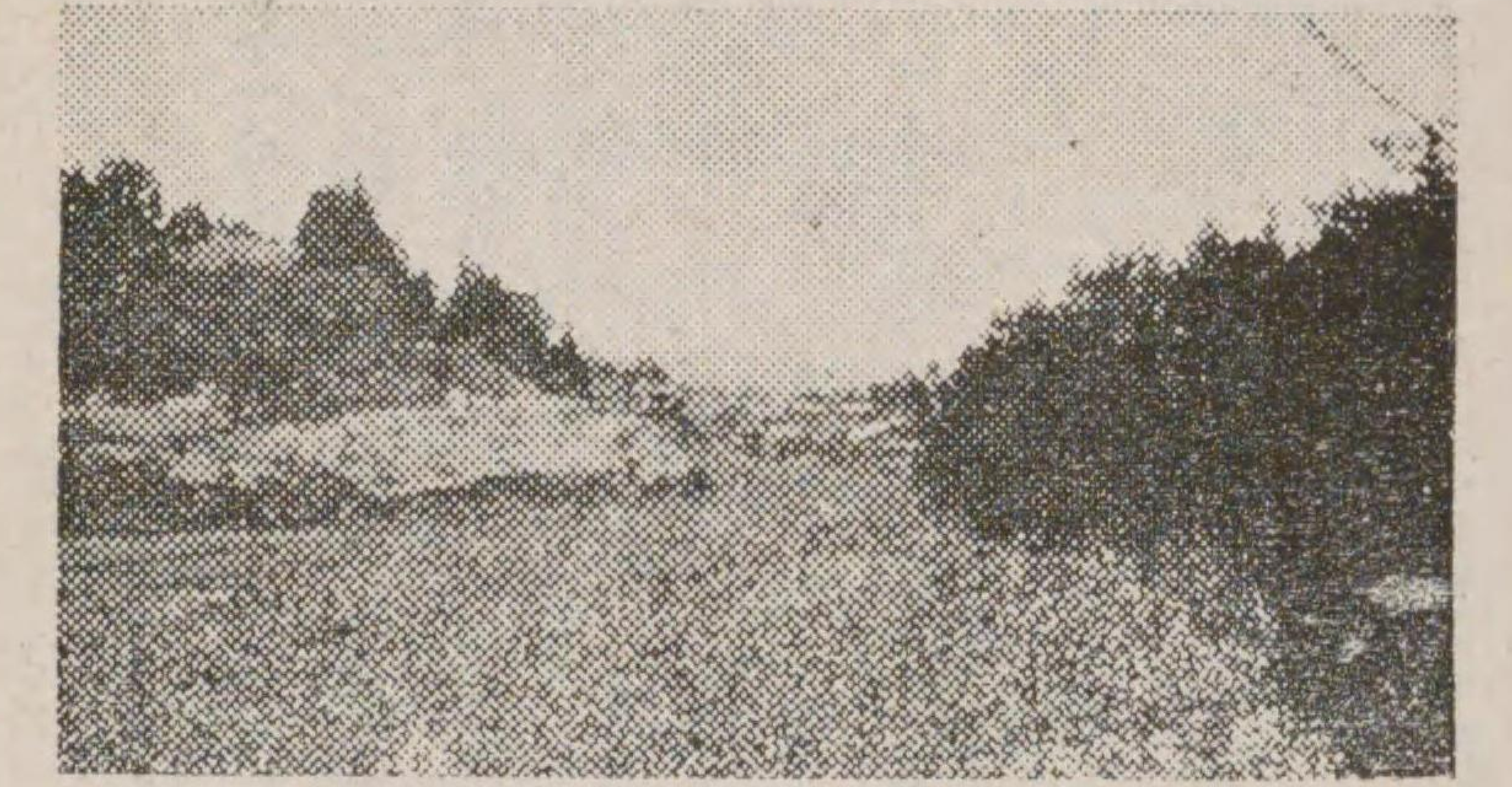
天文年中津輕の地は

鼻和郡三千八百町は大浦南部信州源盛信、平賀郡二千八百町は大光寺南部遠州源政行、田舍郡興法郡二千餘町、沼澁保内(ミツキナイ)一千貫は浪岡御所源具永卿也

とあつて三家鼎立の姿であつた、其の後永祿年中浪岡御所に內亂があり、又大光寺には葛西一族の亂があつたの



石川町岩鼻の景（南津輕郡石川町）



淺瀬石城址（南津輕郡淺瀬石村）

弘前城址（弘前市）

で、南部家では同族高信を遣して監督せしめた、高信は石川楯に築きて居り、四方に號令して居たが、元龜二年五月四日不意に津輕爲信に襲はれて自殺した。

津輕爲信　は津輕政信の次男武田甚三郎守信の長子である、叔父爲則の女阿保良姫の聟として十八歳の時堀越城から大浦城に入り二地を併有する事となつて勢力愈々増大した、正に永祿十年、天下群雄割據の時である此の時南部宗家では晴政卒し、晴繼又夭死して相續の爭ひが起り、石川高信の長子田子龜九郎信直は後繼者となつた、是に對し九戸政實は不平を抱き。漸やく謀反の徴候があり、一方秋田の下國愛季は南部氏と鹿角を爭ひ、快よからぬ時であつた、津輕黨は常に機乘ずべしと爲し，先づ遠く使者を山形の最上義光に派して後援を求め、又九戸と通じ、秋田と結び、所謂三角同盟を造り、外には石川の高信に恭順を裝ひつゝ內には着々戰備を整へ、元龜二年五月四日、突如として堀越から兵を石川に向けて高信を亡ぼし、翌五月未明、勝に乘じて和德の小山內讃岐を殺し、津輕割據の形勢を造つた、夫れから天正三年正月、大光寺を陷いれ、六年七月二十日。浪岡北畠氏を滅し、天正十三年には油川城を取りて外ヶ濱を平定し、津輕一統の業を遂げた、此の間南部信直が回復戰を試みたけれども後に九戸氏の虛を覗ふあり、又遙に秋田愛季の爲信を援助する等あつて其の効を奏せなかつた、然し信直は天正十六年に斯波氏と戰つて其の地を得、又秋田の實季と火內(ヒナイ)大舘を爭ひ津輕に失ふ所を補はんとした。

然るに天正十九年、九戸の謀反は愈々重大となり、南部氏一巳の力を以てしては到底勝ち難きを知り、關白秀吉の上裁を仰いだ、秀吉は小田原城攻めの序であつたから大軍を派して應援し、九戸氏を討剿した、是に於て南部信直は更に一歩を進めて津輕の故土を回復しやうと蒲生氏郷の力を得て上に迫つたが淺野長政の爲めに阻まれて事止み、爾來津輕、南部は多年反目嫉視するに至つた。

津輕藩政時代

信政の功績

天正十八年、津輕爲信は秀吉が小田原攻めの爲め東上する途中、沼津に於て謁見し所領安堵の御朱印を得た。文祿元年四月、東奥巡檢使前田利家等來り、狩場澤を以て南部の境とし、郡内を四萬七千石と定められた、文祿二年には肥前名護屋の陣に至り、重れて本領安堵の朱印を得、慶長五年、關ヶ原の役には徳川方に屬し、大垣城を攻めて功あり、上野國勢多郡に二千石を加増され、慶長十二年、京都に沒した、享年五十八歳

相續に就き内訌は有つたが爲信の三男信牧は其後を襲ふた、父君の志を繼いで弘前城を經營し、慶長十六年、堀越城から之に移り、爾來廢藩に至るまでの居城となつた、信牧公は學問を奬め、産業を興し、神社佛閣を莊嚴する等守成の功を遂げ、又港を開いて貿易を盛にし寛永元年から青森港を開き三年にして完成した、三代信義を經て

四代信政 に至る、明暦二年叔父信英を黒石に分封した、其の後外ヶ濱及び岩木川流域の新田を開拓し、後代に遺した恩惠は大なる者である、其の他國防を修め各種の産業を興し、神社寺院を修理し、文化事業を盛んにする等經營施設到らざるなく、國内の福利を增進すること前古其の比なく、歷代中第一の英主と仰がれ、高齡を以て卒し、岩木山高岡に葬られ、高照神社に祀られて居る、明治四十一年、特旨を以て從三位を追陞された

五代信壽、六代信著 七代信寧等相續き八代信明に至つた、恰も公の家を嗣ぐ時天明の大凶作に當り是が救濟に心血を濺ぎ、能く回復の大業を遂げ、後制度を改め、諸般の施設を爲す等見るべき者多く、賢君として崇められて居る、享年僅に三十歳、大正四年十月特旨を以て從四位を追陞された

九代寧親の時、蝦夷地は強露の窺窬する所となり、風雲急を告げた、幕府は津輕、秋田、南部藩に出兵防備を命じ、當藩の費す所巨額に達した、功に依り提封十萬石に進み、大正四年十月、從三位を追陞された

十代信順、十一代順承、十二代承昭に至り王政維新となり、藩籍を奉還して華族に列せられ伯爵を授けられた大正五年七月從一位に叙せられ同月卒去した、十三代英麿、大正九年卒し、十四代義孝は當主で目下學習院大學

に在學中である。

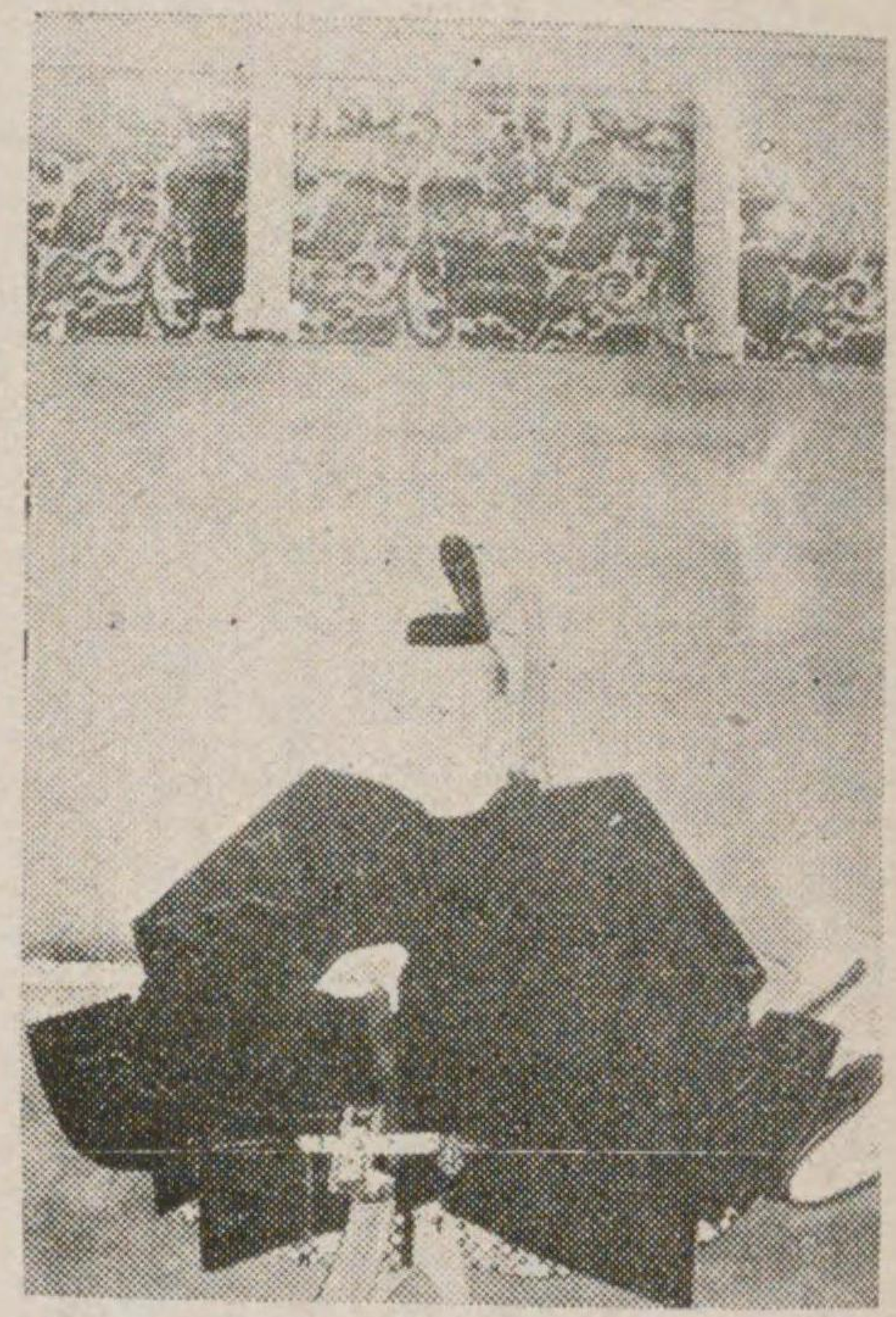
南部氏藩政時代

八戸氏の分封

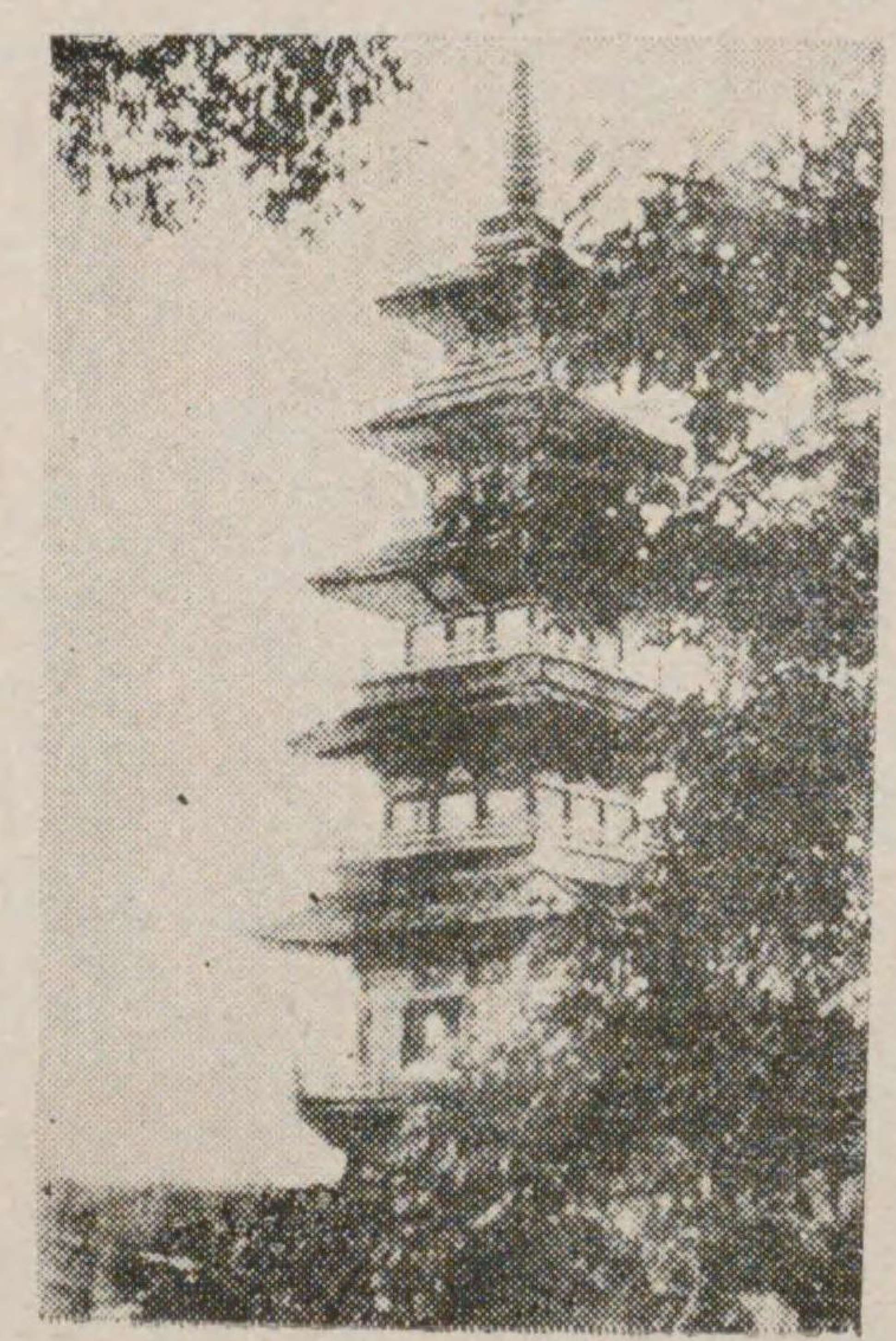
南部氏は歴代三戸城に居つたが天正十九年南部信直が九戸氏を亡ぼしてかの其の居城を修理して福岡城と名づけ、是に移つた、文祿元年、東奥巡檢使來り、津輕、南部の國境を定め、南部氏は和賀、稗貫、斯波、岩手、閉伊、九戸、二戸、鹿角、三戸、北の十郡、十萬石を與へられた、此の年、不來方の地を相して城を築き盛岡と改め、四年三月、是に移つたが、間もなく疾を得、福岡に歸つて卒去し、三戸聖壽寺に葬つた

利直は信直の長子である　慶長五年、德川氏の命を受けて上杉景勝を會津に攻め、石田三成の兵を擧ぐるや家康に從ひて之を討ち又稗貫、和賀の叛徒を平げ、遠野廣長を破つて地を廣め、後内治を計り、元和五年三戸城の民を盛岡に移し、寛永四年、八戸彌六郎直義を閉伊郡遠野に移して今の八戸地方及び下北田名部等を自家の手に收めた、同九年卒し、三戸聖壽寺に歸葬した。

次は重直、重信で、此の時南部十萬石の中二萬石を裂いて弟直房に分與した、是れが後の八戸氏の始祖である



津輕信政公肖像（縣社高照神社藏）



下寺五重塔

事は前記した（以下盛岡南部氏の記載を略する）

八戸家の分地は三戸郡内にて四十一ヶ村一萬四百石、九戸郡にて三十八ヶ村六千八百石、志和郡にて四ヶ村五千八百六十石餘で三戸郡の西部、上北、下北郡は盛岡南部家の領地たる事舊の如くである、寛文八年直房卒して、長子直政繼ぐ寛文十二年六月、盛岡藩との領地の境界を定めた、公の時諸般の施設經營する所が多い、又博學にして詩文に長じ、當時津輕には信政公あり、賢君一時に出たのは奇とすべきである、元祿十二年卒、年三十九、嗣なく、南部重信の四男右近後を繼いだ、通信と云ふ、後

廣信、信興、信依等相次ぎ、歴代山林制度を定め、馬産に留意し、海産物の輸出を奬勵した、信房の代北方多事で宗藩南部利敬は幕命に依り警備に當り、多數の人馬北郡を往來して地方民は困惑した、次は信眞より信順に至る、明治二年三月、藩籍を奉還し、華族に列せられ、同七月藩知事となつた、十代榮信、十一代麻子、十二代利克、明治十六年家を繼ぎ子爵を授けられた、尚幕末の列藩は左の如くである

○二十萬石　南部利剛（盛岡）○十萬石　津輕承烈（弘前）○二萬石　南部信順（八戸）○一萬千石　南部信民（七戸）○一萬石　津輕朝澄（黒石）

明治の小沿革

明治元年十二月、陸奥を分けて磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥の五國と爲した、新たなる陸奥は二戸、三戸、北、津輕の四郡に分けられ、翌二年藩政を布かれ、弘前、黑石、七戸、八戸、斗南の五藩に分轄された、明治四年、廢藩置縣となるも、其の所管は變らないが九月、縣の廢合を行ひ、弘前縣に併せ、同時に縣廳を青森に移して青森縣を置くことになつた、是に於て大參事野田豁通・權令菱田重禧は新に任命された

明治五年、府縣裁判所設けられ、六年三月管內を十大區に分ち、更に之を七十小區に細別し、大區に區長、小區に戸長、副戸長を置いて地方の事務を處辨せしめた、十一年十月、大小區を廢し、津輕郡を分けて五郡とし、北郡を分けて二郡とし、之に三戸郡を加へて八郡と爲し、以て今に至つた、明治十三年、初めて縣會を開設し、明治二十二年。市町村制を實施した、今は二市、百六十八町村である、是から後の事は多岐多端で此の小册に盡されないから省略し、左に歷代の知事の姓名のみを揭げる

△大參事　野田豁通△權令　菱田重禧△同　北代正臣△同　池田重德△參事　鹽谷良翰△縣令　山田秀典△同　鄕田兼德△同　福島九成△縣知事　鍋嶋幹　佐和正　牧朴眞　河野圭一郎　宗像正　山之內一次　犬塚勝太郎　西澤正太郎　武田千代三郎　田中武雄　小濱松次郎　川村竹治　澤田牛麿　道岡秀彦　春藤嘉平　尾崎勇次郎　馬場一衛　緖形惟一郎　松原權四郎　遠藤柳作　小柳牧衛　森岡二朗　吉村哲三

名所舊蹟

東津輕郡（外ヶ濱）

青森市を中心とする東津輕郡は古くから外ヶ濱と稱され、幕末に至るまで此の名が用ゐられた、又青森の以東を東外ヶ濱又は下磯と云ひ、以北を北濱又は上磯と云ふて來た、津輕・糠部の外ヶ濱との義である、合浦の名あるも是は後代文人等の雅名たるに過ぎない

○

みちのくは奥床しくもおもふゆる
つぼの石ぶみ外の濱風
西行法師

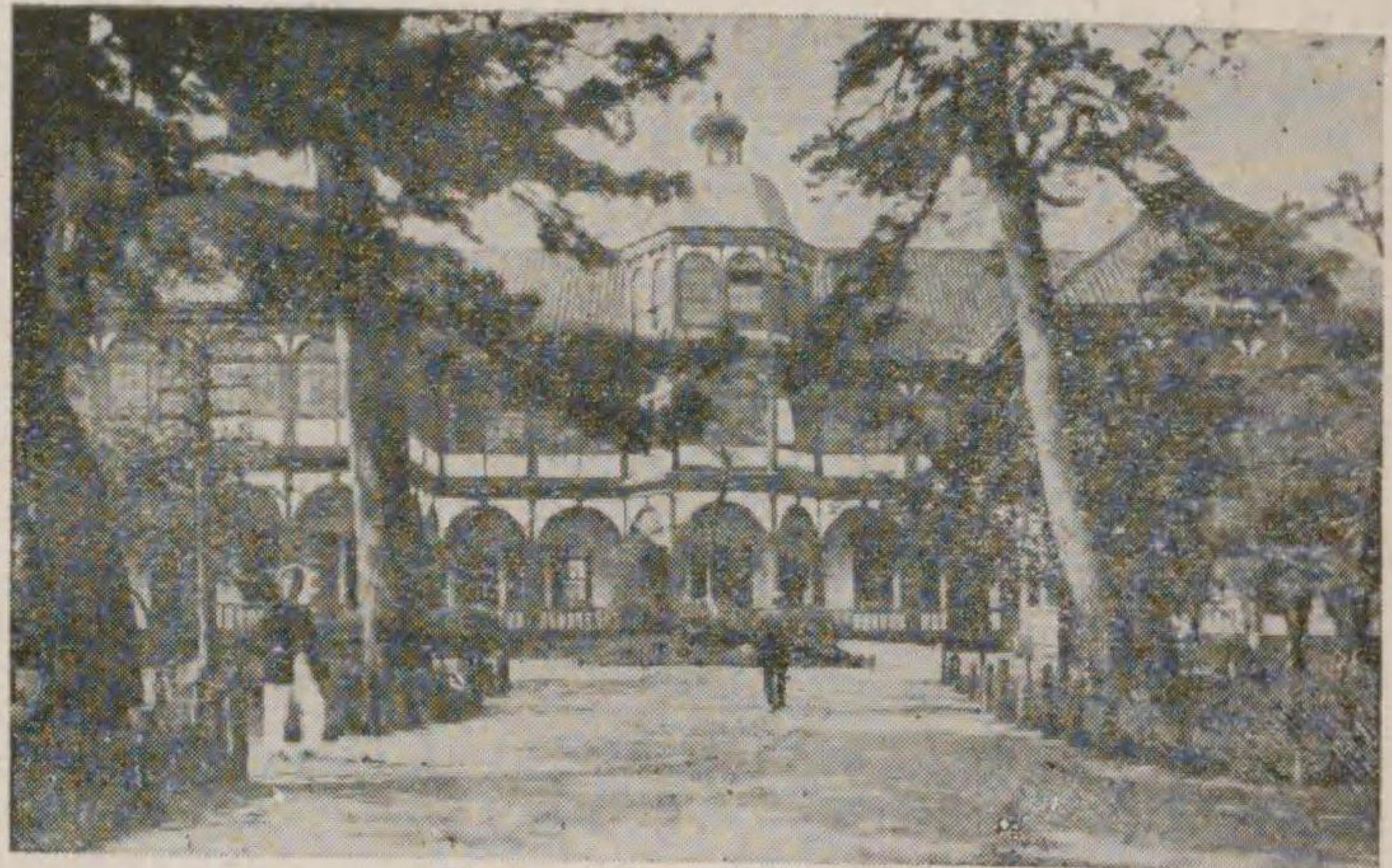
青森市

寛永元年以來、津輕信牧が外ヶ濱善知鳥村を開港地と定め、區劃を定めて地を與へ、租税を免じ、市を開き幾多の特典を與へて新派を急いだ、貞享四年に至り、戸數千戸に近く、始めて青森町と稱するに至つた、青森とは町内に小丘あり、磯松が青く繁つて居たので町の前途を祝福して命名した者であると、爾來津輕藩唯一の貿易港として繁昌し、明治四年、縣廳の所在地となり、明治二十四年には日本鐵道開通し、二十八年奥羽線通じ、益々繁盛の機運に向ひ、明治三十一年には市制を布いた、三十七年には公衆電話開け、三十九年貿易港となり、又水道工事完成した、四十三年には全市焼失したが間もなく回復し、大正四年からは築港工事開けて、北海道連絡完備し又大正六年以來、經濟界の刺戟を受けて諸設備成り、今や大青森を形勢すべき機運に向つて居る、目下の推定人口、約七萬九千と稱する

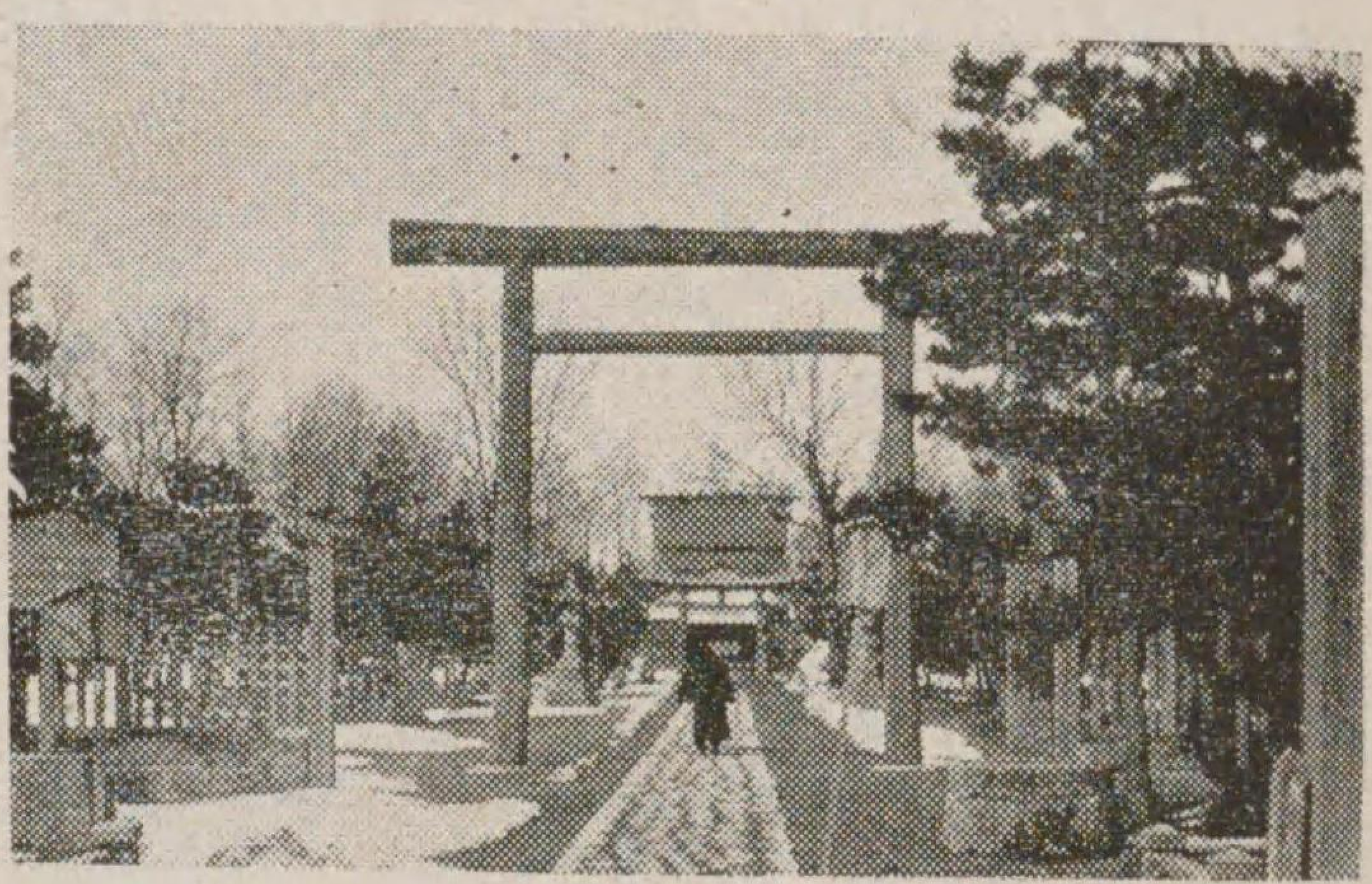
青森舊陣屋跡　青森派立の前は荒川が今の大野村を流れて安潟に注ぎ附近一帶は卑濕の地で蘆葦繁り、僅に蜆貝村、堤浦、善知鳥村など散在し、荒涼たる者であつた、寛文十一年、町勢略ぼ成り陣屋を建て、濠を繞らして戌兵を置く事とした、今縣廳の所在地は其の址で、固より低濕の地であつた事は明かである

善知鳥神社　青森市安方町に在る、曾ては周圍が大沼であつたが、今は沼あせて僅に其のおもかげを止めるのみである、當社は宗像嚴島の三女神を本主とし、古來有名な神社で明治六年、縣社に指定された。善知鳥と

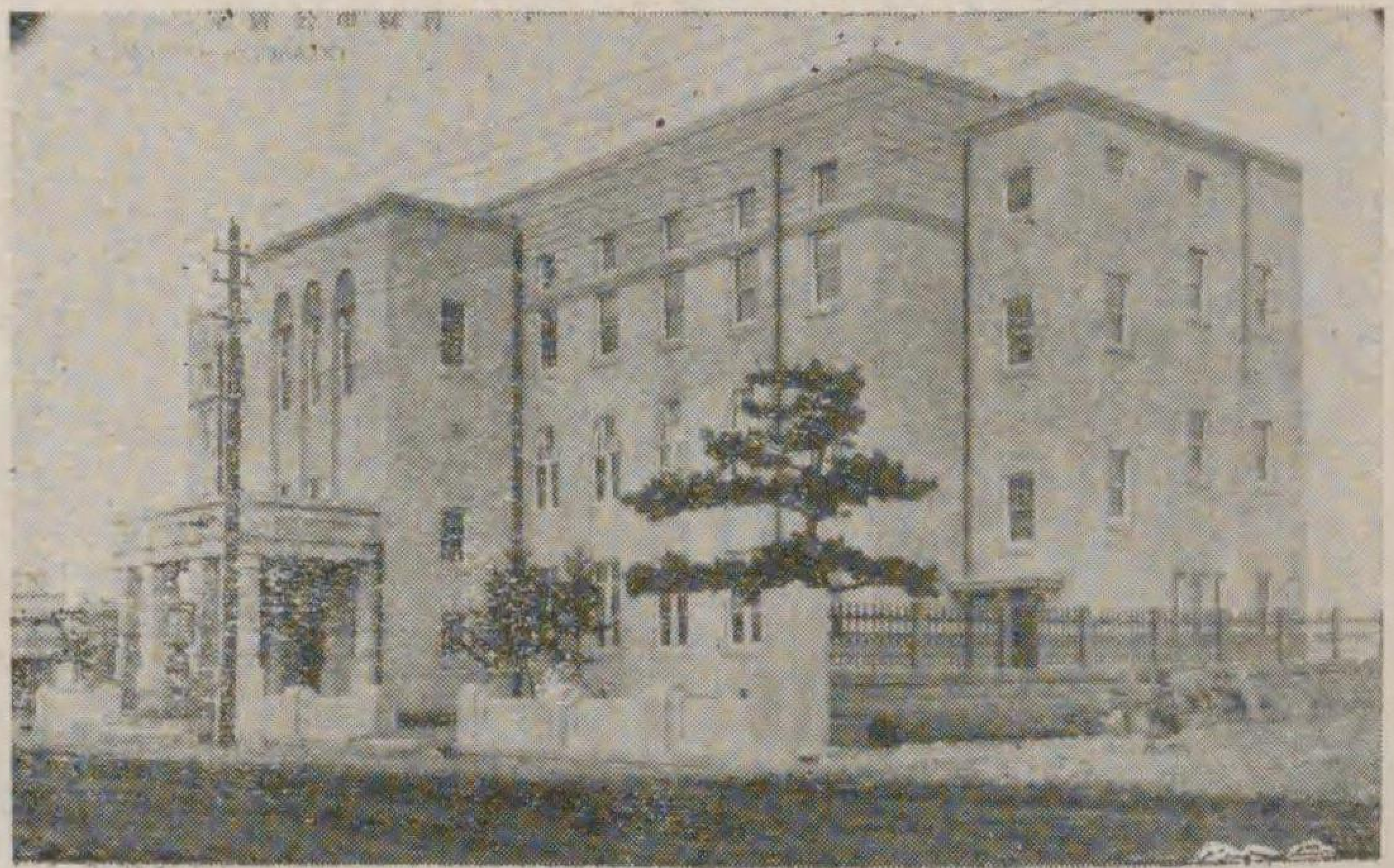
青森市



青森縣廳



善知鳥神社



青森市公會堂

書いてウトウと訓む故は詳かでないが同社の由緒と此の鳥に就ては種々なローマンスが傳へられて居る

ウトウとはアイヌ語の出崎である、青森開港前は安潟は周圍一里餘の大潟であつて其の水門は葦の繁る出崎となつて居た、其處にバンに似た鳥が多數巣くうて居たが出崎の鳥である所から自然ウトウと呼ぶに至つた、又形が千鳥に似て葦の中に棲んで居る所からヨシ千鳥、アシ千鳥など呼んだのが善知鳥、惡知鳥等と書かれるに至つた、嗚呼中納言安方卿なる人を主人公とした謠曲本は足利時代の中期に出來た者である

右に關する古歌あり、作者には異説も多いが傳へられた儘を錄する

○　夫木集

みちのくの外の濱なるよぶこ鳥
なくなる聲はうたうやすかた

○　西行法師

子を思ふ涙の雨の笠の上に
かかるもわびしやすかたの鳥

○　讀人しらず

紅の涙の雨にぬれしとて
蓑を着てとる善知鳥やす方

○　　　　　　　　　　　同

子を思ふ涙の雨の血にふれは
はかなきものはうとうやすかた

謁烏頭祠　　　　　　弘前　相坂謙

烏頭祠古俯蒼池　處々羈禽呼子悲
今日誰知孤客恨　徒將勝迹問漁師

合浦公園　青森市の東端に在り、青森驛を距る東方三十五町に當るも、市の乘合自動車十分にして達する面積二萬一千餘坪・東は青森灣の碧波に臨みて老松白砂の間に南部の諸山を望見し、東南には綠樹を透して八甲田の連山を眺める、園内に招魂堂あり、又明治天皇御野立所及び青森市に對する功績者の碑等がある、春は櫻花あり、年々五月初旬觀櫻會催され、夏は藤、菖蒲、躑躅等燎爛として姸を競ひ、又沿岸は遠淺なるを以て海水浴が盛に行はれる

神社佛閣　神社の古き者、柳町に鄉社香取神社がある、勸請年月は不詳であるが舊記に金光寺持國多門天とあるは同社である、又村社諏訪神社は由緒古く、青森開町前は造道浪打に在つた、後堤町に移り明治五年現在の所に移つた、外に廣田神社(國道通り長嶋)神明宮(浦町字橋本)がある

常光寺(寺町)　曹洞宗通幻派で承應二年、天藝和尙の創立である

正覺寺(寺町)　淨土宗名越派である、寬永五年、龍呑和尙創建

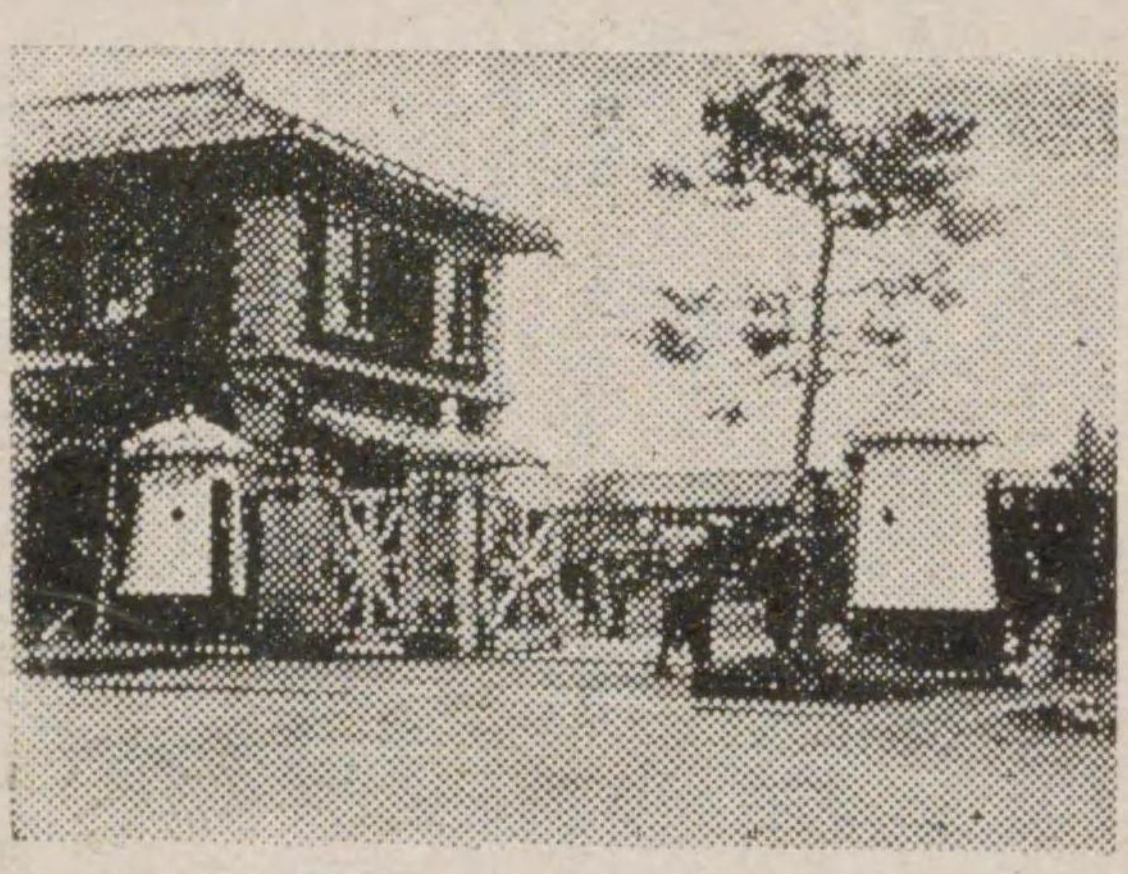
蓮心寺(寺町)　眞宗大谷派で、寬永十七年越前國米ヶ浦蓮光寺嫡坊敎念の開基である、當寺は明治九年と明治十四年の兩度　明治天皇の行在所となつたが明治四十三年の大火に燒失したのは惜しい

蓮華寺(寺町)　永仁三年、日蓮の高弟日持の開基であると云ふ、慶安三年日住と云ふ僧が再興した外に眞宗本派安定寺、同派光行寺、淨土宗阿彌陀寺、同一念坊等がある

青森市から八甲田山へ

八甲田山から十和田湖へ

青森市堤町から同名の河に沿ふて南することと七里にして八甲田の中腹酸湯温泉に達し、更に二千尺を登攀して



五聯隊

ネプタ

高田大獄の頂上を極め是より眼下に明鏡の如き十和田湖を俯瞰しつゝ下ること四里にして猿倉、蔦の諸温泉を經て湖岸に達する、沿道の勝景は筆紙に盡されぬが、聊か其の片鱗を左に示さんとする

小　舘　木材株式會社は堤町を距る數町の所に在り、其の設備は縣下第一であつて當業者ならずとも一覧する必要がある、行くこと數町、堤川の彼岸に古舘址がある、堤彈正の居舘か、其の以前の者か明かでない、筒井村松原通りに入ると左方に青森聯隊區司令部あり、官舍街を過ぎ歩兵第五聯隊の營門に達する

歩兵第五聯隊　は明治八年十二月、弘前から此處に移り、同十二年、第五聯隊編成され、始めて軍旗を授與されたと云ふ極めて古い歴史と戰功有る隊である

妙見堂　此處を過ぎて間もなく、横内村妙見堂に達する、即ち鄕社大星神社である、當社の由緒は極めて古く、永祿二年に北畠貝運が再建したとの記錄があり、北斗寺妙見大菩薩云々とある、境内には糸垂櫻の老木多く、花時の參拜者が跡を絶たない、社殿の後には荒川、滔々として流れ、幽邃閑雅を極めて居る

横内城趾　今横内村大字野尻は正平五年南部信光相傳領承すとの古文書があり、約六百年前其の名を知られて居る、明應七年（一四九六年）南部信時、兵を遣して野邊地から外ヶ濱に入り堤浦を取つて横内に築き、四男光康を之に居らしめた、之を堤彈正と稱し四代相續したが天正十三年、津輕爲信に亡ぼされた

青森水道　青森市から行程約二里、横内山麓の高地に青森水道の貯水場がある、水源混々として盡きず、加ふるに水質佳良、十萬口に供するに足る、地は青森港市を眼中に收むべく、以て行厨を開き、一盞を傾けるに足る。

雪中行軍遭難記念碑　八甲田山の中腹に一個の銅像と二百餘基の墓石が建てられて居る、是は明治三十五年一月二十五日、歩兵第五聯隊の一隊が雪中強行軍を行つて大風雪に遭ひ、凍死した軍人を弔ふ者で、銅像は當時の勇士後藤軍曹の者である、此處から更に登ること二十餘町にして青森電燈發電所大瀧に至る、以下酸湯から蔦に到る沿道の景は別項十和田湖記に移す

淺虫温泉

淺虫温泉　は東北本線淺虫停車場の構外に在り、青森驛からは九哩で二十五分にして達し、又自動車三十分にして到る、前は青森灣の碧波、紅欄の下に迫つて湯島、裸島、鷗島等遠近相對し、後は丘陵岸に聳ゐて緑樹の蔭を水に映し、水清くして底澄み、十里明鏡を磨くが如く、水郷、山郭、晴天雨日皆愛すべきである、此の景に加ふるに靈泉隨處に湧き出で、人生歡樂の境となつて居る

淺虫は元蔴蒸しと書き、其の沿革は知るを得ないが舊津輕藩主の保養地であつた、二十餘年前までは單に入浴に重きを置き、海岸の風景を賞するの設備はなかつたが今日では繁華か海岸に移り、大廈高樓は此の方面に成る様になつた

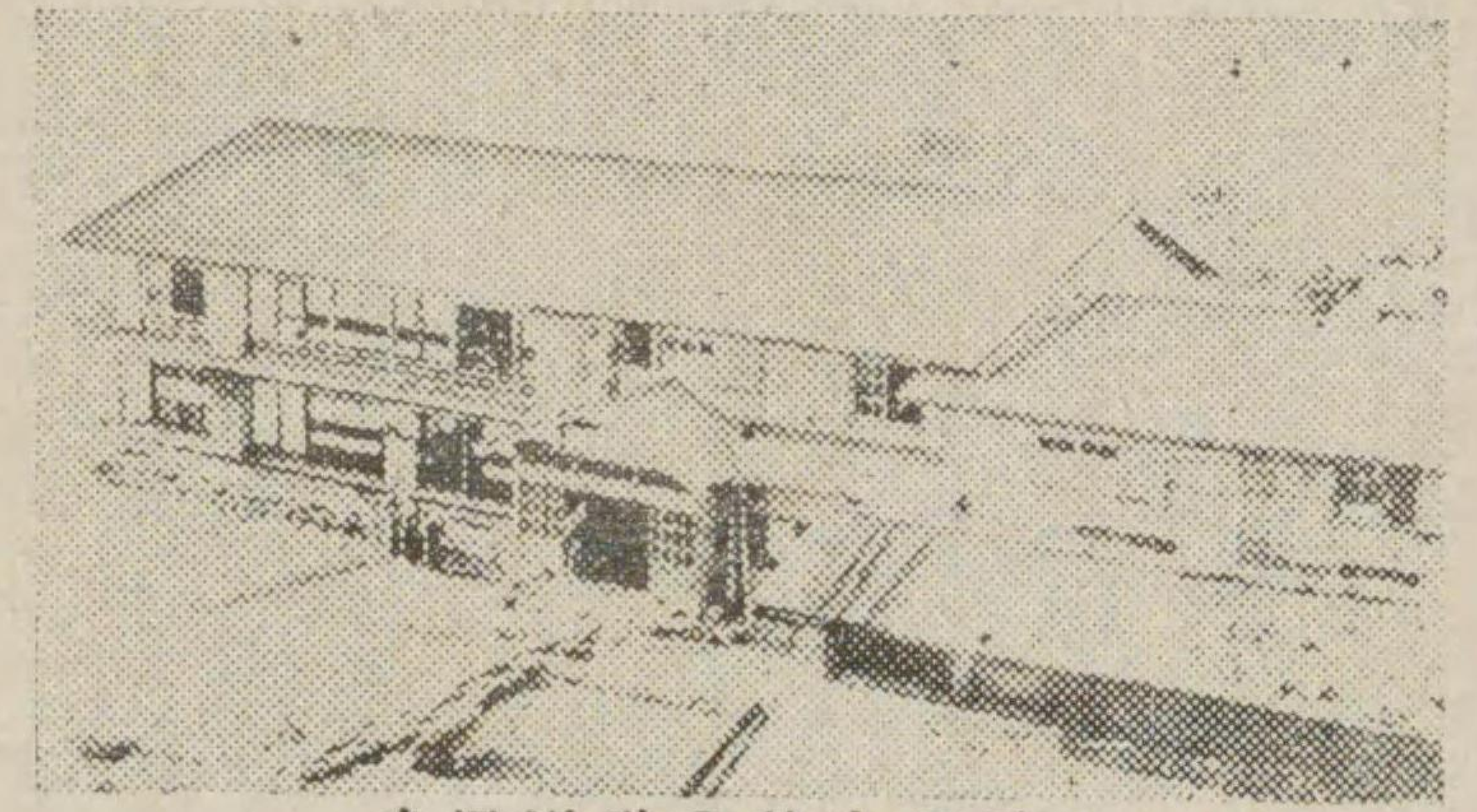
泉質 は鹽類泉中の尋常弱鹹類泉で華氏百七十度の溫度を有し、リウマチス、慢性痛風、諸焮衝、神經亢進の諸症、婦人生殖器の慢性諸病等に特効がある

附近名所 湯嶋、裸島等の島巡り及び釣魚も興多く、夏季は海水浴が殊に爽快である、舊藩主の遊行した天下茶屋、馬場址等あり、西北の小丘を八幡山と言ひ小祠あり其の上は蝦夷舘の在つた所で下は即ち烏頭前の梯である、其の他夢宅寺等筇を曳くべきである

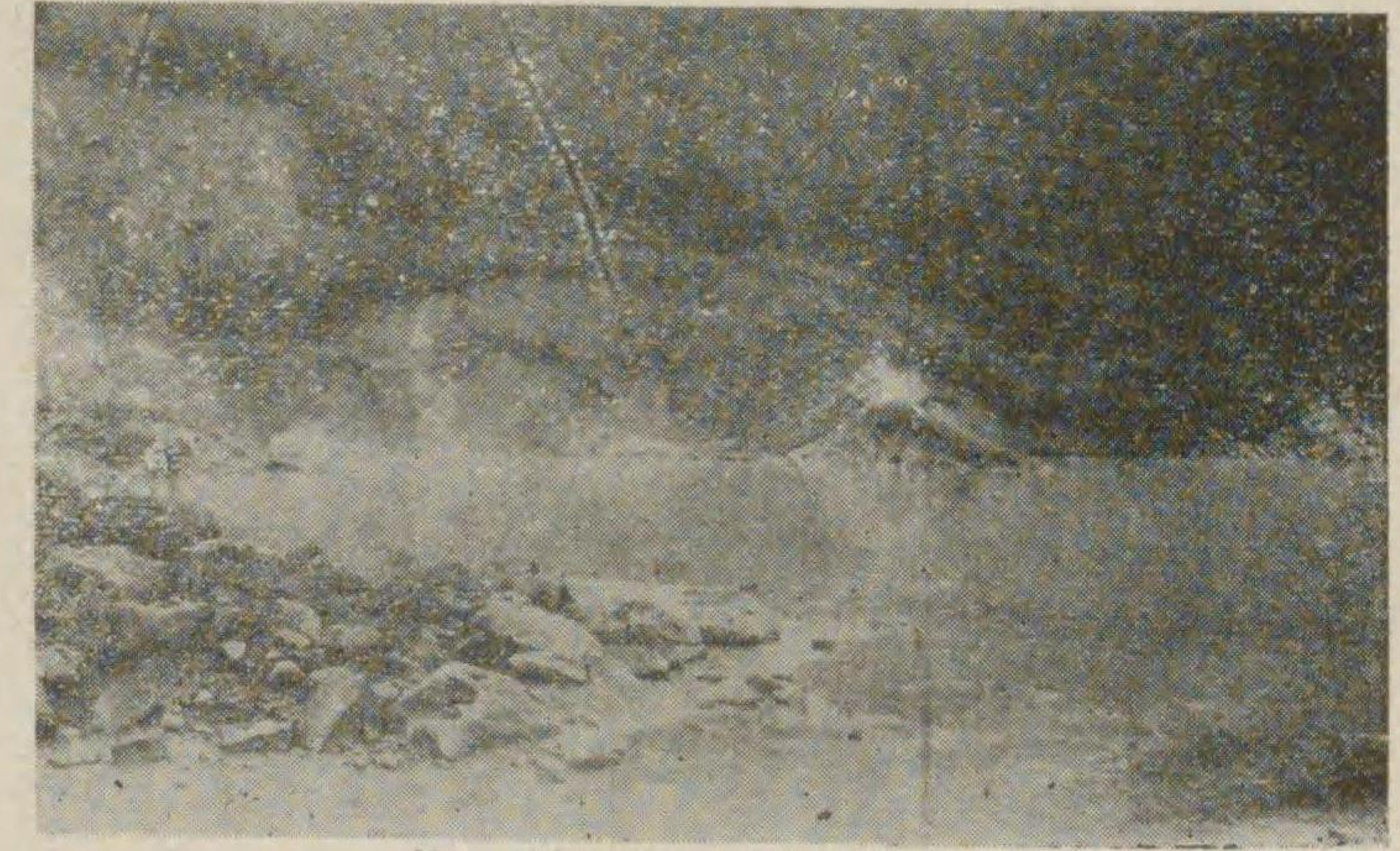
臨海實驗所 動物生理學の世界的權威たる理學博士畑井新喜司氏の盡力に依つて東北大學附屬臨海實驗所は大正十三年七月、風景明媚なる淺虫裸島の對岸に出來た、蓋し此の地は寒暖二潮流の棲物に富み、且つ交通の便利な所から選擇されたのであらう、今や同博士の指導に因り、同所は斯界の最大權威たるに至つた、附屬水族舘は兒童の爲めに有益な設備である

烏頭前の梯 淺虫の西方僅に二里、山脚斜に海に沒して一路通じ難い所がある、今は墜道を穿つて鐵車悠

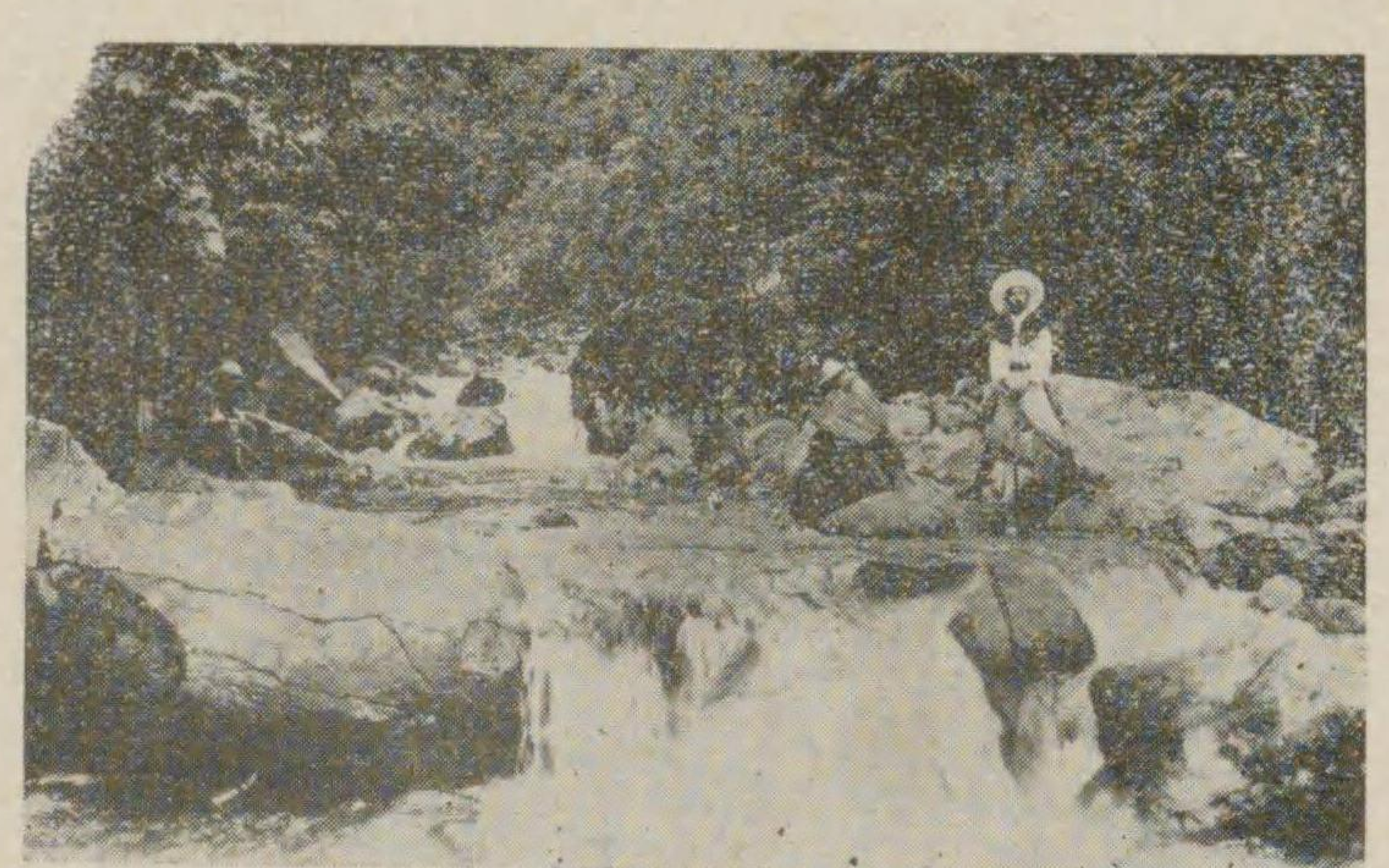
東津輕郡



八甲田山麓の酸湯溫泉



酸湯の地獄沼



八甲田山嫦娥倉の溪流

々と通過して居るが、明治九年、明治天皇御巡幸前までは僅に懸崖に梯を掛けて海角を通行し、所謂一夫守りて萬夫を防ぐに足るの險阨であつた、東鑑に記する大河兼任か件の山を以て城郭と爲し、大軍を防いだとは是れである

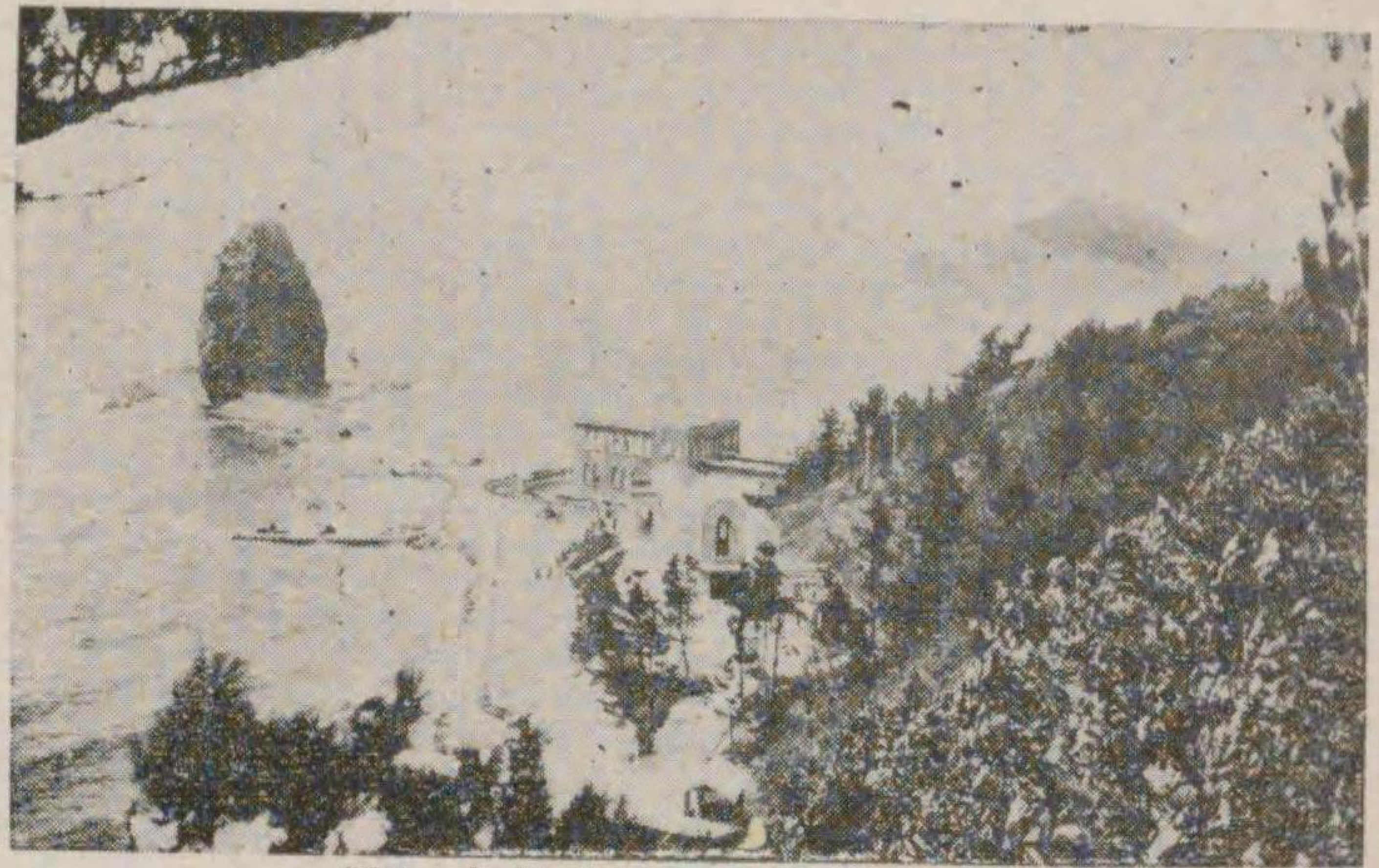
次第追跡、而於外濱與糠部間、有多宇末井之梯、以件山爲城郭、兼任引籠之由風聞、上總前司等又馳付其所、兼任一旦雖令防戰、終以敗北、其身逐電晦跡、郎從等或梟首、或歸降(文治六年之條)

野内村の石油タンク　野内村は停車場の所在地である、藩政時代は津輕五浦の一として關所を設けられ町奉行の治所であつた、明治に至つて衰へたが同二十八年、英國ライジングサン會社が石油タンクを設け年々五萬屯餘の原油、石油を同濬貯藏するに因つて有名の地となつた、別に米油スタンダートの石油タンクも設けられて居る

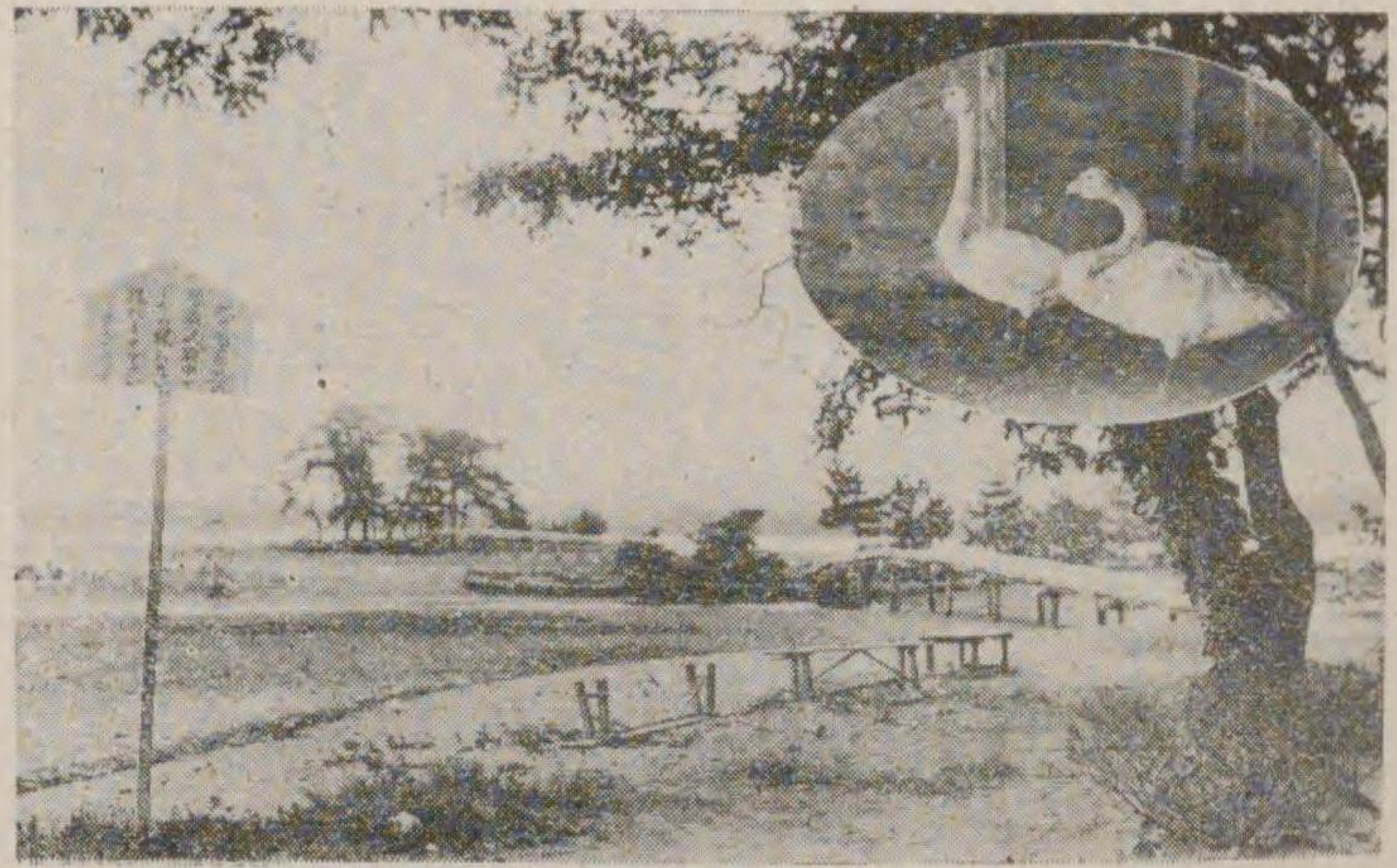
平内の郷　建武延元年中の南部文書に平内の名が見ゑて居る、ヒラナイはアイヌ語である、開拓の古きを追想するに足る、延元元年、安東五郎二郎家季、足利尊氏に黨して平内の館を攻む、成田泰次伐つて之を退くとある、後久しく八戸南部氏の所領で七戸家に傳へたか天正十五年、津輕領となつた、明曆二年津輕信英、黑石に封ぜられるに及び平内の地も併せて同藩の所領となつた

東津輕郡

淺虫溫泉と湯の島



東北大學臨海實驗所及水族舘



淺所の白鳥

雷電宮と白鳥　小湊驛から北方半里にして郷社雷電宮がある、海は一面遠淺である所から淺所と稱し白鳥の群集するを以て有名である、灣内二嶋あり、小松島と云ふ

東田澤の椿山　小湊村の北西三里、横峰山の麓に在り、滿山椿を以て掩はれ、大なる者は周圍六尺に達する、花時紅娟、碧潭に映じ、美麗言ふばかりない、傳へ曰ふ、往昔越前の商人横峰嘉平なる者、村女お玉と契り別れに臨んで戀着絶ち難く、再來の時椿油をと誓ふ、翌年航し來れば玉女は既に亡い、嘉平悲みに堪へず、携ふる所の椿油を墓標に注いだのが芽生へして今日に至つたと、小祠あり、椿神社と云ふ、元祿年中、黒石藩公の創建である

田澤椿山　　弘前　蟹澤紫峯

沙明水碧別爲郷　少女祠邊春日長
老父爲譚想夭戀　滿山椿樹返魂香

豆坂と津輕坂（入内觀音堂と戸建澤）　以前外ヶ濱から津輕平野に入るには青森堤町から筒井を經て荒川に出て豆坂を越へて浪岡に出る一線と、青森安方町から油川を經て新城に出で、津輕坂を越へて杉澤に出る一線とあつた、入内村は高田村の大字で豆坂街道に沿ふ小部落であるが此處の觀音堂は古來名を知られて居る、天正六年、北畠

氏か津輕爲信に亡ぼされた時顯村の室は入內觀音堂に難を避け、弟顯忠と邂逅して此處から油川に免れたと云ふ

又戸建澤は新城村大字戸門の山中に在る、澤に臨んだ懸崖の中を空洞にした者である、可足權僧正の津輕由緒記に其先三代藤太賴秀が匿れて炭を燒いた所とあるので知られて居る、近年此處に祠堂を建てた

新城村と北部保養院

新城村は津輕新城驛の在る所である、城址あるも其の傳を得ない、北部保養院は同村大字石江地內にある、明治四十年、創立に着手し、四十二年、今の廳舍は建設された、院長中條資俊氏は創立當時から終始一日の如く献身的に治療に從事し內容の充實と外部の擴張に努力し、略ぼ完成に近づいて居る

油川町

青森市の西北一里十八町の所に在る、室町時代以來の都邑で大濱と稱し、城下附の港で繁昌したが、外ヶ濱開港の際海が遠淺な爲め、青森港を開くことゝなり、繁華は次第に青森に移つた、鄉社熊野宮は由緒古く、永祿二年再建の棟札がある

國有林

津輕半島の脊梁たる梵珠山脈は世界無比のヒバの密林で、日本三大山林の一に數へられる、而して其の最美なる者は內眞部山林である、地は青森市を距る約三里、東津輕郡奧內村に屬し、農林省の森林鐵道が通つて居る、津輕藩政時代、植林に力を用ゐ、當時手入をした者の一部は今模範林として保護されて居る、又內眞部の鄉は安東氏數代の居舘であつて建武年中、其の名が著るしい、舘址は村の西南七八町の所に在る

阿彌陀川　蓬田村の大字で村中同名の河がある、昔金光上人此の地を遊歷の時、河中から阿彌陀如來の像を發見したので、河名となり村名となつたと傳へられる

蓬田城址　南部文書の泉田は是か、天正の頃、蓬田越前なる者附近を支配したか同十三年、油川落城の時舘を棄てゝ南部の地に落ち延びた

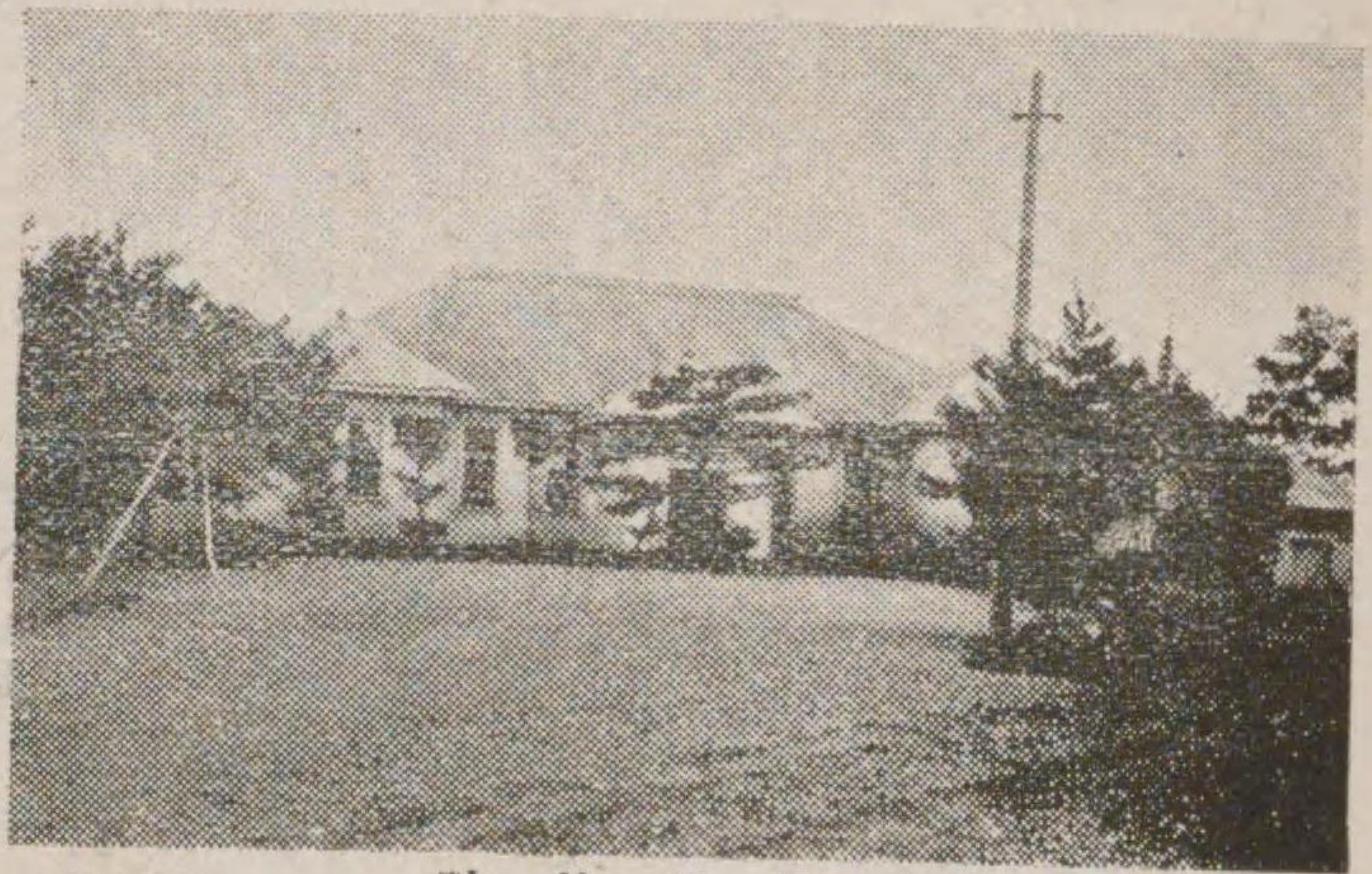
玉松臺　蓬田村大字瀨邊地の南方に丘陵あり、玉松臺と云ひ老松樹下數十基の墓石が並んで居る、是れ日露戰爭の際、召集を受けた在鄕軍人か不期生還の誓を立て、豫め墳墓を作つて應召したと云ふ淚ぐましい悲壯な因緣ある所である

蟹田村　靑森市西北六里、上磯の名邑で物資は此處に集散する、藩政時代は津輕五浦の一であつた、中志の高臺は海を隔てゝ南部の諸山を望み、風景佳である、名づけて觀瀾山と曰ふ、大字小國には石田三成の後胤がある、山道七里を經て今別に達する

平舘　蟹田から海岸道を北する二里の地に在り、靑森灣頭の尖角を爲して居る、故に明治三十二年來、燈臺を設けて海路を安全にして居る、文化文政の頃、黑船の出沒するや陣屋を設け、大砲七門を据ゑて非常に具へた

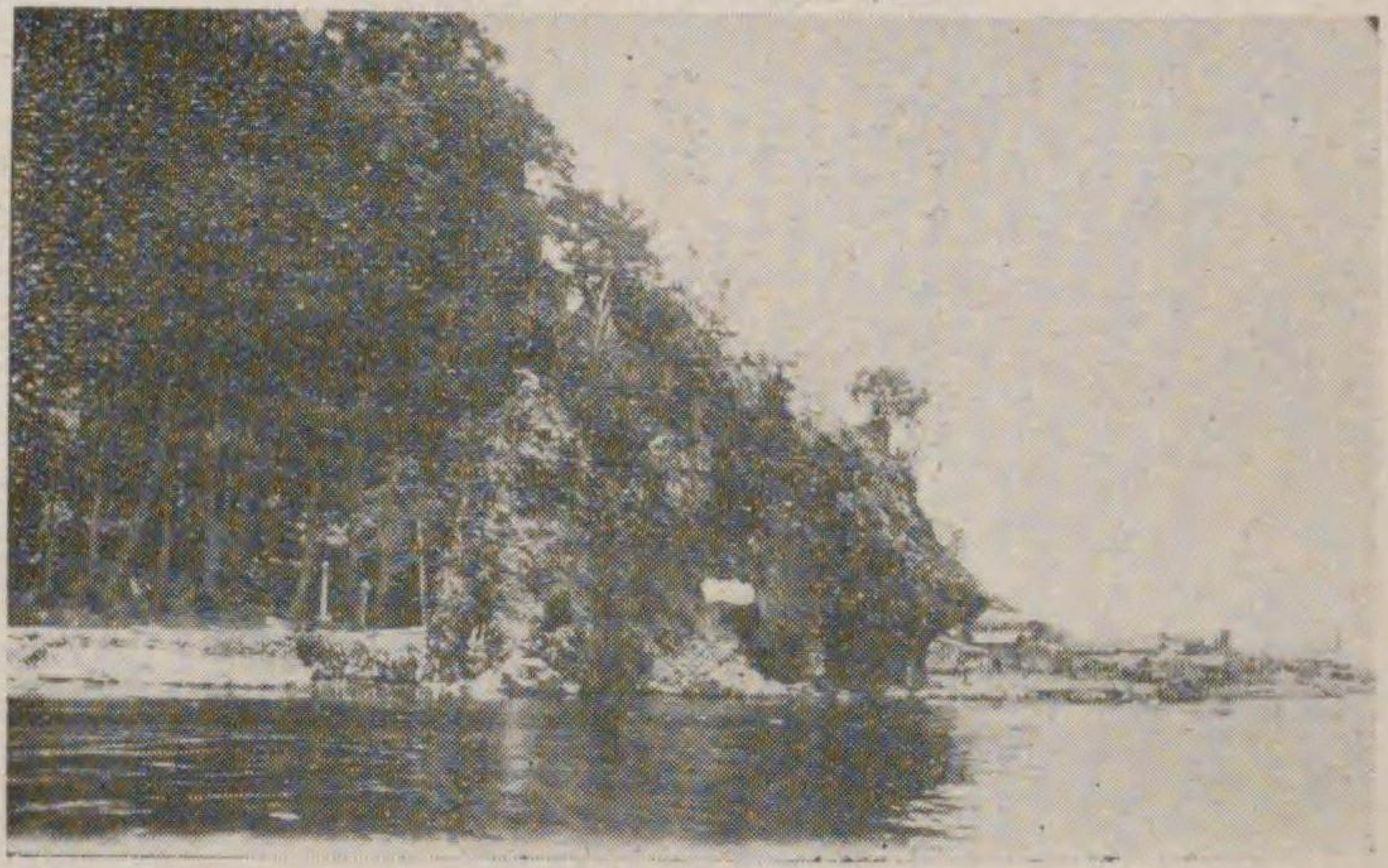
野田の玉川　平舘村大字野田に在る、源を梵珠山系に發し、奇岩怪石橫はり、河中に產する小石は黑色に

東津輕郡



北部保養院

三厩龍嶋義經寺



三厩の海岸

して光澤あり、珍重される

新古今集　　　　能因法師

夕されは汐風こしてみちのくの
　　野田の玉川千鳥なくなり

袰月　一本木村大字袰月は三面山を負ひ前は海灣紺碧を湛ゆ、湖水の美にも勝る、附近に舍利石と云ふ小さな美しい石を産する

今別　袰月から山道迂曲して行くこと一里餘、豁然たる平野となる、今別村と云ふ、古來からの名邑で永祿の頃今別將監平杢之助が領地した所と傳ふ、藩政時は町奉行所の支配であつた、鄉社八幡宮は永祿年中北畠氏の創建であり、淨土宗本覺寺は貞傳上人を以て名高い

三厩港　對岸福山へは僅に二十浬で兩地間の要津であつたから藩政時代は繁昌したが維新後陸上交通の不便と船舶の運轉系統が變つたので今は荒涼たる一寒村となつた

龍馬山義經寺　村端に三つの岩窟がある、源義經が馬を繫いだ所である、故に村の名も三厩と云ふと、海に臨んで高臺あり、龍馬山義經寺があり、又義經が殘したと傳ふる觀音の堂がある

龍馬山義經寺　　　野口寧齋

隔岸蝦夷國　寒濤滚々奔　揚船從此去　往事不須論　雲鎖義經寺　秋生三厩村　臨崖一回首　落日暗中原

算用師越

三厩から北津輕郡小泊村に通ずる山道がある、之を算用師越と言ふ、吉田松陰が嘗て此の道を過ぎた、其の東北遊日記の一節を拙譯して左に錄する

五日（嘉永五年六月）晴　戸を推して之を望めば松前の連山咫尺の間に在り、驛（小泊）を出で海に沿ふて砲臺の下を過ぐ、砲二座を安じ、板屋を以て之を掩ふ、砲長口徑を詳かにするを得ず、行くこと二里、海を離れて山に入る、山に澗有り、澗に浴ふて登る、是を寒滲と爲す、滲、旅人の此の路を過ぐるを嚴禁す、故を以て道を修せず、澗を渉ること數次、深さ每々膝を沒す、行くこと里許、始めて其の巓に至る、巓を越ゑて下ること二里許、雪の深さ二三尺、愈下れ澗ば流愈大なり、又渉ること數次、困苦甚だし、漸く海濱に出づ、是を三厩と爲す、詩を作りて曰く

去年今日發巴城　楊柳風暖馬蹄輕　今年北地更踏雪　寒滲卅里路難行　行盡山河萬夷險　欲臨滄溟叱長鯨　時平男子空慷慨　誰追飛將靑史名

宇鐵の鮑

三厩村大字宇鐵の海岸には鮑魚繁殖し、同村漁業組合では專用漁業を許されて居るので年々の

所得は巨額に達する

龍飛の影

平舘以北の海岸には巨岩大石隱見し奇觀を呈して居るが龍飛に至つて景美の極致に達する、龍飛は古書に龍濱（タツピン）と見ゑ、アイヌ語タツプは圓頂の孤山の義であると

上磯途上　　川村亞洲（前靑森縣知事）

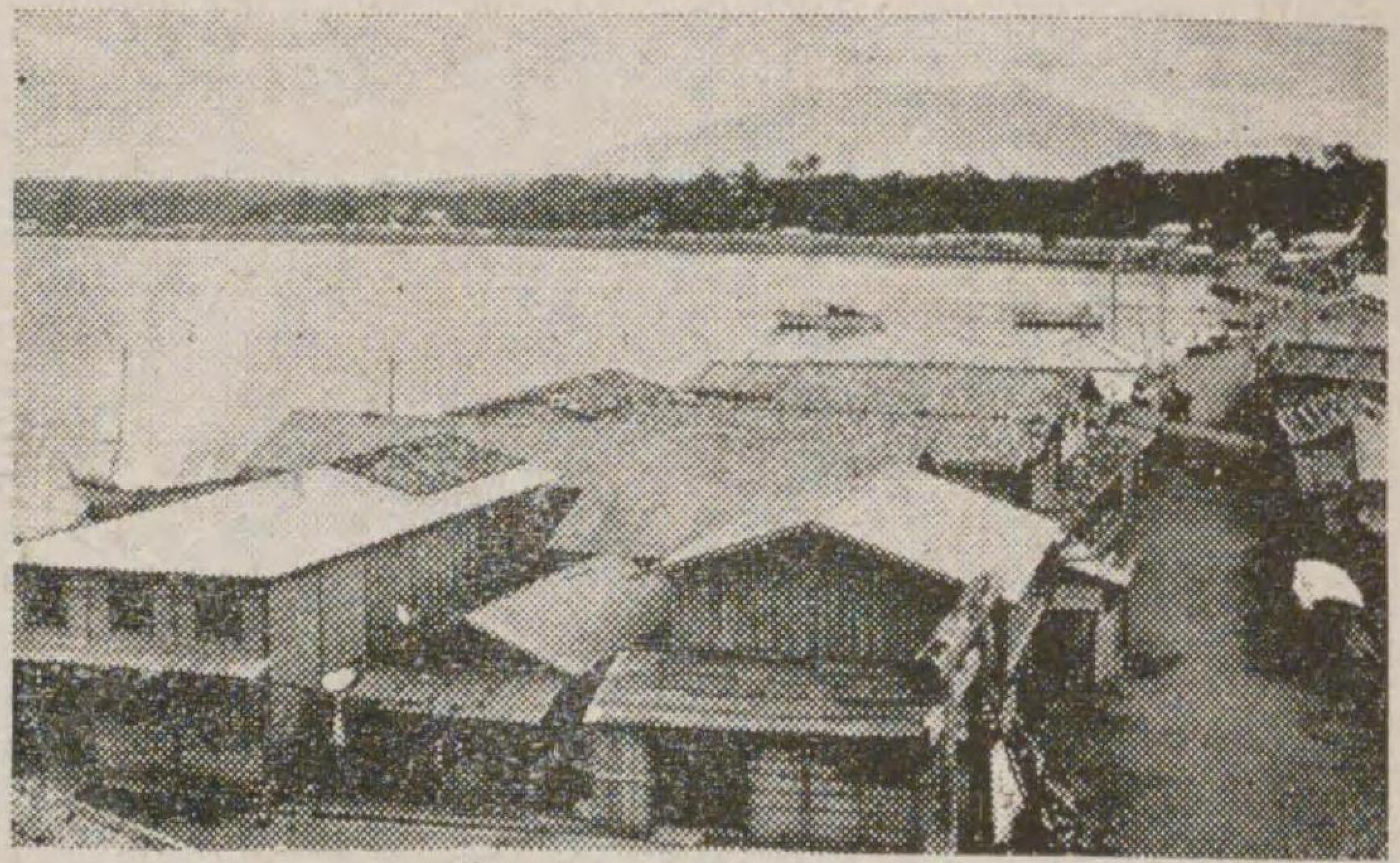
大灣北走勢依々　捲浪急潮洗釣磯
鞍上不知征路遠　一鞭衝雨到龍飛

西津輕郡（鼻和郡）

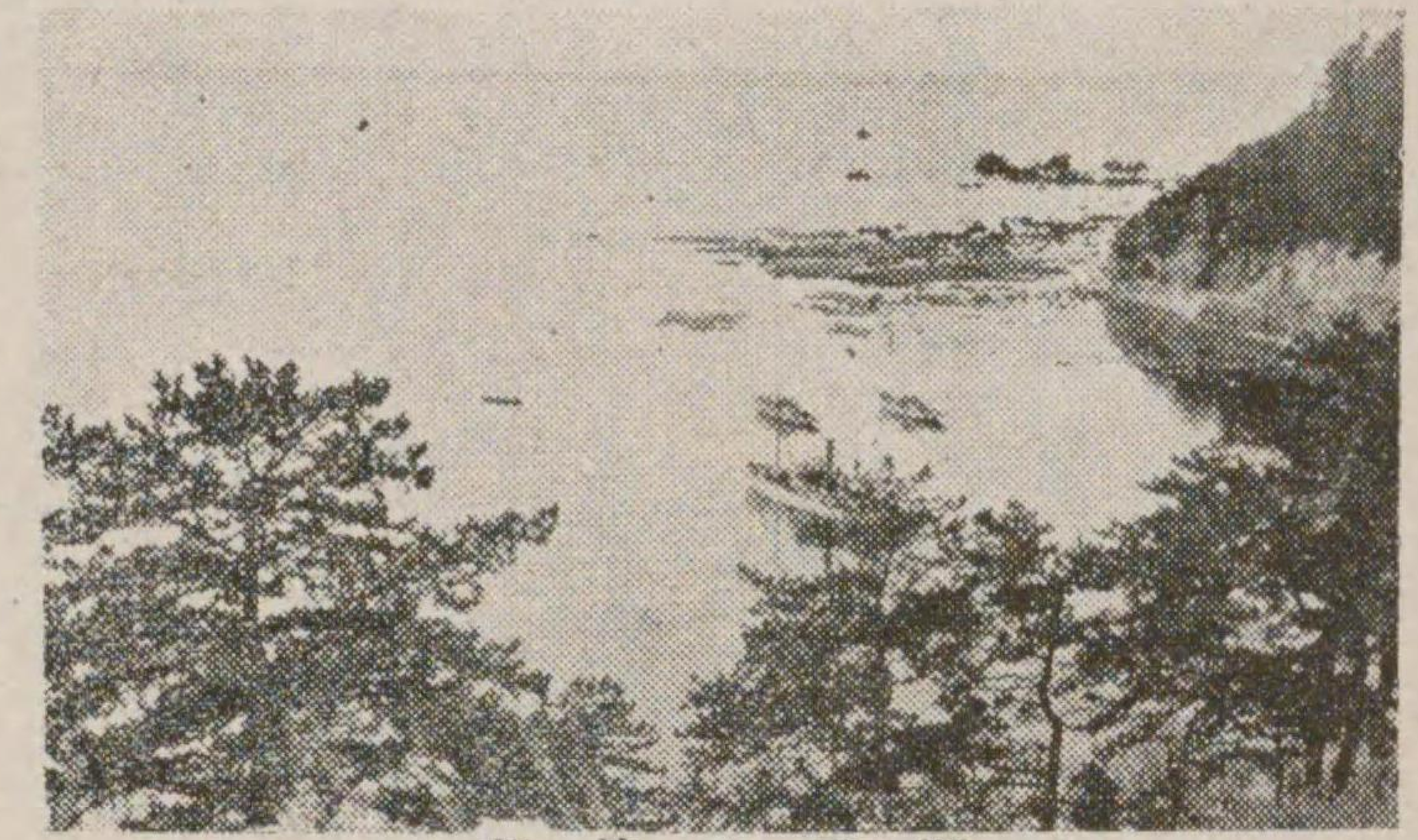
西津輕郡は古來の鼻和（花輪）の郡の一部で南は秋田、停代等の地に接し、又海上遙に越ノ國と往來する事が出來たので津輕の郡中では最も早くに開發された形跡がある、阿倍比羅夫が舟師を率ゐて肅愼人を攻めた時、船を寄せて上陸し、後郡領を置いて歸つたとあるも何れは本郡中の一地點であらう

鰺ケ澤町

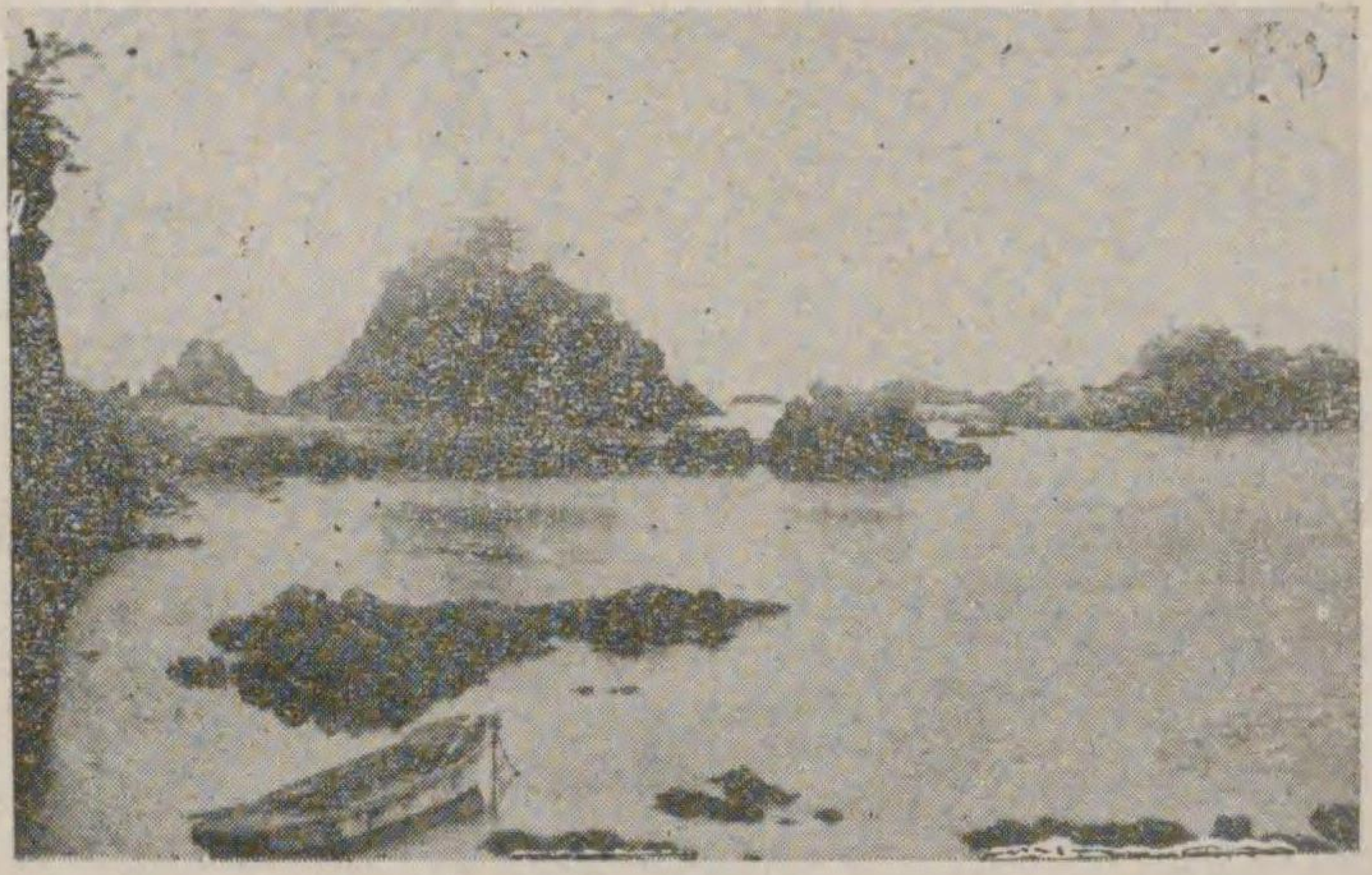
西津輕郡



鰺ヶ澤市街



深浦港遠望



深浦辨天島

鰺ヶ澤町は西海岸の中部に位し、天然の良港とは謂はれぬが藩政時代は津輕四浦の一として青森港に次ぐ重要な貿易地であつた、其の部落を爲したのは津輕安東氏の全盛時からであらうか、眞の市街を爲したのは元和元年からである、明治の初年から海運の系統が變り、加ふるに近海不漁となつて漸次に衰へた、明治三十二年から五ヶ年繼續、八萬圓の經費を以て護岸工事が完成した、又大正十四年五月十五日、五能鐵道の中、五所川原、鰺ヶ澤間の鐵道開通し、交通至便となつた、今や同地では專ら港灣の修築を希望して居る、戸數約八百五十、人口五千である

神社　鄕社八幡　外村社四　寺院　曹洞宗高德寺外六ヶ寺

種里城址　鰺ヶ澤の西南一里、赤石村に到る、河あり、赤石川と云ひ、其の流域、沃野遠く開け、南金澤種里、日照田等あり、皆其の名古い、種里は津輕家の始祖大浦光信が南部から來て始めて築いた津輕家發祥の地である、又爲信の出生した赤石城と云ふは大字日照田字野際に舊蹟があると稱せられる

八幡宮　鄕社八幡宮は種里城址の東北五町の所に在る、光信の創建した神社である

海藏寺址　海藏寺は明應年中、大浦光信の創建であるが、後長勝寺に屬し、弘前に移つた、今在る所の臥龍軒は其の末葉か

大戸瀨、小戸瀨

古蹟の多い關村

大戸瀨村と言ふは北金ヶ澤、關外六大字の汎稱であつて同名の部落があるのではない、蓋し奇勝大戸瀨の名を取つて村名としたのであらう、此の地は開拓極めて古く、鎌倉時代の初期既に安東氏の一族が城廓を構へたらしく、關の甕杉と云ふは樹齡千年餘に達し、其の下には曆應年中(五九〇年前)に建てた碑が遺つて居る、又諏訪緣起に記する元亨、嘉曆年間に安東氏と北條氏と戰つた折曾ノ關は此の地ではないかとも言はれて居る

此の古蹟に富む關村を過ぎると北金ヶ澤村に入る、南北に岬角突出して小港灣を成して居る、附近に多くの魚類を產する、行くこと半里餘、左方には峨々たる石山が海に迫り、右方は海波千里、奇岩の累々たるを見る、漸く進むに從つて岩形、石態愈々奇怪となり更に行くこと數丁、路上に十數丈の大石が玄關を爲して行人を呑まんとして居る、其の形大戸の如くなるを以て大戸瀨の名を生じた、又海上には黑岩、磊々として一面疊の如く敷かれ、海波低所を浸して滔々の響を爲す、此の一帶を小戸瀨と名づけて居る、西海岸中の奇勝である、是より深浦岩崎等に映畫の卷を續けて一層の妙味を疊ねる、遙に鳥居岬の奇景を眺めつゝ南すれば形狀變轉して怪物の如く

遠途飽くことを知らずして驅て深浦港に入る

大戸瀬鎧岩巖頭作

吟行岩石面　停杖巨巖巓
赤化國何處　蒼波攫碧天

深浦港

大町桂月

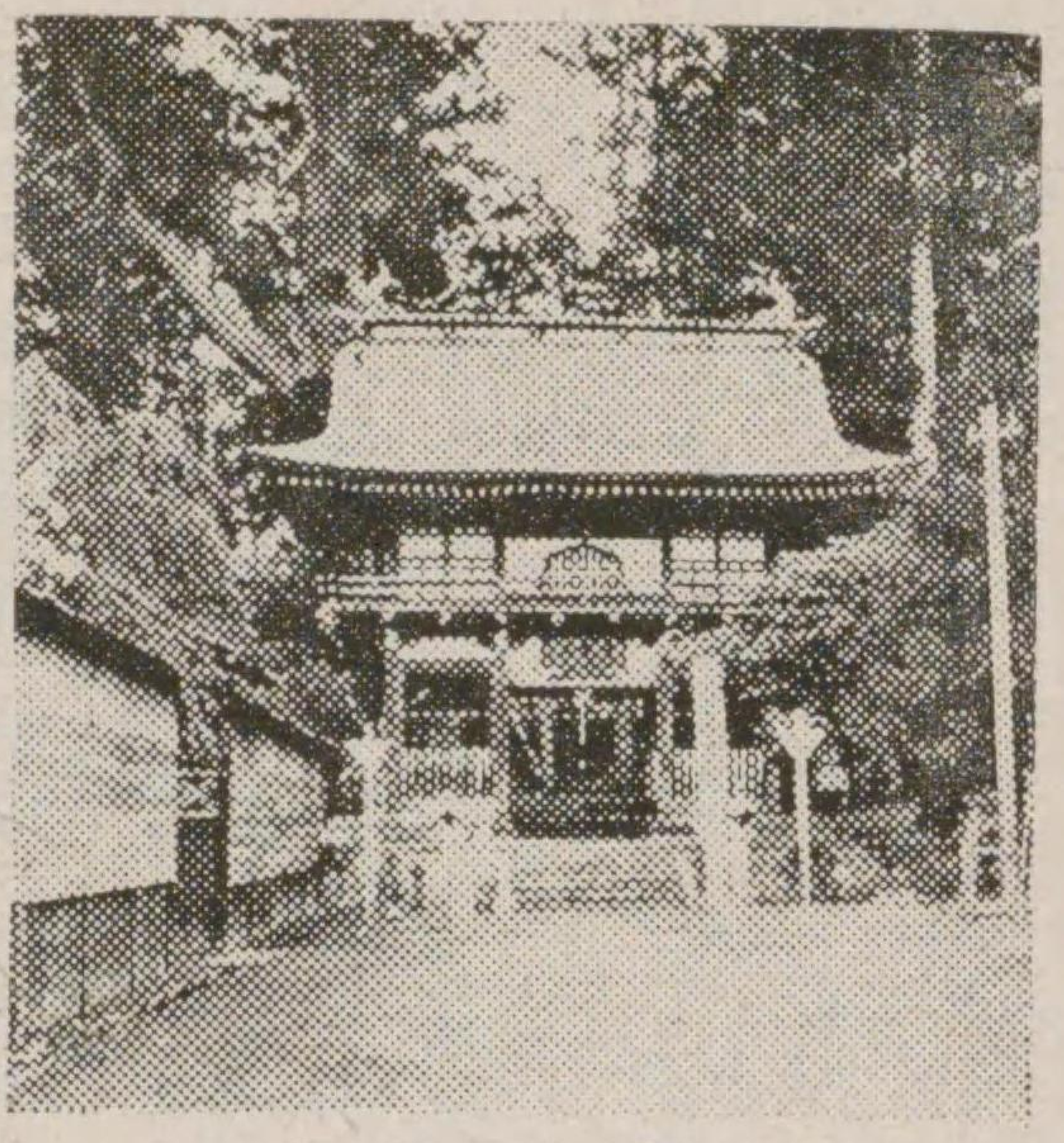
深浦町は本縣町村中最も古い歴史を持つて居る所である、始め安東浦と呼ばれ、次に海浦と稱し、更に吹浦と言ひ、津輕爲信の代遂に深浦と改められた、同地傳ふる所の東ノ濱は齋明記の有間ノ濱に當るや否やは不明であるか、同町の觀音堂は安倍、藤原氏の創建である事は疑ふの餘地がない、其の後幾多の豪族が占據したらしいか確証を得ない、同地觀音堂棟札に永正二年、葛西賴淸再建とある、其の後津輕歷代藩主の歸依する所となつた此他明應三年創建の淨土宗莊嚴寺、天文十一年創建の眞宗東派淨念寺、曹洞宗通幻派寶泉寺等の古刹があり、鄉社神明宮は寬永十一年の建立である

深浦は蹟古に富める外風景好く、東ノ濱の怒濤、猿神ノ鼻の墜道、寶泉寺の眺望、假舘跡の靜寂等皆愛すべきである、曾ては繁昌を續け絃歌の聲を絕たない同地は近年著るしく衰微したが最近港灣も修築され、又五能鐵道も着々進捗して居るので村民も緊張し、大正十五年四月一日から町勢を施行する事となつた、深浦の沖約八里餘にして久六島がある、鮑の產地として有名である

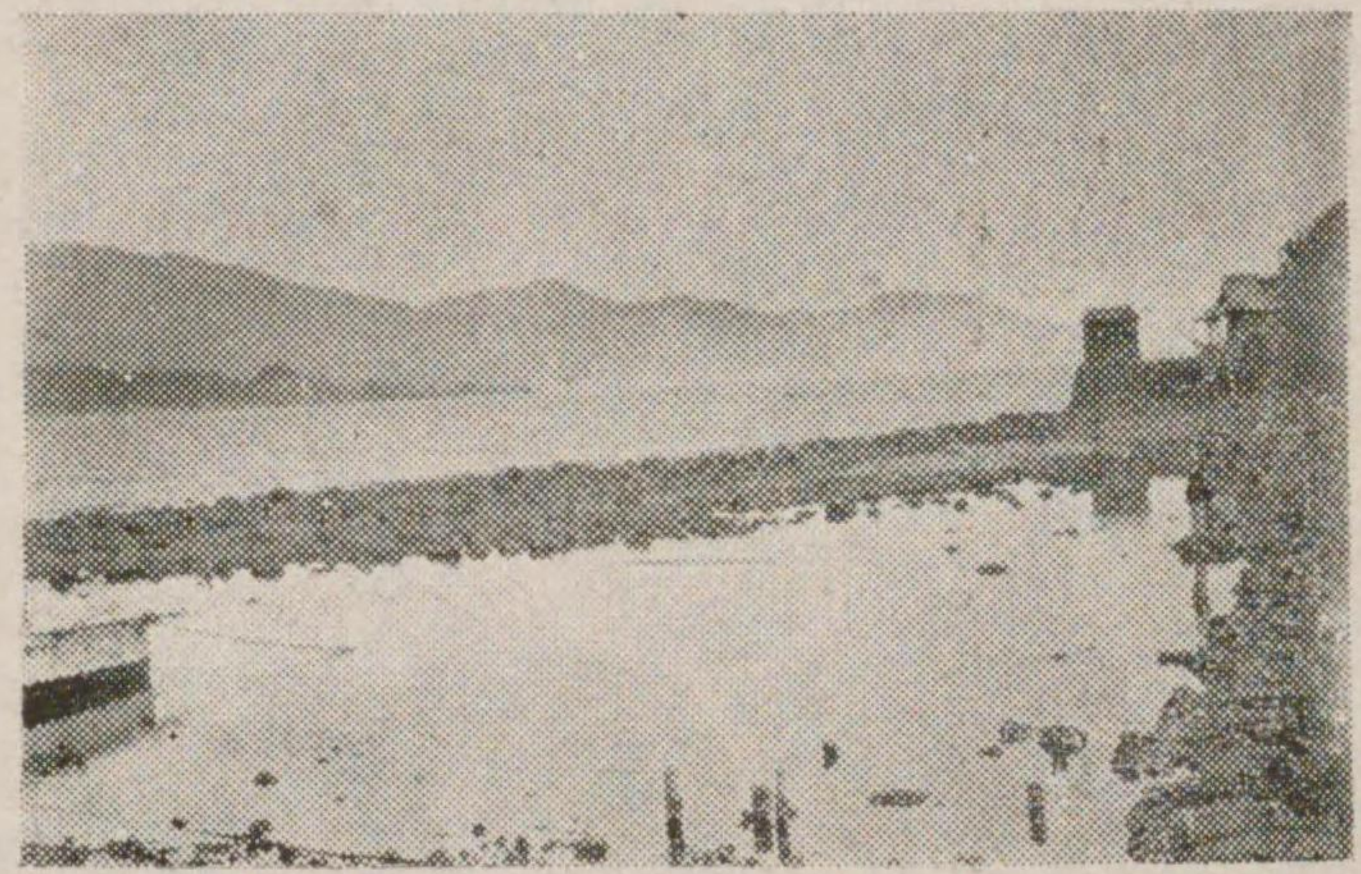
深浦みず漬　深浦はみず（野草）の產地で其の漬物は有名である、又娼婦の美を以て知られ、深浦みず漬と稱して野草の漬物と共に名高い、昔の榮華を偲ぶに足る俚謠も二三殘つて居る

私は船頭の身であれば
　來春來るやら來ないやら
妾も勤めの身であれば
　此の家に居るやら居ないやら（深浦音頭）
深浦泊りにや碇が要らぬ
　深浦女郎衆は皆いかり

岩崎の景勝　深浦から山道を迂餘曲折して行くこと二里、光景豁然として開ける、即ち岩崎村である、此の地は舊記に其の名を見ない、或は森山を以て總稱されたのではないか



深浦圓覺寺



岩崎の入船澗

「下國系圖」下國尋季、天文十五年、深浦森山に陣立す云々、「松前家譜」天文十五年森山季定亂を作す、伊駒尋季之を伐つ、松前季廣赴き援く、季定自殺す云々とある、森山は今岩崎の大字である、當時は秋田檜山の領地であつたと見ゆる、森山のガンガラ洞、松神街道のホイ〱岩等奇景に富んで居る

十二湖　笹内川を遡ること半里餘にして小湖ある、更に進めば更に湖あり、逶迤總て十二湖、綠樹欝として蒼々、神秘の境である、大町桂月氏甞て探勝して西海岸第一と激賞したと、大正五年以來米國産の虹鱒を養殖したが今は三尺以上に成長して居る

森田の竪穴　森田村は鰺ヶ澤と木造の中間に在り、今停車場の處在地である、附近の大舘池から先住民族の遺物を出し、又八十個の竪穴あるを以て考古者に重視されて居る、今の部落は概して藩政以後の開拓地であるか富裕の地と稱されて居る

木造と新田　木造町は以前木作と書し、鰺ヶ澤の東四里、五所川原の西一里の所に在る、往昔は岩木川の沿岸、低濕の地、蘆荻風にそよぐ無人の境であつた、元和八年、津輕信牧管内巡視の時、悪路通じ難く、木材を倒して道路を作つた、因て木作と云ふ、寛文以後信政墾出を經營し、天和、貞享に至つて完成した、木造、俵元

金木の三新田は是である、爾來木造町に代官所を置いたが藩政以後一段の繁昌を見るに至つた、同町の三新田神社は開拓當時の創建である

木造千代町にて　　津輕寧親

刈入るる千町の田面おくれじと
　あらそふ民の秋の賑ひ

屏風山　岩木山麓鳴澤村大字浮田から起り蜿蜒として北に走り、牛潟村大字富萢に至つて止まる、其の間幅員一里、延長十里に及ぶ、昔は一木をも生ぜぬ丘陵で西風砂塵を吹き捲り、耕作に堪ゑぬ所であつたが天和二年、津輕信政、新田開墾に當り、雜木を植ゑて海風飛沙を防いだ、乃ち名づけて屏風山と曰ふ、是に於て山東一萬餘町の耕地を得、西北兩郡の繁榮の基を爲すに至つた

七里長濱　屏風山の外、日本海に面する鰺ヶ澤以北、十三湖に至る一帶は屈曲の少ない平凡な砂濱である之を七里長濱と云ふ

亀ヶ岡城址　舘岡村大字龜ヶ岡に在る、附近に先住民族の遺物を發見する、城は元和八年、津輕信牧が新田開墾の根據地とする目的を以て築いたが恰も一國一城の制が出たので中止した

十三湖

十三湖は西津輕郡の北端に位し、湖面の最大なる所、東西一里二十八町、南北一里二十町、周圍約六里餘、岩木川、山田川、相内川等大小十數の河川か之に注ぐ、十三潟は昔「トサの潟」と稱したか、土佐守信牧の官名を諱んで「ジュサン」と改めるに至つたと

周圍は古の江流末（エルマ）郡の地であつて十三福島城を始め、都邑は湖の南北、兩岸に在り、繁榮を極めた所である、當時は湖口廣く日本海に通じ、湖底深きを以て巨船を泊するに充分であつたので鎌倉時代は日本七港中の一に數へられ、米穀、木材等盛んに此處から輸出されたと云ふ、其の後弘安、興國等の年代に暴風、洪水あり、陵谷の變を來したが藩政時代は津輕四浦の一とし町奉行を置いた

然し各川からの土砂の排出年々に多く、湖口閉塞して河水の氾濫を來し、西北兩郡の關係地方は大いに苦み、屢々是が救濟を求めた結果終に内務省の岩木川治水工事及び縣の山田川治水工事か開始され、近く水戸口の難事も解決されんとして居る、湖の兩岸に同名の村がある、甞て繁昌した事は前記したか今は甚しき寂寥の地となつて居る

十三湖即興　　　　　　　弘前　澁谷桃園

高根之下大湖中　一乘輕帆掛晩風　回棹黄昏潮亦急　舟如飛箭月如弓

○

トサの砂山米ならよかろ
　西のべんざい衆（船頭）は只でも積ませう

南津輕郡　（平賀、田舎の郡）

南津輕郡は古の平賀、田舎郡の地で平川、淺瀬石川、十川を包括し、本縣第一の沃地と稱せられる、此の地は鎌倉覇府以來、代官を置いて收納した所で、曾我、工藤の諸氏、勢力を振ひ、建武中興の時には二双子に山邊郡の政所を置いたが間もなく廢され、其の後の變遷は明かでないが南部氏、安東氏を退けて之を領有し、後津輕爲信の一統となり、明曆二年、津輕信英に黑石附近の地を分封した

黑石町

平賀　田舎兩郡の沃野を流れる淺瀬石川の北岸高地に建設された町である、元弘建武の頃勤王黨たる工藤右衛門尉貞行の所領で、後外孫八戸信光に傳承された、其の後の變遷は知るを得ない、津輕一統の後、津輕信英此の地を經營し、爾來十一代の城下町として榮ゐて來た

城址　は今公園となつて居る、地は岩木の秀峯を眺め、近く淺瀬石川の清流を俯瞰し爽快を極める、縣社黒石神社は藩祖信英公を祀る所で明治十四年、明治大帝、龍車を此處に駐めさせられた、外に鄕社稻荷神社、村社神明宮がある

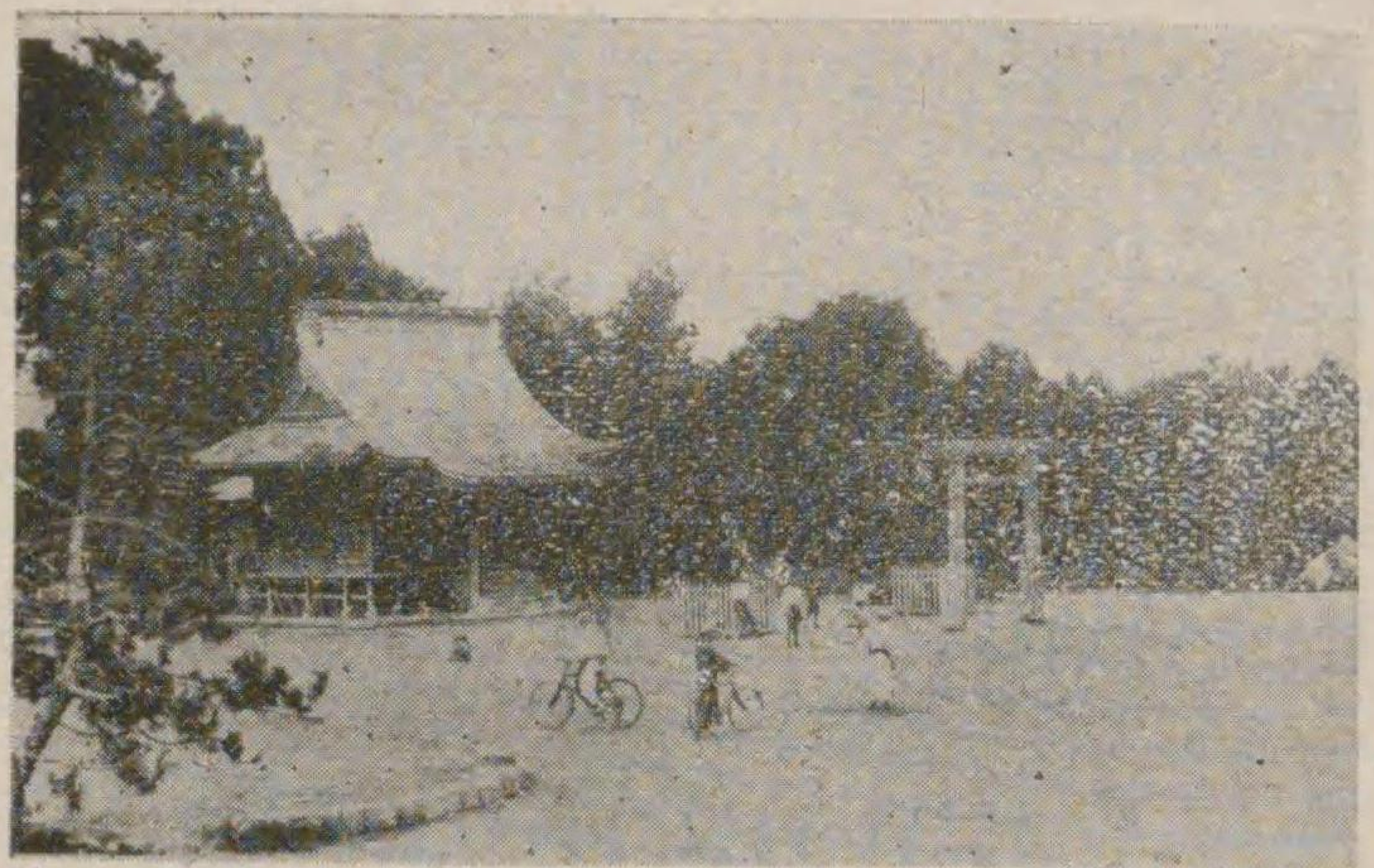
寺院　保福寺(曹洞宗)　圓覺寺(眞宗東派)　感隨寺(眞宗東派)　來迎寺(淨土宗)　妙經寺(日蓮宗)

浪岡名所　浪岡村は津輕の平野から外ヶ濱に通ふ要衝であつて舊藩時代は繁昌した驛であつた、浪岡、以前は並岡又行丘と書く、應永年間以來北畠氏の居城であつた事は沿革記に載せた

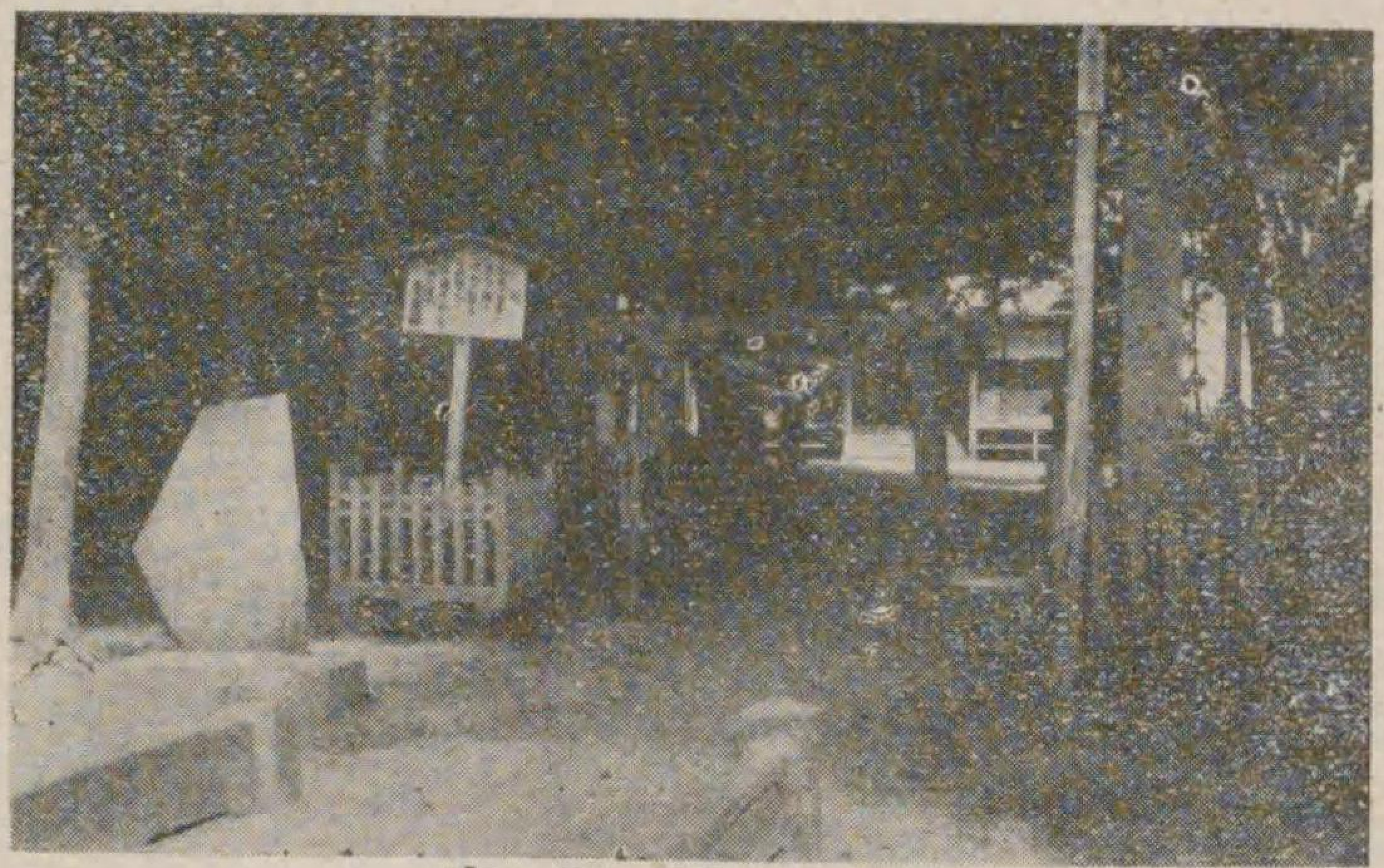
城址　同村の東方高地に在る、三面山を負ひ、下には河水を引いて濠と爲した、廓を浪岡御所と云ひ、天文年中は津輕と外ヶ濱の大半に勢力を及ぼした、永祿五年、内乱あり天正六年、津輕爲信に亡ぼされ、城は兵火に罹つて以後跡を絶つた、城碑あり、附近北畠氏累代の墓石ある所、墓碑も亦建つて居る

八幡宮　創建の由來を知らぬが北畠氏代々の崇敬した神社である、後津輕家の尊奉する所厚い

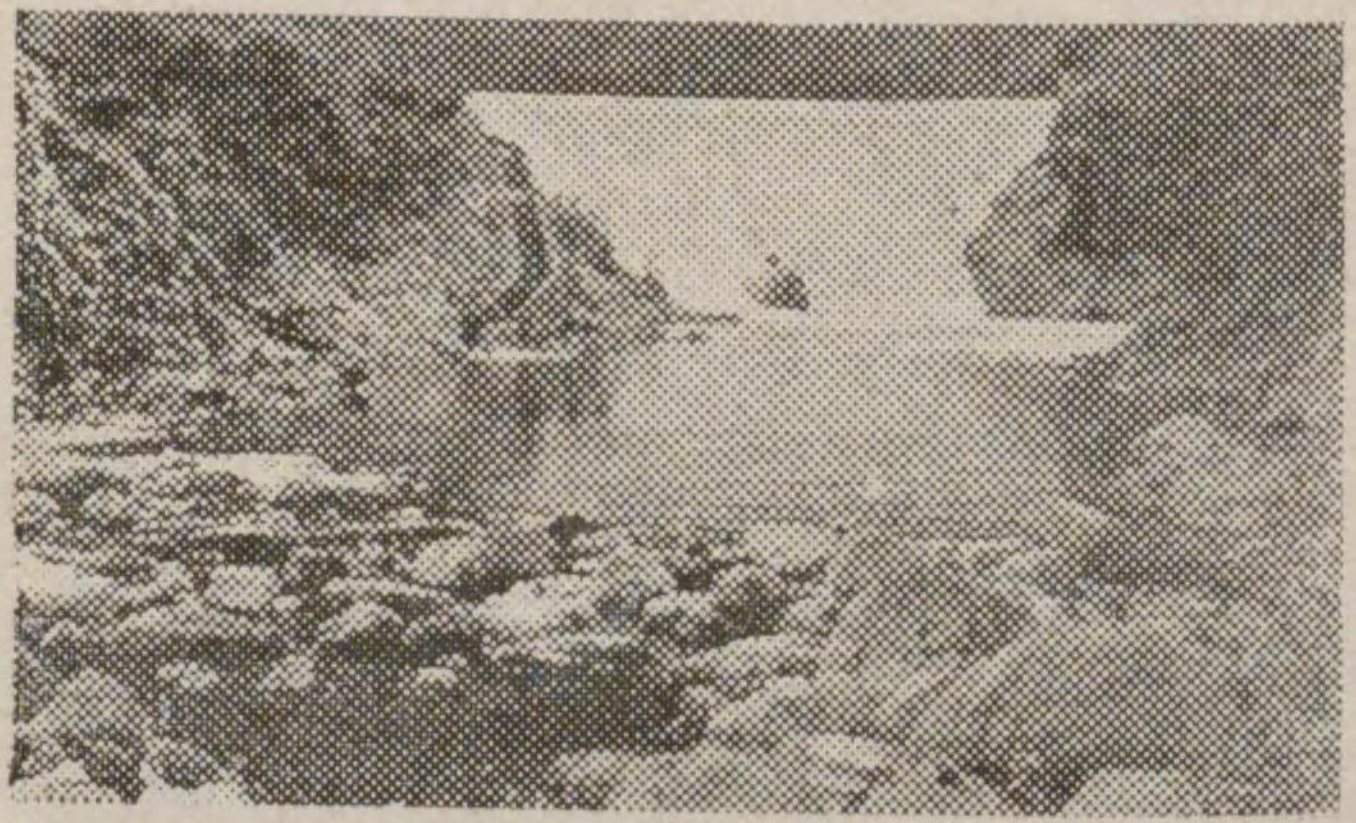
南津輕郡



黒石みゆき公園



堰神福田宮



十和田沿道淺瀬石川の溪流

西光院　涙岡驛を距る十三町、五郷村大字北中野に行岳山西光院がある、外ヶ濱の巡錫中、河流から彌陀の尊像を得た日持上人は此處に來りて草庵を結び和人、夷族を教化し六十三歳を以て此の地に入寂したと、墓は今寺内に在る

附近の傳説　涙岡から高陣場に至る間の四街道筋、五本松、羽黒平、王餘魚澤等には種々の傳説があり、又涙岡お玉が茶屋のホーハイ節は津輕爲信が敗軍の兵を慰める爲めに唄つた者と傳へられる

藤崎町　南津輕郡の西端に位し南平川を隔てゝ中津輕郡和德村に相接する、沿革は極めて古いが嘗て大邑に至つた事は傳らない

城　址　町の西方平川に沿ふて高地があり碑を建てゝ其の事を記して居る、津輕安東家の始祖安倍高星丸の築いた者である（別項沿革誌參照）下國氏亡んで空城となり、南部氏は城番を置いた、津輕氏に及び、爲信の義弟を置いたが間もなく廢城と爲つた

堰神福田宮　藤崎町に在る、慶長年間藤崎堰が年々破れて農民は困難した、時に堰八太郎左衛門安高と云ふ人があり、堰、人を以て築けば破れずと聞き、自ら進んで人柱となつた、後堰破れず、民衆惠を受け、卽ち其の德に感じて祠を建て毎年之を祀ると

模範村光田寺　黒石町の西半里の所に在る、副業として藁工品の製作盛んに行はれ、一時敗頽した村勢を挽回し模範村たるに至つた

奥の身延　六鄕村大字高舘に城址があり又附近からはアイヌ族の遺物を發見する、建武年中に山邊の政所を置いたとあるは此の地であらうと云ふ、此處より登ること二里、法峠と云ふ、六百三十年前、日蓮上人の六哲の一人日持上人の道場であつたと、寛政年中、堂を建てた所、白河樂翁公、東奥戒壇と書いた額を寄進した、明治十八年、堂を山下に移し法嶺院と云ひ、前の聖地には小庵を設けて修行の道場とした

淺瀬石川の沿岸　黒石町から淺瀬石川に添ふて東南行すること十里、十和田湖畔瀧ノ澤に到る、沿道温泉多く峽中奇勝の觀るべき者が多い

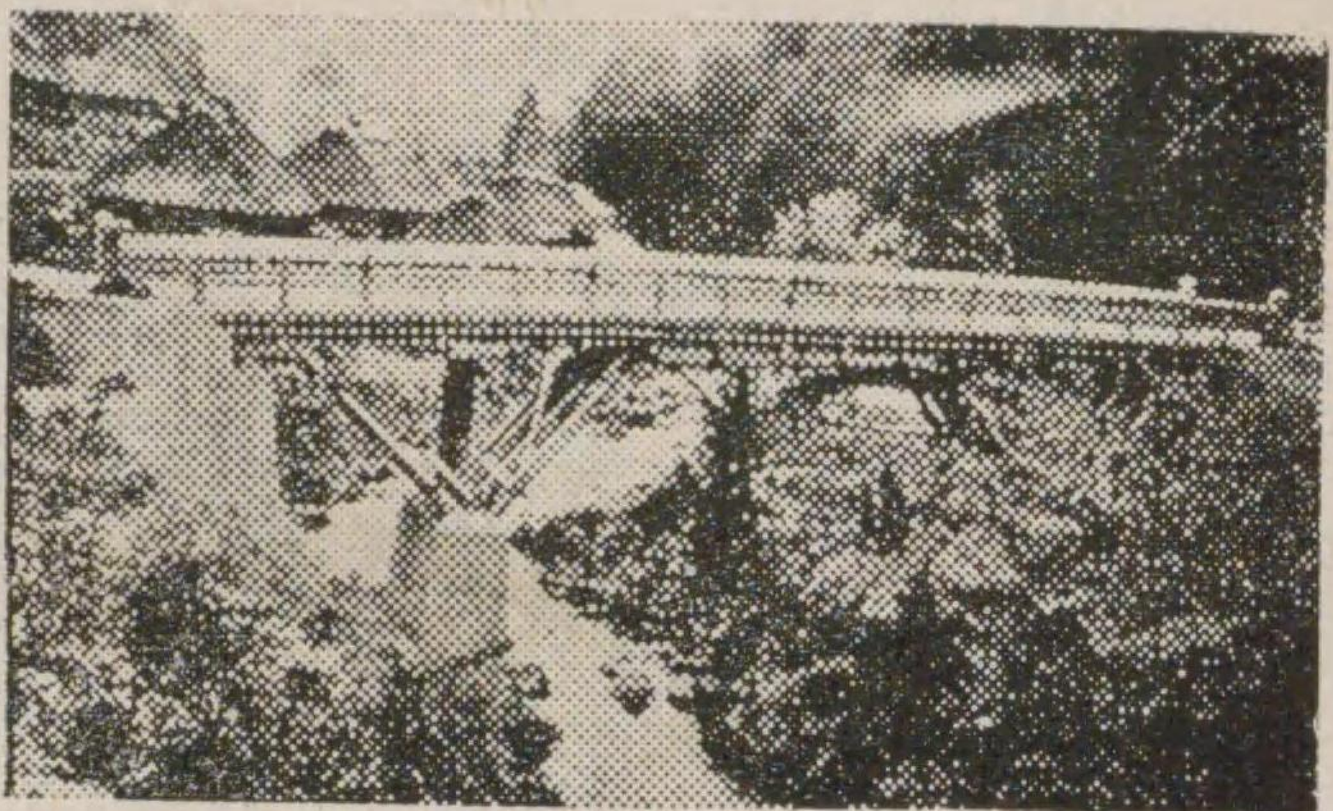
淺瀬石城　黒石町の西方一里淺瀬石村の東端高地に在る、天正年中、南部の臣千德大和守政氏の居城であつた、慶長二年津輕氏の爲め亡ぼされ廢城となつた

温湯温泉　黒石町を距る二里、峽中の奇勝を賞しつゝ行けば、淺瀬石川の低地に達する温泉あり、温湯と云ふ、又鶴泉の名がある、温度百十三度、主治効能は中風、リウマチス、産後脚氣等である

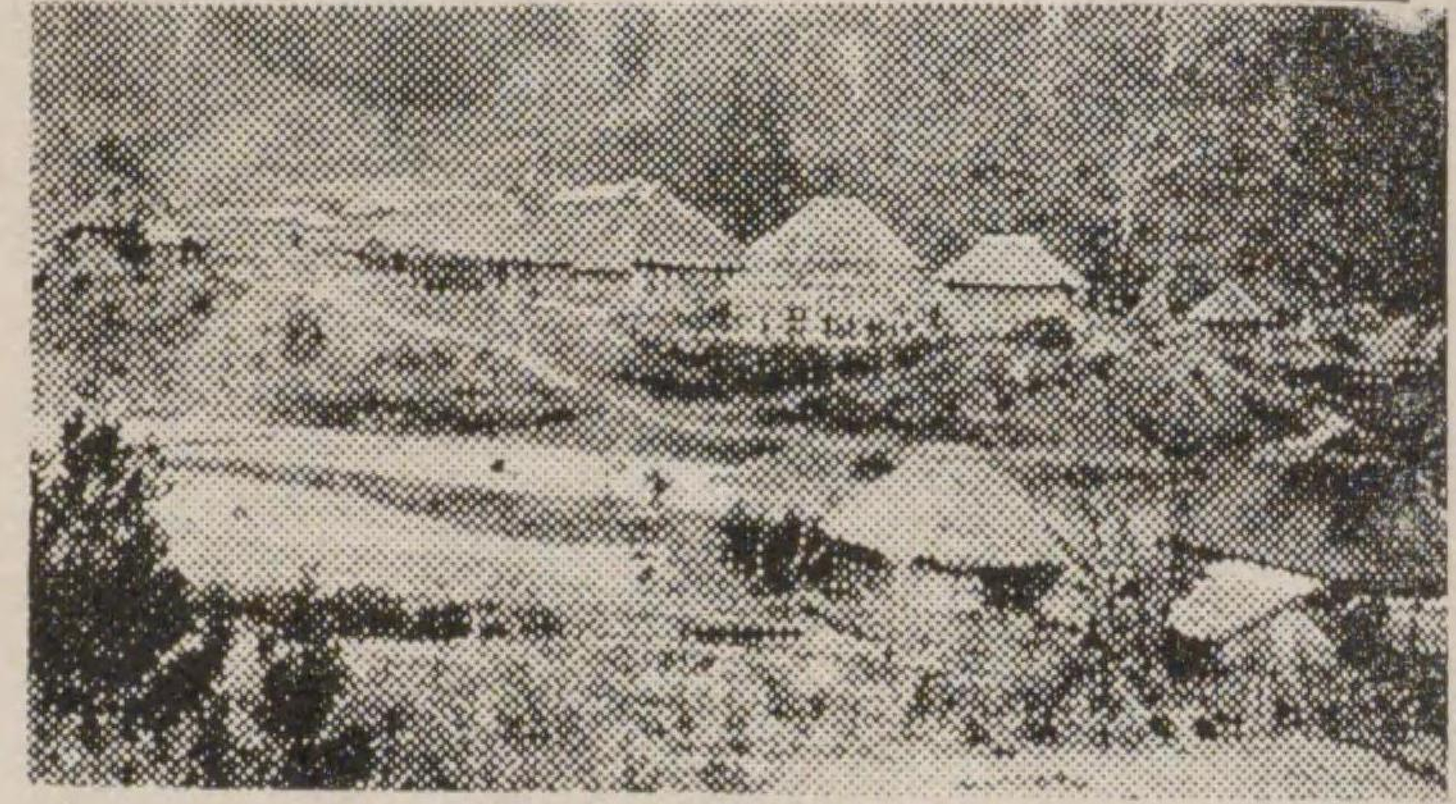
○

花山院藤原忠長

南津輕郡



二庄内村



要目温泉

温湯温泉

雲の上にきこゆあけはやなし田鶴の

いにしいで湯のしるきしるしを

中野の紅葉　温湯、板留の温泉と相距る僅に十數町、山を負ふて瀑あり、夏は綠樹繁り秋は楓葉紅を染めて燃ゆるか如くである、中野の紅葉と云ふ、享和年中、津輕藩主寧親が京都から移植した者で百種の異彩を集めた者と傳へらる

遊中野楓山　　東京　國府犀東

勢壓澗雲祠樹斜　彩霞埋却幾樵家　紅楓四百三十品　都是災川末觀花

遊中野楓溪節錄　　弘前　松野翠華

煖酒林間興不孤　彩霞殘日半模糊　傾樽更酌飛泉下　誰寫停車坐愛圖

○　　大和田建樹

瀧の上に枝さしかはすもみぢ葉を

神の手かりて折るよしもかな

板留温泉　温泉の低地から坂を登れば板留温泉に到る、寛永年中、流謫されて津輕に來た花山院忠長が河

水の温泉に流れるのを板を以て留めて入浴したので此の名あると、地は一面山を負ひ、下は淺瀬石川の激流を俯瞰すべく、別天地の感がある、湯の温度高く冷熱二種あり、腦病、神經衰弱、リウマチス、脚氣、胃腸病等に効がある、是より以南、十和田湖に到る沿道の温泉等は別に記する

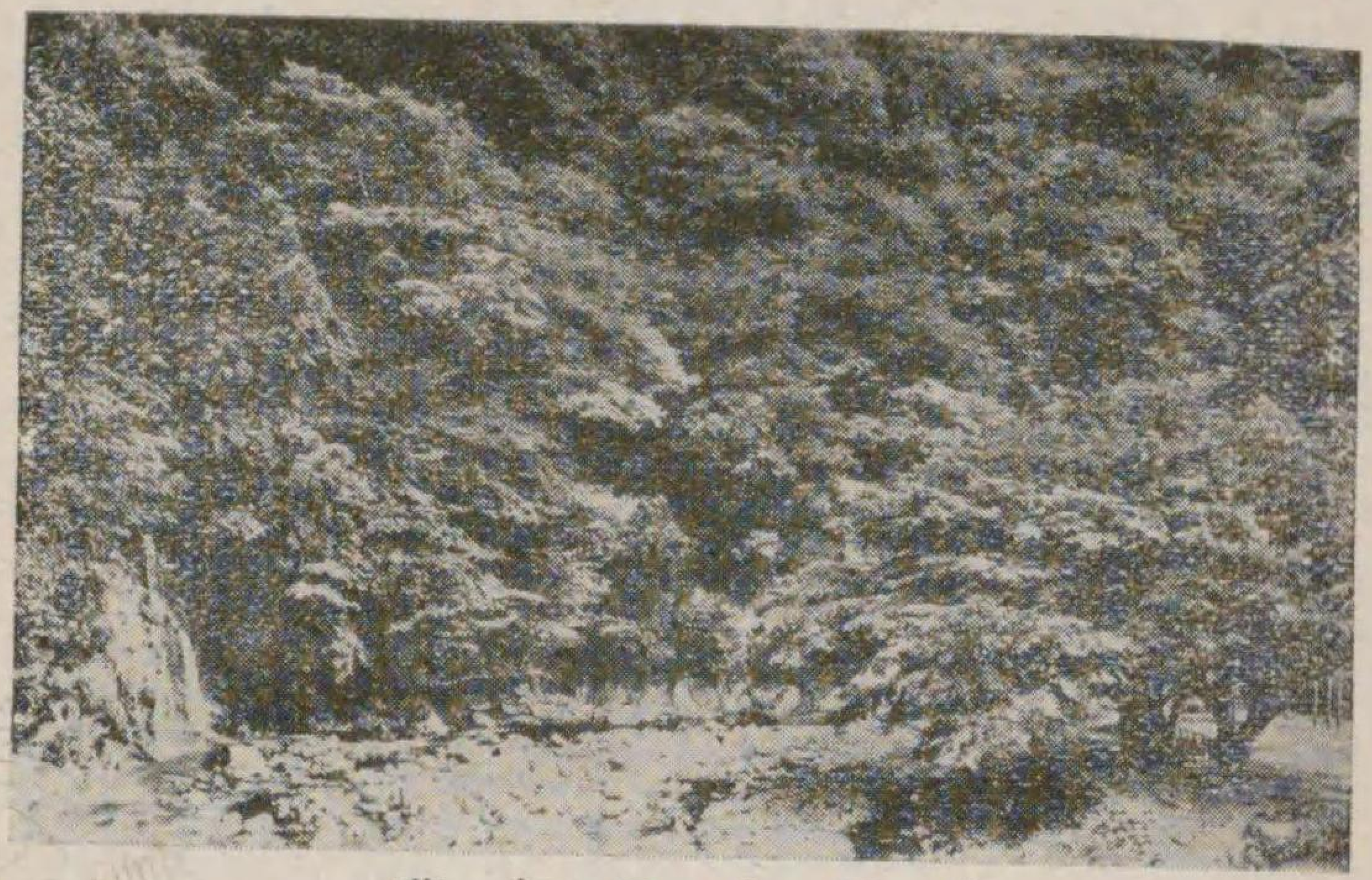
黒森山　中野村から酸湯道を行くこと半里、井戸澤と云ふ小部落がある、此處から登攀すること十四五町黒森山浄仙寺の幽境に達する、寺は浄土宗に屬し、今から百年前、黒石の鍛冶工が二十七歳で發心し、黒石來迎寺住職の弟子になり、後此の道場を開いた、曾て寺内に寄宿舍を設け、子弟を宿して漢籍を教ねたので一層有名となつた

(附記)南津輕郡を淺瀬石川を境として河南、河北と稱する事が近頃流行して居る、即ち以上は概して河北の地である、以下河南の事を畧記する

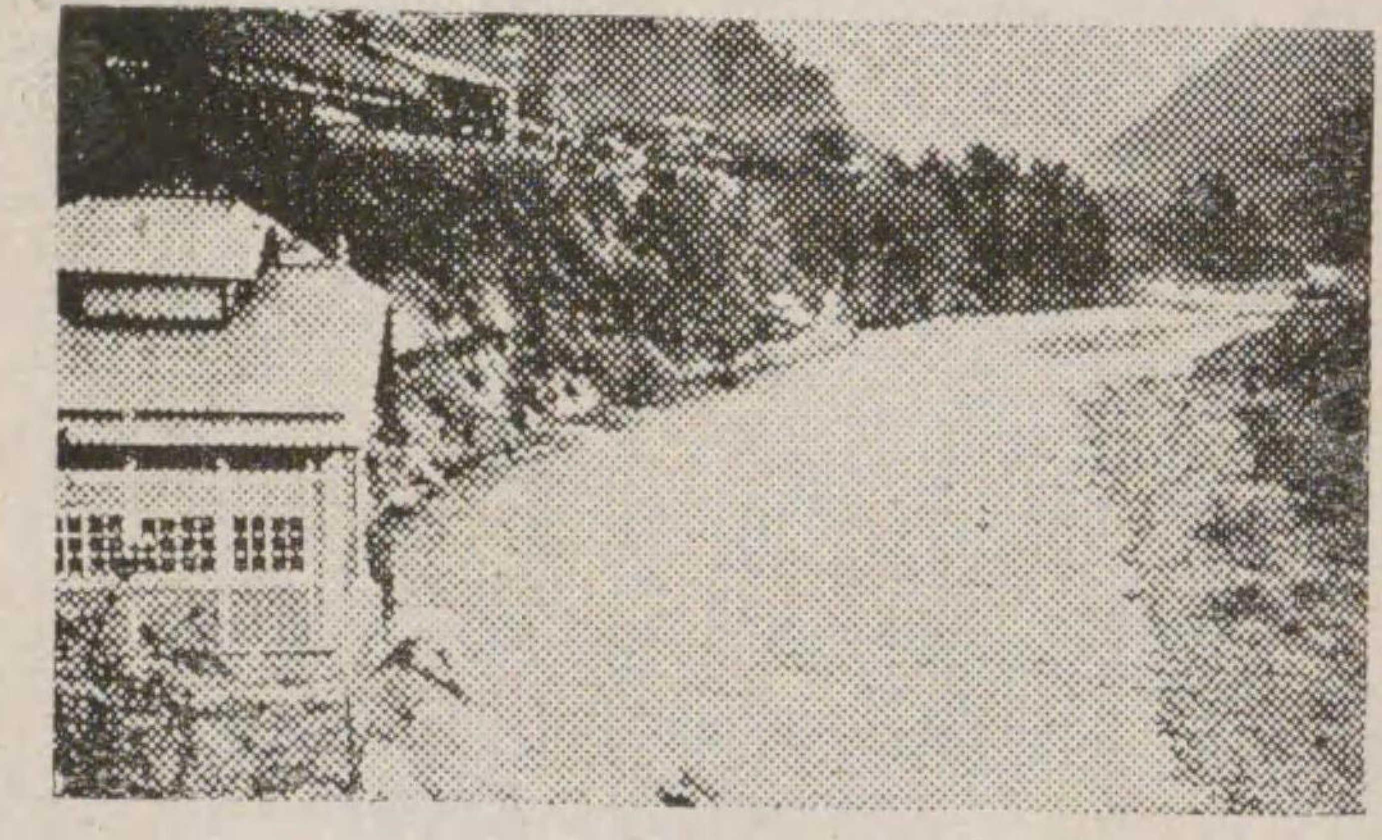
河南大平賀の郷

淺瀬石川以南の舊大平賀の鄕は今は西方平賀川を以て中津輕郡と境する、津輕の中最も早く開拓された事は前屢々之を述べた、本項は所在の順路に依らず、名所、舊蹟を一括して左に掲げる

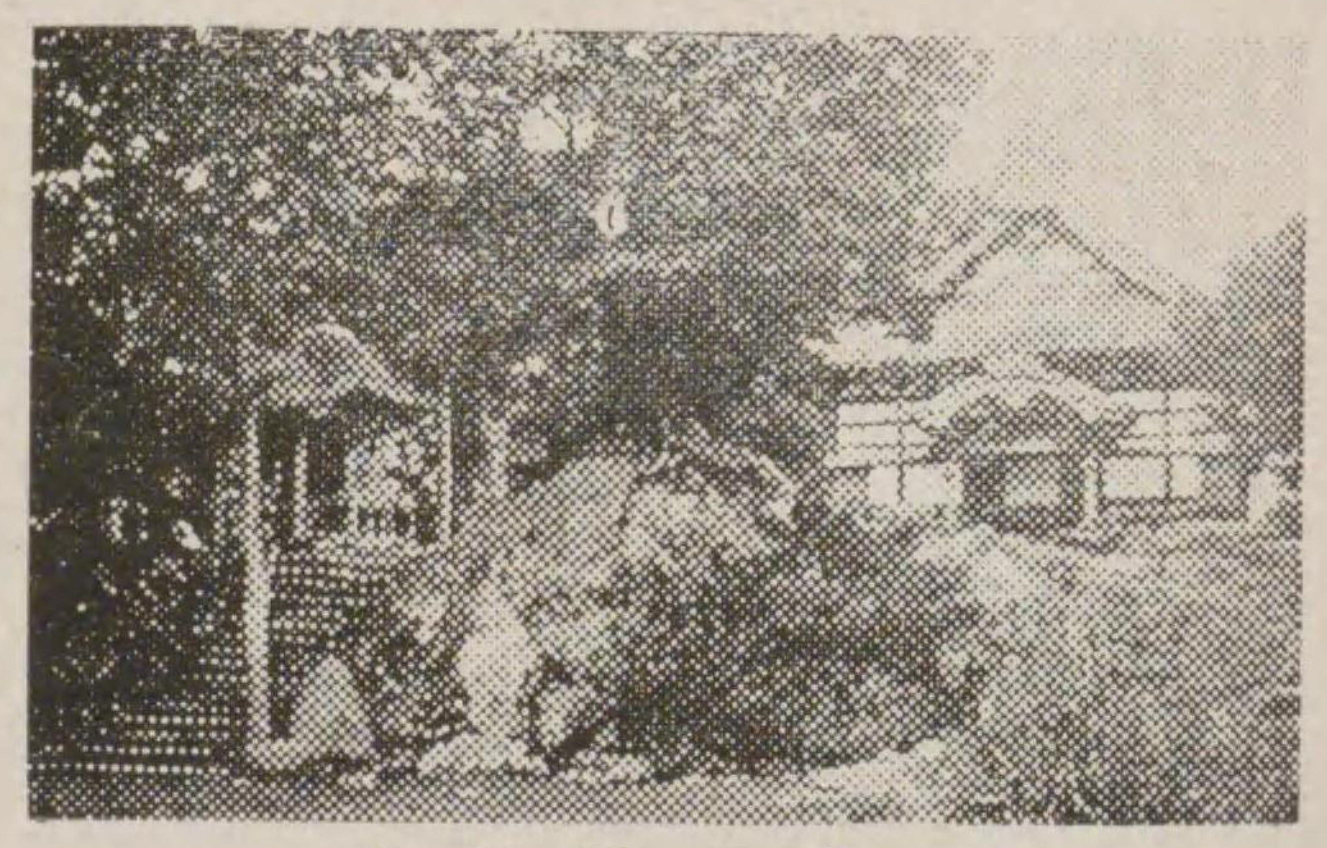
南津輕郡



中野山の紅葉



板留温泉



黒森山浄仙寺

温泉

大鰐　奥羽線大鰐驛あり、弘前驛から七哩、大正十二年町制を布いた、目下戸數千三百戸餘である、大鰐は古文書に大安國寺又は大阿ネノ郷とも見ゑて居る、其の温泉として名を洩すに至つたのは慶安二年、津輕信義の湯治以來である、温度は百五十八度、泉質は淺虫温泉と同じく鹽類泉で其の効能もリウマチス、慢性痛風、神經亢進の諸症等である

阿闍羅山　大鰐から頂上に達する約一里、山麓の狐森はスキーのスロープとして天下に知られ今春、秩父宮殿下の行啓を拜するに至つた、此の地は津輕の蝦夷を鎭定する爲め伽藍千坊を置かれた所と稱せられる

藏舘　平賀川と一橋を隔てゝ大鰐と區分される、同じく温泉あり、泉質、効驗兩者同樣である

國寶大日如來と萩桂　大鰐驛から五町、藏舘村の入口に大圓寺がある、境内大日堂の如來像は國寶に指定され、又路頭の萩桂と稱する老樹は葉は桂に似て花は萩の如くである、日本三大名木の一に數へられる

碇ヶ關　奥羽線碇ヶ關驛から十町の所に在る、秋田縣に通ずる津輕晝南の地であるから藩政時代に關所を設けて出入を嚴戒した、幽靜閑佳の境温泉湧き、泉質は弱鹽類泉で主治は脂肪過多症、全身多血、腸の慢性、子宮

諸病等である、碇ヶ關、古書に嘆ヶ關と見ゆ

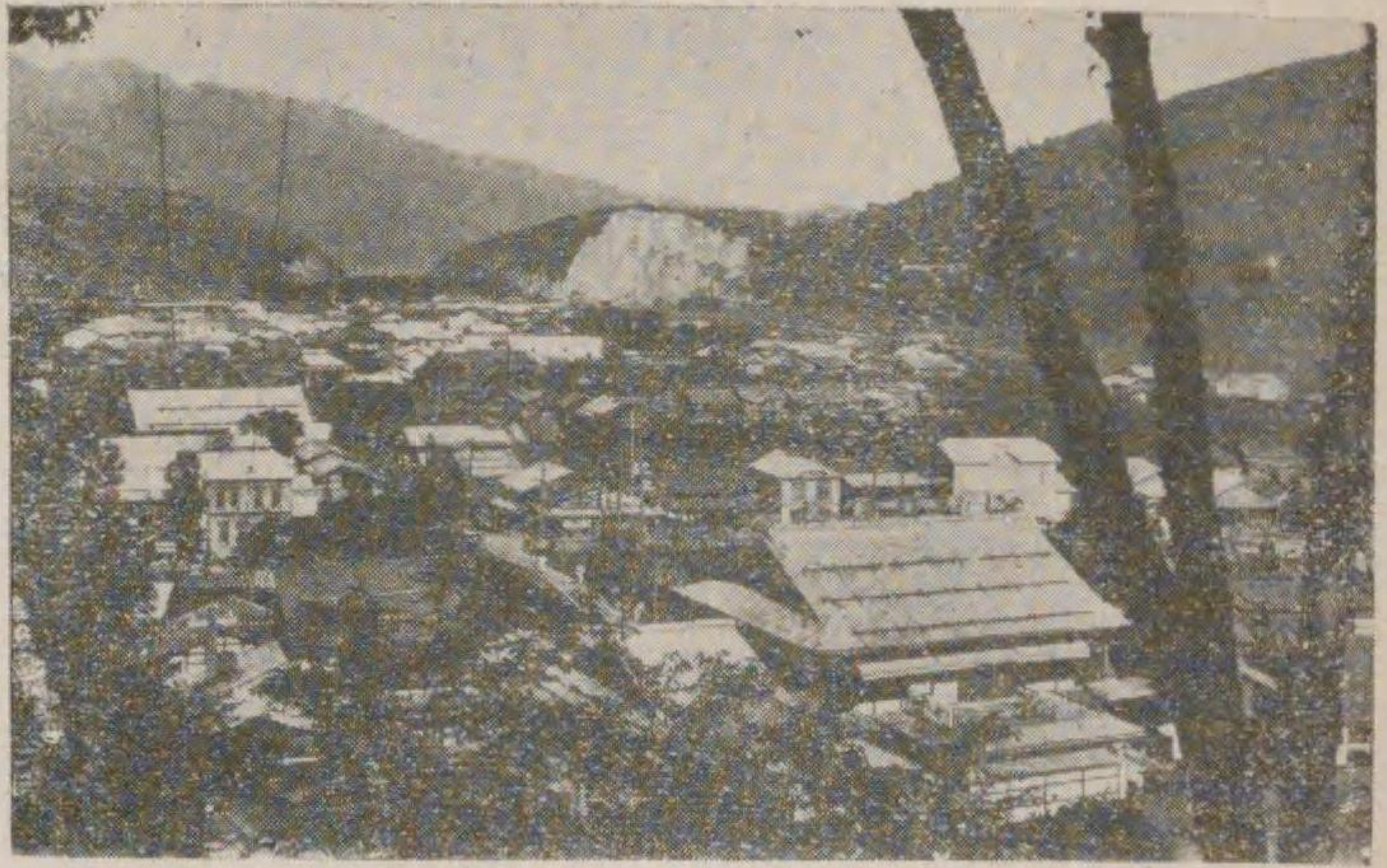
國上寺 俗に古懸の不動として知られる、碇ヶ關驛から半里、大字古懸に在る、北條時頼、阿闍羅の山坊を茲に移したと傳ふ、津經爲信、天正十六年、寺號を國上山不動院と定め、伽藍を莊嚴にし隣邦に備へた

平川の河鹿 平川の流域には前記の三温泉があり、河中に小石多く、水流常に滔々の音を絶たない、又河鹿の聲も聞かれる、寛文年間、藩主か京都の鴨川から移殖したのであると、又同名の小魚あり、美味として珍重される

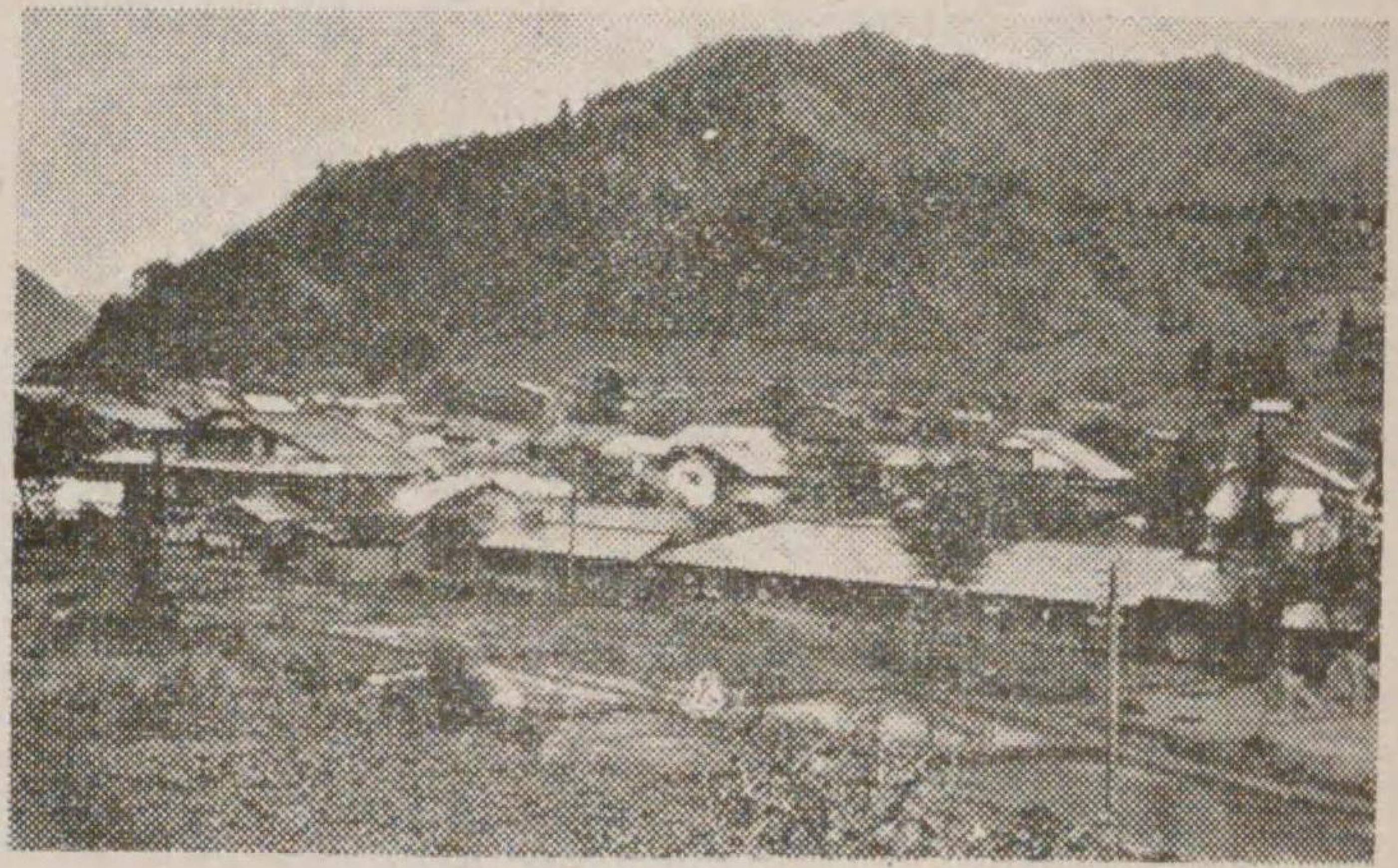
東北遊日記一節　　吉田松陰

嶺を下り橋を渡り、關に入る、乃ち津輕置く所、驛を碇ヶ關と曰ふ、温泉有り浴す、於阿仁（オアニ）を經、亦温泉有り石川に至る、直行すれば青森に至るべし、左折して橋を渡る、雪水方に漲りて橋に溢る、石川に傍ふて便道を取り、弘前に入る、是れ津輕越中守十萬石の都なり、此の間田間小路、雪水洋溢して往々脛を没し、膝を没す岩木山、雪を含みて高く聳ゆ、三峰魏然、宛として富岳の如し、宜なり、俗之を津輕富士と謂ふや、碇ヶ關以北、愈進めば愈濶し、弘前に至る、四望蒼々漫々、皆肥沃の田なり、行程九里（原漢文）

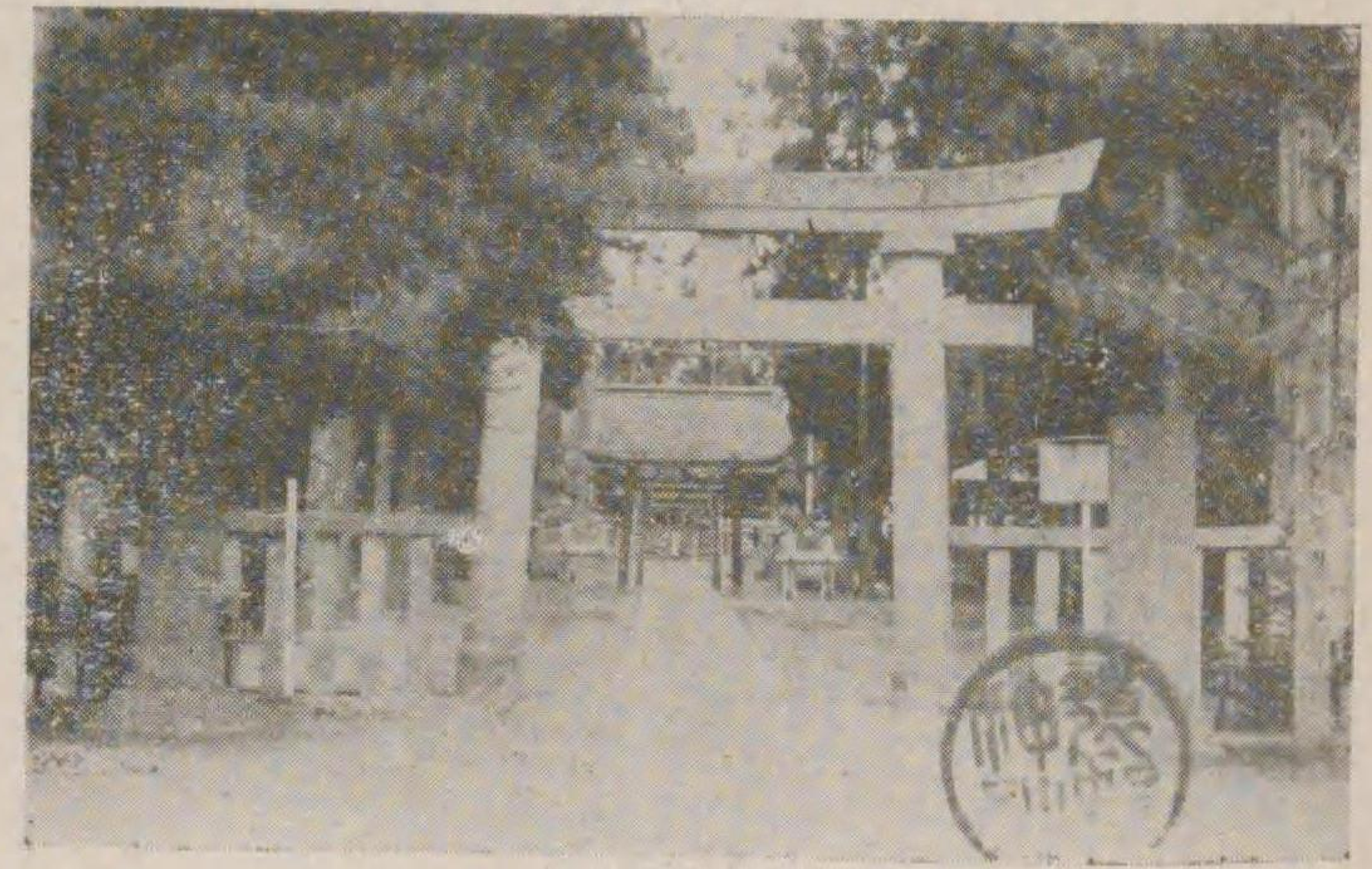
南津輕郡



大鰐温泉場



碇ヶ關温泉



猿賀神社

碇關爲奥羽彊界、以險阻著、維新後平嶮峻通車馬　岡　鹿門

關廢猶看形勝優　群峰笋立日光幽　清時四塞無烽火　獨自哦詩入羽州

藏舘温泉僑居雨中偶成節錄　淸藤柳亭

低樹陰雲山隱見　過河秋雨水潺湲　浴東浴去間高枕　俯聽水聲仰看山

大鰐溫泉即事　田口羽山

靈泉湧出此繁華　一帶長流兩岸家　小夜誰傳金縷曲　琵琶門巷最淸譁

城址古館

大光寺城址　永久年間以後、鎌倉の御家人曾我氏の居舘である、建武元年落城後、八戸南部氏之を守り、興國、正平以後の事は傳らない、或は安東、南部兩氏の爭奪地となり、天文、永祿の頃は南部の一族是に因り、天正三年、津輕爲信に亡ぼされ、後爲信の女婿左馬助建廣居り、慶長十二年、謀反して信牧の爲め除却された

田舎舘址　千德掃部政武、南部氏に屬して孤忠を守り、天正十三年落城

石川楯　今石川停車場の在る所から高地大佛ヶ鼻を含む地域は其の楯跡であると、元弘三年、大光寺城

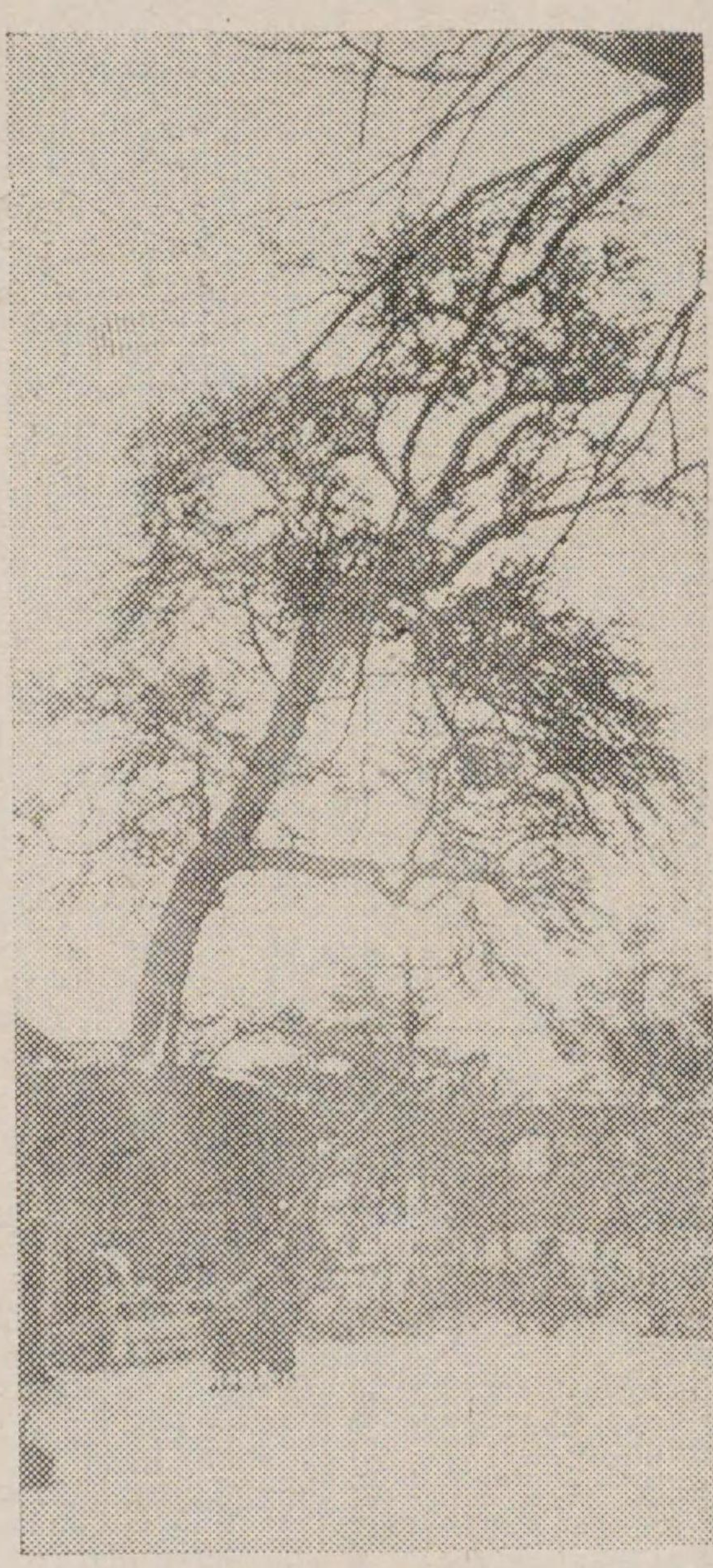
攻めに引續き翌建武元年五月、曾我光高、石川楯を攻めて北條の殘黨を亡ぼした事が古記に見ゆる、後天文、永祿の頃南部高信、古城を修理して之に居り、元龜二年、配下たる大浦爲信に不意に襲はれて自殺し、城は又陷落した

乳井の茶臼館　大光寺落城後、瀧本播摩、大光寺六郎、七郎等比山勢を率ゐ、天正七年茶臼館に據り回復を計つた、爲信之を攻め一命を危くした所である

縣社猿賀神社　黑石驛を距る一里十一町大字猿賀に鎭座する、其の創建極めて古く治承二年、藤原秀衡堂宇を修理したとも傳へらる、津輕氏一統後、尊崇特に深く、社領百石を寄附し、屢々造營修理した、境内の廣さ凡そ十五町餘、殺生禁斷の地として百鳥群を爲して居る．陰曆八月十四日、十五日例祭行はれ、遠近の賽者は頗る多い

乳井の毘沙門堂　竹舘村大字乳井に在る自河院の御宇、承曆二年（一〇七八年）東夷調伏の爲め建立し嘉祥山福王寺と號せしめ、世々別當を置き、寺領を與へた、元龜、天正の頃別當乳井大隅は南部の一族で猿賀の別當をも兼れ、勢力一城主を凌ぐの槪あり、天正の始め、故あつて大光寺の瀧本に殺され、所領を奪はれたが其の子建淸、津輕爲信に屬して回復した

南津輕郡



大日堂と萩桂（村舘藏）

柏木の郷　今柏木町村と言ふ、大字高畑、岩舘、大坊等は曾我氏入部以來、占據した要地で古記錄に其の名が散見する、中に就き岩舘は曾我の別流五郎二郎惟重以來の居舘で、建武元年、大光寺の曾我氏を破り、一時は津輕全郡に威を振ふに至つた

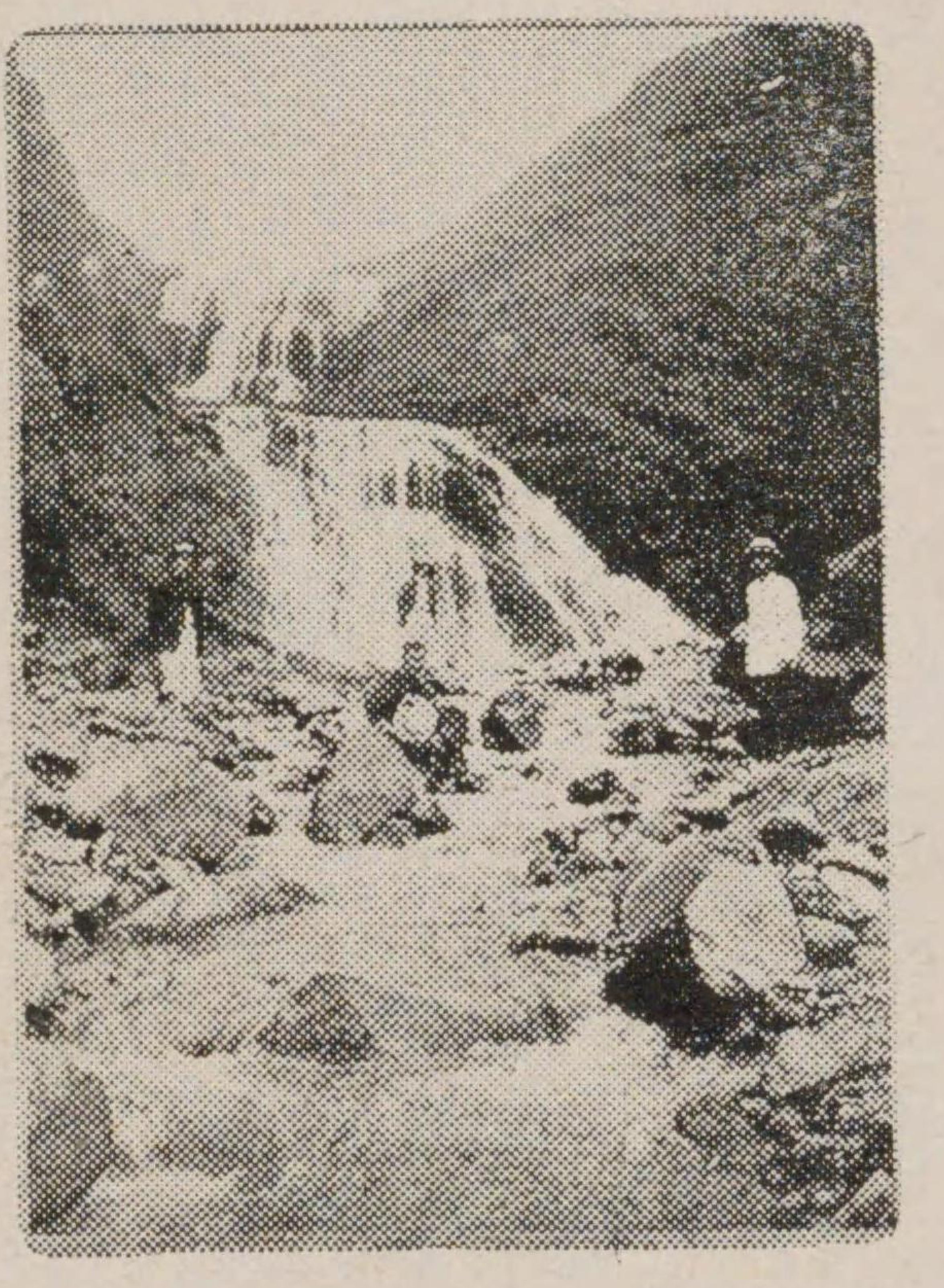
北津輕郡（宇麻、江流末郡）

北津輕郡は古の津輕外三郡の東部に屬し、興法郡、宇麻郡に當る、津輕一統志に、興法郡二千餘町、馬郡三百町・江流末郡（西津輕郡の北半部）五百町なり、京役にて王領なり云々、久しく安東氏に領有され、應永以後南部氏に歸屬し、後浪岡北畠氏の領となり、津輕一統の後田舍郡に包括された

郡の中央部を岩木川貫流し、流域一帶は沮洳地で僅に高臺に在る、飯詰、喜良市、中里、今泉、相內等部落を爲すに過ぎなかつた、元和以後藩の新田開拓に因り異常の變化を來し、明治大正に至り、岩木川の治水に因つて益々開發の度を進める事となつた

五所川原町

北津輕郡



七ツ瀧

北津輕郡の政治、經濟の中心たる五所川原町は青森市を距る約八里の所に在る、五所川原なる名稱の因つて來ろに就ては諸說あるが定め難い、地は岩木川に沿ひ、他の一帶の地と同じく、河磧卑濕の地であつたことは爭はれ難い、延寶四年、竹森彌太夫、原子助太夫等藩主信政の命を奉じ、河に沿ふて長堤を築き以て墾田の事に當り苦辛慘憺の後其の大業を成就した

今五能鐵道の中心として四通八達の位置に在り、特に岩木川の改修工事進捗と共に益々膨脹發展の道程に在る町の富豪佐々木嘉太郎氏は縣下第一の多額納稅者である

高舘城址 五所川原町の東方一里飯詰村の南端高地に城址がある、高舘と曰ふ、天文年中、樺澤團右衛門の居舘であると、又朝日左衛門なる者も居たと傳へらろ、想ふに北畠氏の配下として此の一帶を統制した者であらう

金木町 五所川原町以北の大邑で藩政時から金木組十ヶ村、金木新田十八ヶ村を統轄し繁昌した所である郊外に芦野競馬場があり、毎年一回、本縣產馬組合聯合會の競馬會開かれて賑ふ、北行中里村に到る、延寶、天和の頃からの派立である

十三福島城

安東氏の居館

十三湖の周圍は古の江流末郡に屬し、外三郡京役として安東氏の管領する所である、安東氏始め藤崎に居り、後十三湖上に移つて館を築き、夷俘を統率したと傳へらる、平泉藤原氏の盛期、對岸の渤海又は日本海面の上國と交通貿易するに此の湖港よりし、北條時代の初期、十三は日本七港の一として知られた、十三福嶋城は想ふに是より以前の築城であらう、妙見堂山王坊の遺文『十三往來』は當時の盛觀を記して居る、又近來秋田家より『十三新城記』なる遺文を發見した、城址は久しく明かでなかつたか近年、地方の篤學者探索の結果發見され、其の廢墟、礎石を十三往來に對照するに符節を合せた如くであると

今泉と相内　兩地十三湖の北東に在る、十三福島城の地である、今農林省森林鐵道は蟹田川を遡り、峯を越えて鳥谷川を下り今泉に達する、安東氏の外ヶ濱連絡道は是か

小泊港　相内から唐川を渉り、磯松、脇元に到る、村端古館あるは十三の新城唐川城址か、更に北行して小泊に到る、津輕北端の港で北海道と相對し、十三福島城盛時からの開村である、嘉吉年中、安東盛季、南部軍

に敗れて此の地柴崎舘に防ぎ、遂に力盡きて蝦夷地に渡つた、港は南北に岬角突出して風波を防ぐに足る、大正十二年、築港工事竣り、更に安全な避難港となつた

權現岬　小泊の南方、日本海に突出し、長さ一里に達する、突端に權現神社がある、又小泊の附近には辨天崎、七ッ石等の奇景がある

梵珠山

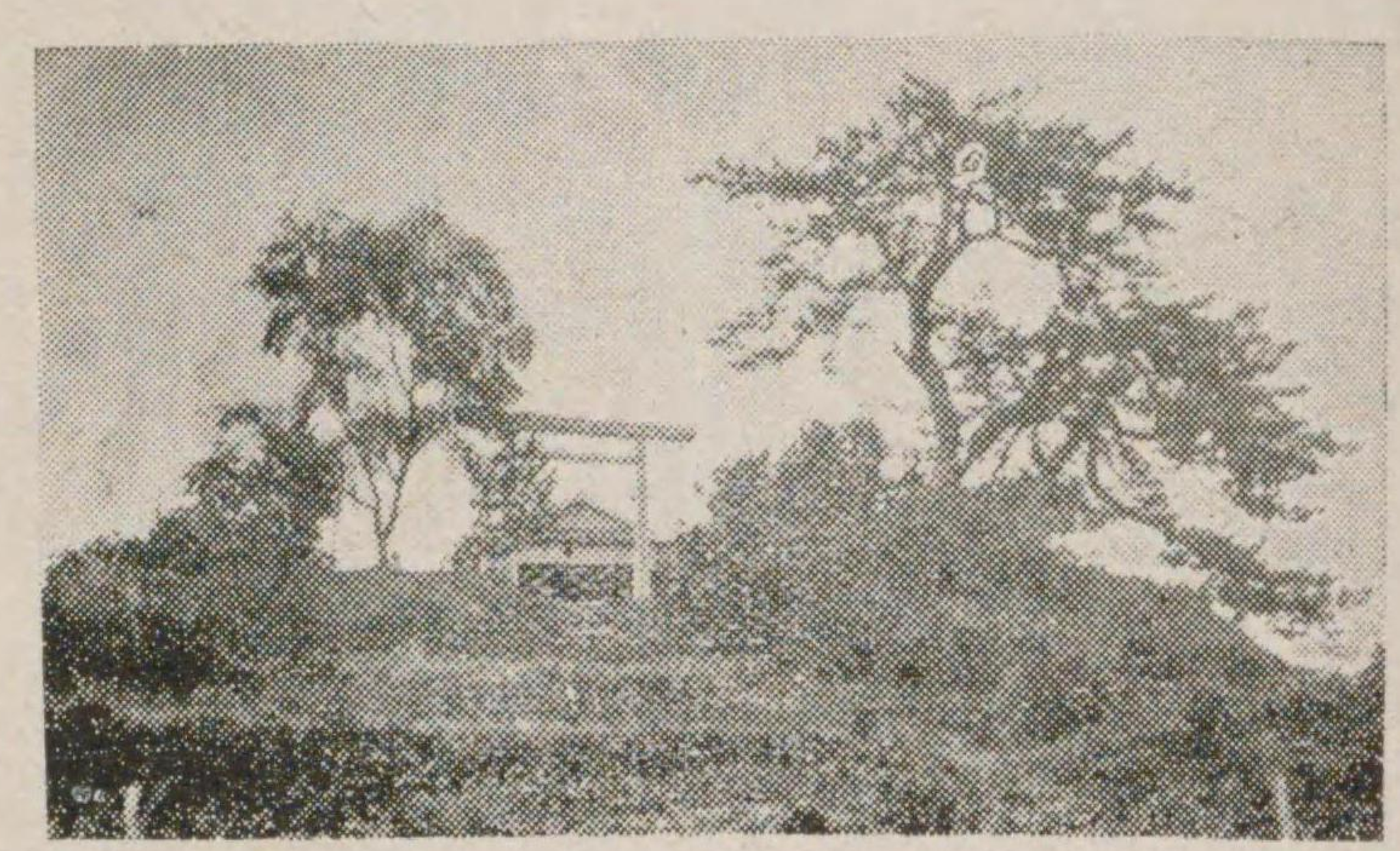
青森市の西方に蜿蜒たるは梵珠山脈である、山は東、北、南に跨り、北津輕郡七和村に屬する、山名はアイヌ語ポンニンタイ（美しき小高き山）と言ふに佛語梵珠を當てたのであらう、頂上に巨刹の址がある、青森灣、津輕の平野等眼下に在り、風景が好い

松倉神社　梵珠の登山口たる七和村大字前田野目に在る、大釋迦停車場を距る一里、昔から松倉梵珠岱の觀音として有名である

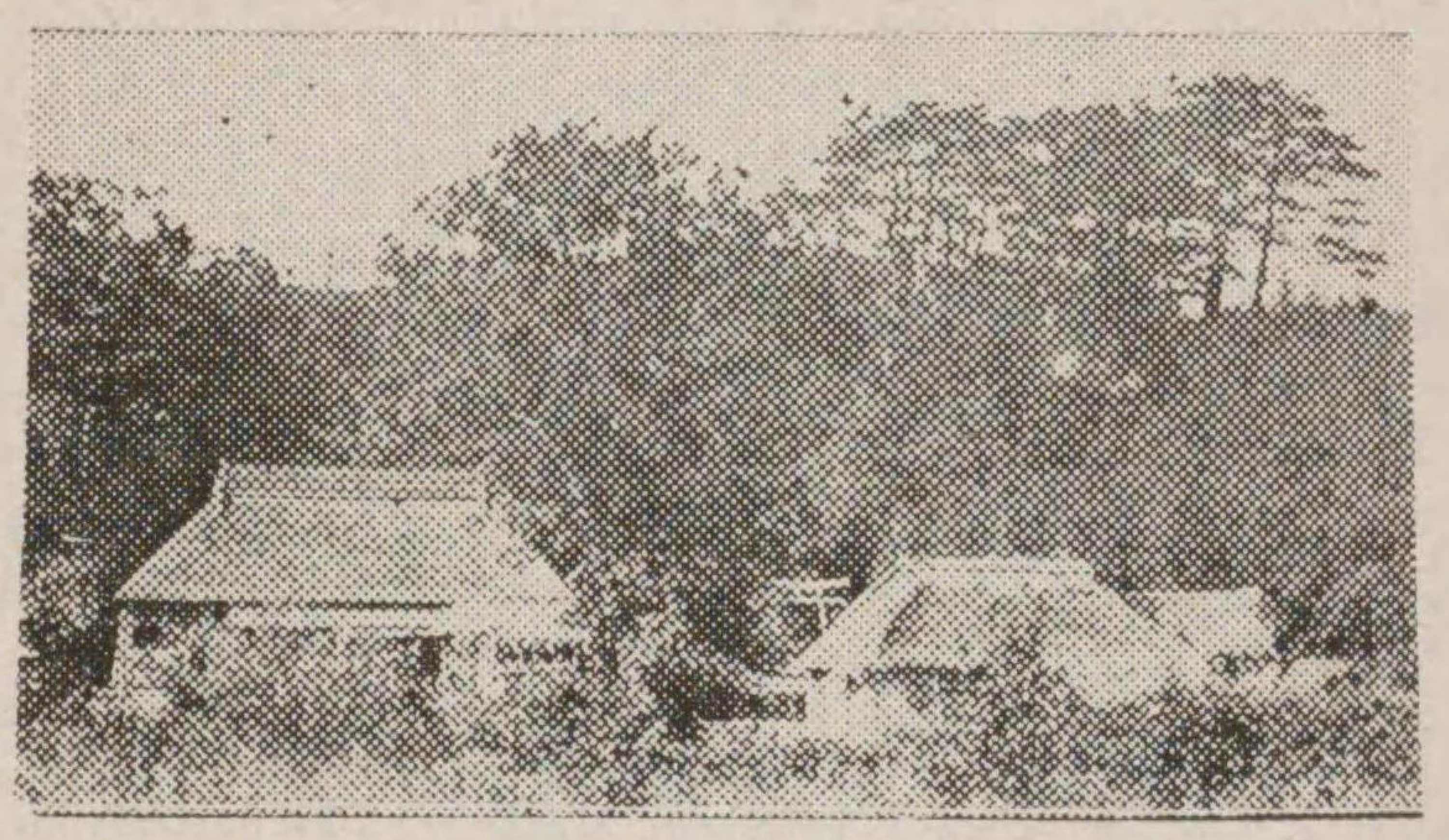
梵珠山矚目　川村愚海

南接平原北海灣　吾來縱目梵珠山

北津輕郡



高館城址



安東氏の寶塔

千村萬落春方好　五即風光指顧間

七和村　梵珠山麓に在る七部落を合せた總稱である、津輕新田開發前の村で土地肥ゑ民庶和し、模範村となつて居る

高野の千坊　七和村大字高野に狄舘の跡がある、東目流傳云、津輕三千坊とは、あざらに千坊、高野に千坊、十三に千坊と申す

館野越　沿川村大字館野越は浪岡の西方一里半、北畠氏の屬城の在つた所である

板柳町　郡の南方岩木川沿岸の大邑である、正保元年（二八〇年前）板屋野木村町立すべき由にて繩張りし船渡も切替たりと津輕年代記に見ゑて居る、今北、中兩郡物資の集散地として繁榮して居る

郷社海龍神社　文祿二年、津輕爲信が海路肥前名護屋に出發する際海上安全の祈願所として岩木河畔に創建した者で歷代藩主の崇敬厚い

中津輕郡（平賀、鼻和の郡）

中津輕郡は中世の鼻和の地である、鼻和三千八百町歩は鎌倉役として鎌府の地頭曾我氏の管領する所であつた。

元弘、建武の頃には宮方、武家方の爭奪行はれたが後の事は不明である、文龜二年、大浦光信、賀田（ヨシタ）に築いて盛信を之に居らしめ、其の後七十餘年、爲信に至つて津輕を一統し、繼嗣信牧、弘前城を築き、以て全郡の治所とした

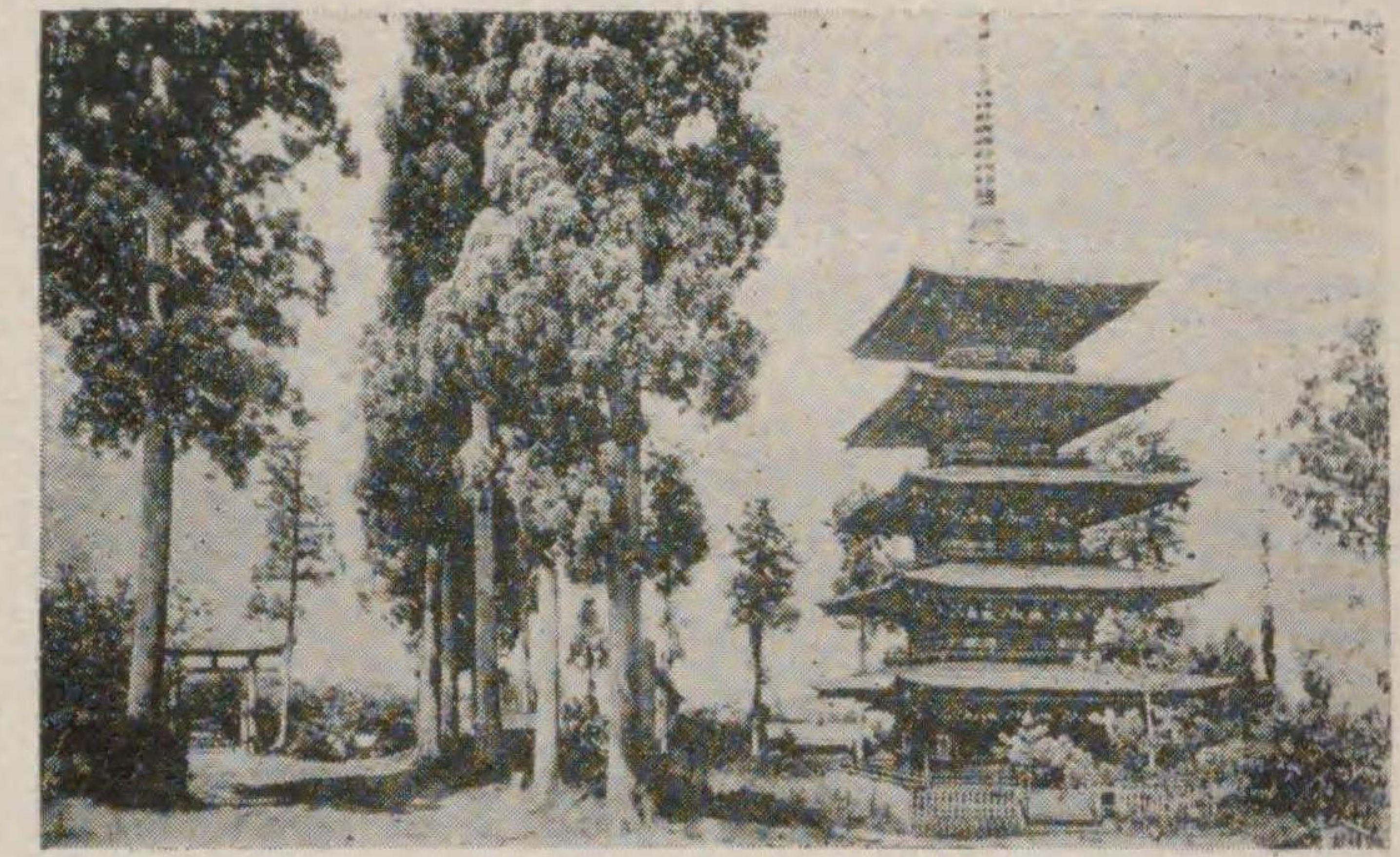
弘前城（大平城）

弘前は古は廣崎と呼べりと三才圖繪に記して居る、築城の當時は二ッ石と云ひ、後高岡と稱し、更に今の名に改めた

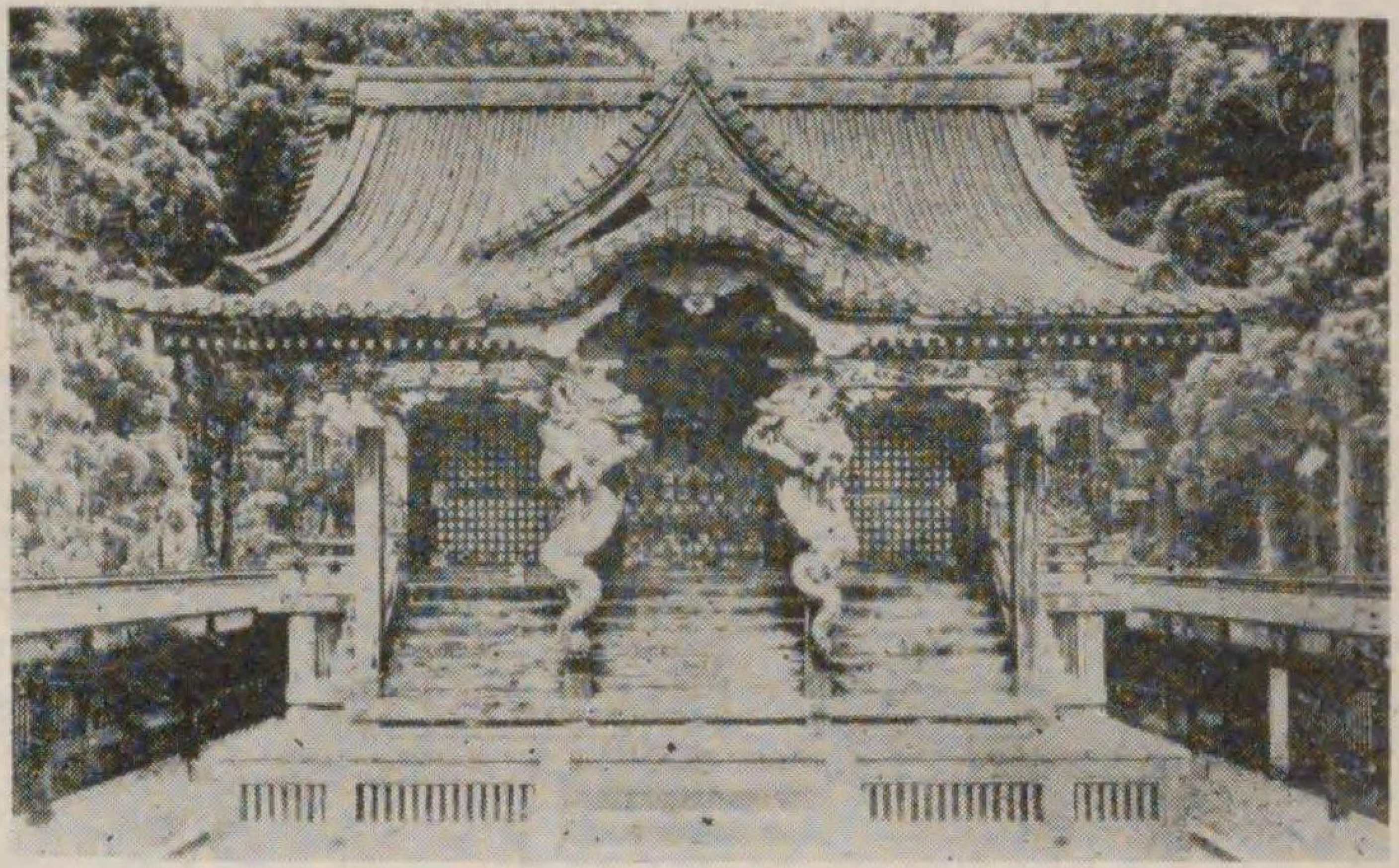
築城　文祿三年、爲信は賀田城から堀越に移つたが平城にして規模小さく、到底全郡に號令するに足らぬので、高岡を以て適地とし慶長八年から經營に着手した、爲信卒去後、二代信牧先君の遺志を紹ぎ、慶長十五年築城に當り、翌十六年を以て完了したので五月堀越から移り、大平城と命名した

城廓　城の面積は東西五町四十間、南北八町四十六間、總坪數十四萬四千二百六坪である、廓の數六ヶ所矢倉八ヶ所、門は十二あり、堀は三重で幅八間乃至十六間、岩木川を引いて有事に備へ、城外の要所には神社佛閣を配置して外廓とした、市街の區劃は極めて複雑で、直線の少ないのは凡て見透されぬ爲めにした者であると

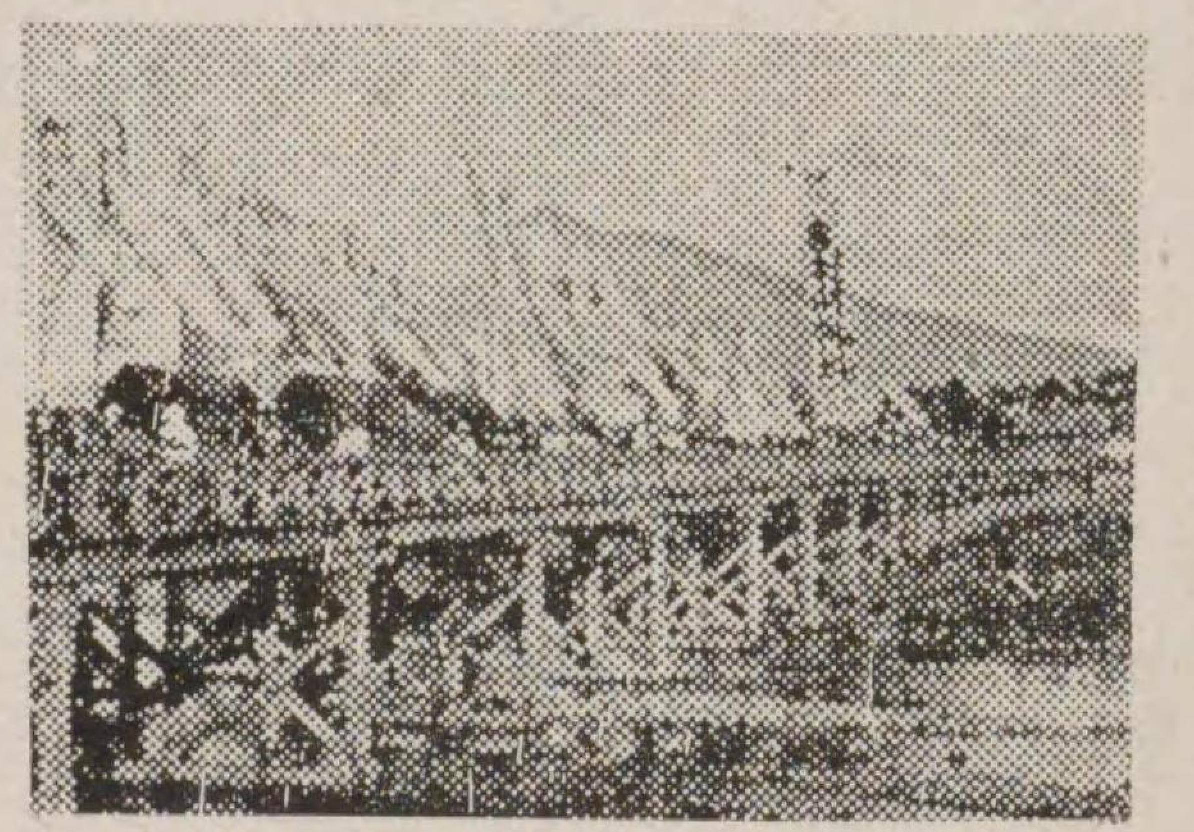
中津輕郡（弘前市）



最勝院五重塔



岩木山神社



お山參詣

公　園　城址弘前公園は　大正天皇、東宮に在しまし行啓あらせられた時、名を鷹揚園さ賜はつた、廢藩後陸軍省の所管に屬し、明治二十八年、三ノ郭を除く外は弘前市に拂下げられ、公園さなつた、三ノ郭には兵器廠火藥庫か建設されて居る、園は城門、矢倉等依然さして存じ、本丸の高地には津輕爲信の銅像が建てられて居る遙に岩木の靈峰に對し、下は岩木川の平野を眺め、光景雄大である、近年濠堤に櫻樹數千株を植ゐ、花時爛熳さして江霞たなびき今や東北第一さ稱せられ年々四月末日から觀櫻會催されて賑ふ

上津輕城　　東京　本田種竹

士風昔聞凜兵刀　十萬提封北地豪　天塹半崩秋水涸　麗譙獨壓亂松高　獵原枯草調鷹晝　朔吹驚沙代馬號
仍有嶽城山色好　夕陽雪照映衣袍

弘前市

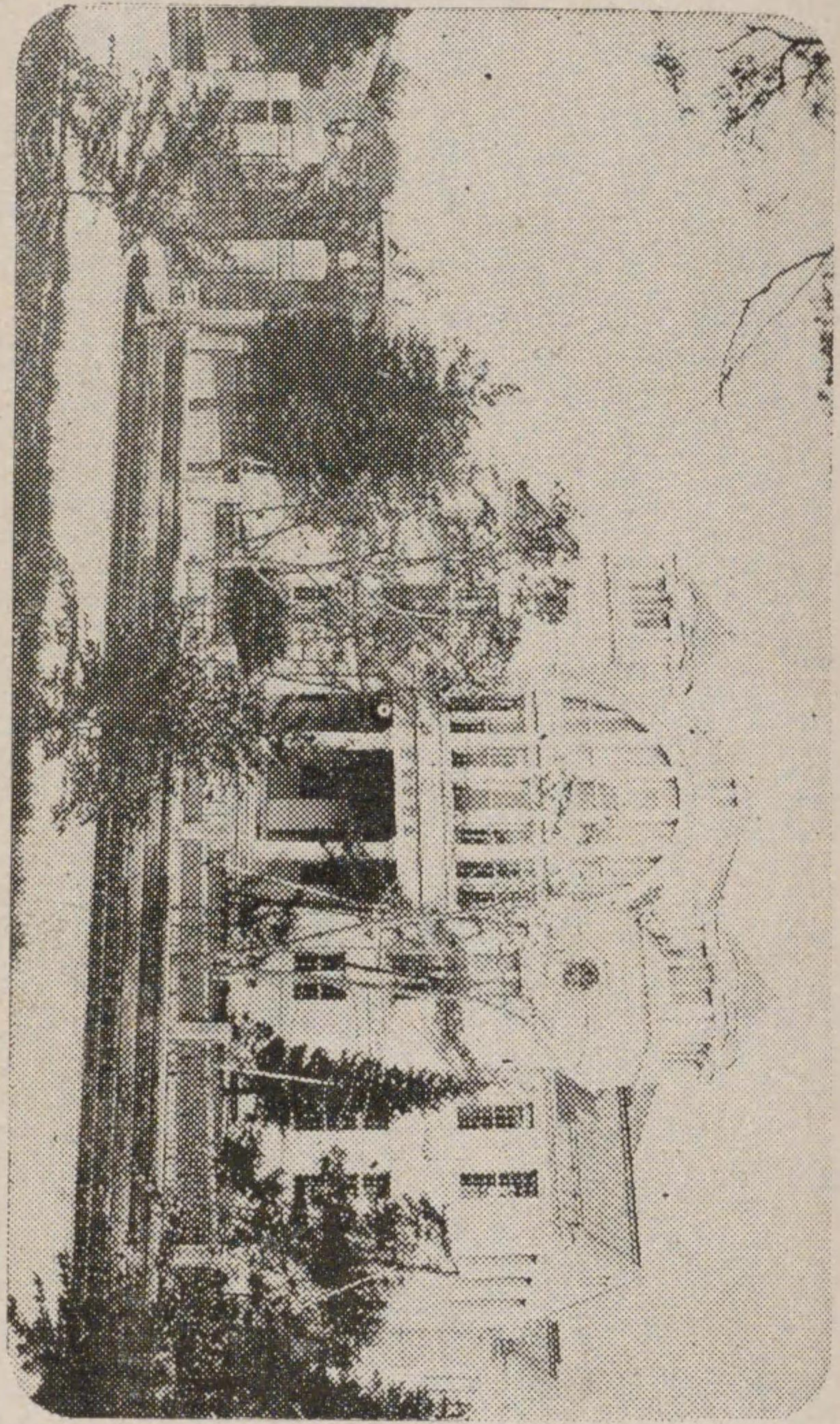
津輕藩二代信牧以來の城下市である、明治四年、弘前縣の官所置かれ、同時に青森縣さなり、縣廳は青森に移された、明治二十二年市制を施行したが爾來盛衰あり、明治二十七年、奧羽線開通され、二十九年、第八師團の所在地さなり、大正十年、弘前高等學校開設され、年々繁華に向つて居る

神社　縣社八幡宮は田町に在り、慶長十七年、信牧公の創建で金剛山最勝院に寺祿三百石を賜ひ津輕全郡百十一社の總司とした、縣社熊野宮は同じく田町に在り、亦信牧公の建立に係る、外に岩鬼山藥王院、住吉神社、白狐山稻荷神社、胸肩神社等がある

寺院　**大平山長勝寺**　西茂森町に在る、津輕曹洞宗の總本山で、永正十四年、津輕光信の開基した最も古い寺院である、大浦、堀越等から移つて慶長年中今の地に建てられた曹洞宗三十三ヶ寺は此處に集る、津輕歷代の廟所である、藤崎海藏寺の嘉元の古鐘は今同寺に在る△**大行院**　茂森町に在り、藩政時は修驗道場として有名であつた△**大圓寺**　新寺町の東端高地に在る、眞言宗として津輕氏の祈願所であつた、境内の五重塔は信政公の建立した者である△**報恩寺**　新寺町に在り、天臺宗である△**貞昌寺**　新寺町に在る、津輕に於ける淨土宗の總祿として寺領六十石を給せられた△**新教寺**　新寺町に在る、眞宗大谷派の總祿であつた△**本行寺**　新寺町に在り日蓮宗である

岩木山

岩木山は弘前市の南二里半、中津輕郡の南方平野に屹立し、高さ五千二百尺、周圍凡そ三十一里、三峯巍然と



弘前市公會堂

して形容整ひ、其の秀麗富士に勝る、故に稱して奥富士と言ふ

山頂の中央は岩木山、東峯は岩鬼山、南峯は鳥海山と云ふ、中央火口丘の岩木山は圓錐形を成し、山腹には十一の爆烈火口の址を認められ、其の中の顯著なるは種蒔苗代である、登山には百澤村よりするを便とし、約一里二十町にして山頂に達する、又山麓には嶽溫泉、湯段の溫泉がある

岩木山神社 國幣小社岩木山神社は岩木村大字百澤に鎭座す、祠堂の結構壯麗を極め、奥日光と稱せられる、始め寛永五年、信牧之を草創し、後貞享三年から元祿七年まで七ヶ年を費やして信政の代完成した、社の由緒は延暦年間草創、始め十腰内に在り、寛治五年今の地に遷座し安東、北畠、津輕家等代々尊崇し、別當を岩木山百澤寺と云ひ、眞言宗に屬し寺祿四百石を賜はつたが明治維新後神佛仕分となり、顯國玉神、多都比々賣命、宇賀能賣命を祭つて居る

岩木山に就て、龍女珠を献ずとの傳說や、丹後の山莊太夫の話など傳へられて居るが紙數なきを以て略す

お山參詣 岩木山大權現の祭禮は毎歲陰曆八月朔日から十五日まで行はれ此の間登山參詣者は齋戒沐浴し鼓を鳴し、笛を吹き、旗を持ち

懺悔々々、六根懺悔、大山八大、金剛道者、一々禮拜、南無歸命項禮

と呪を誦して幣帛を捧げる、若し夫れ頂上の眺望佳なるに至つては筆紙に盡し難い

登巖城山　　百川學庵

頭上天咫石　脚下雲萬重　只疑枯藤杖　風雨化爲龍

○　　西行法師

富士見すは富士とや云はんみちのくの
岩木のたけの雪のあけぼの

○　　津輕信義

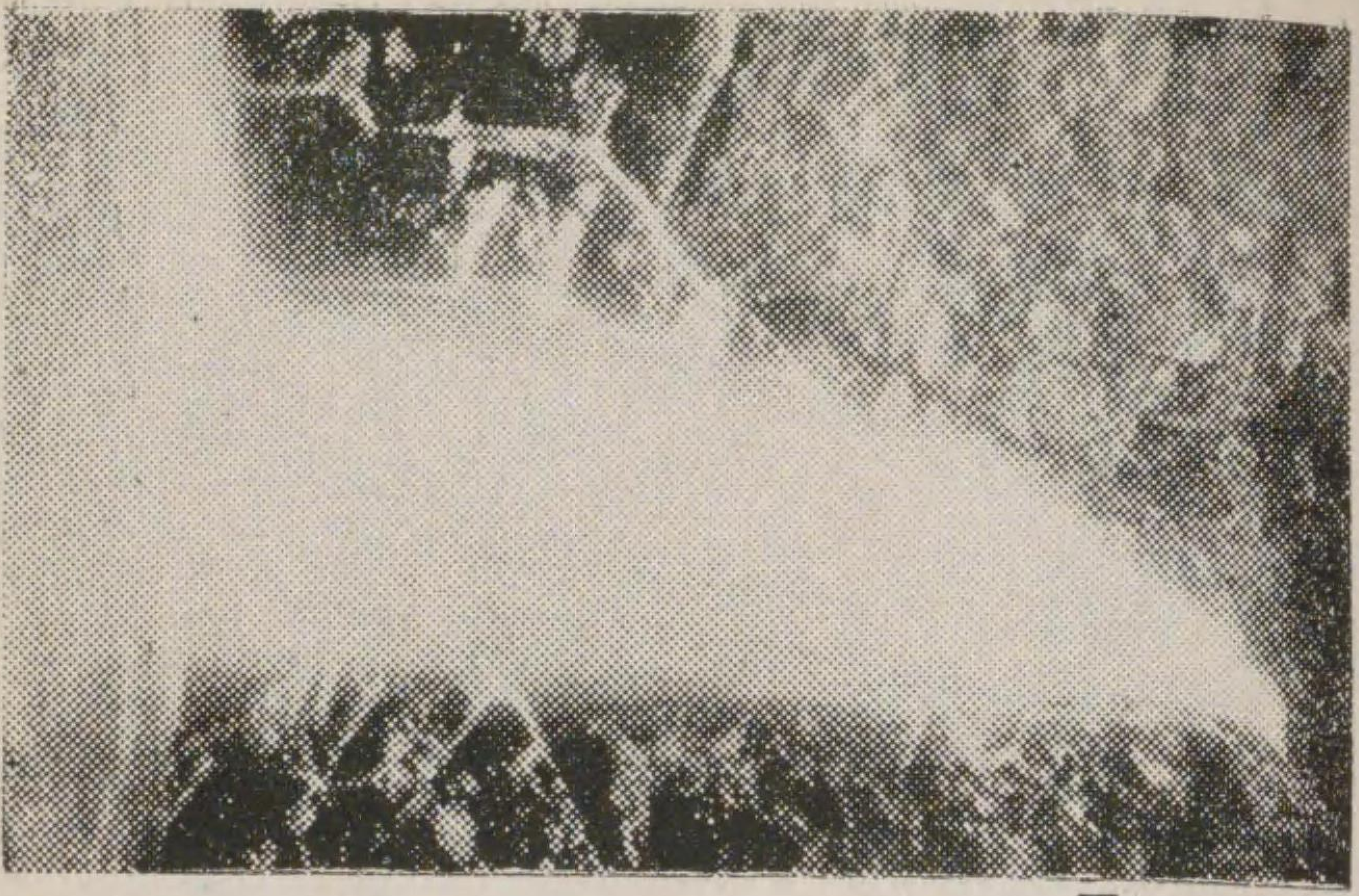
白たへの雲かと見れはみちのくの
岩木か嶽に雪はふりつゝ

○　　津輕信政

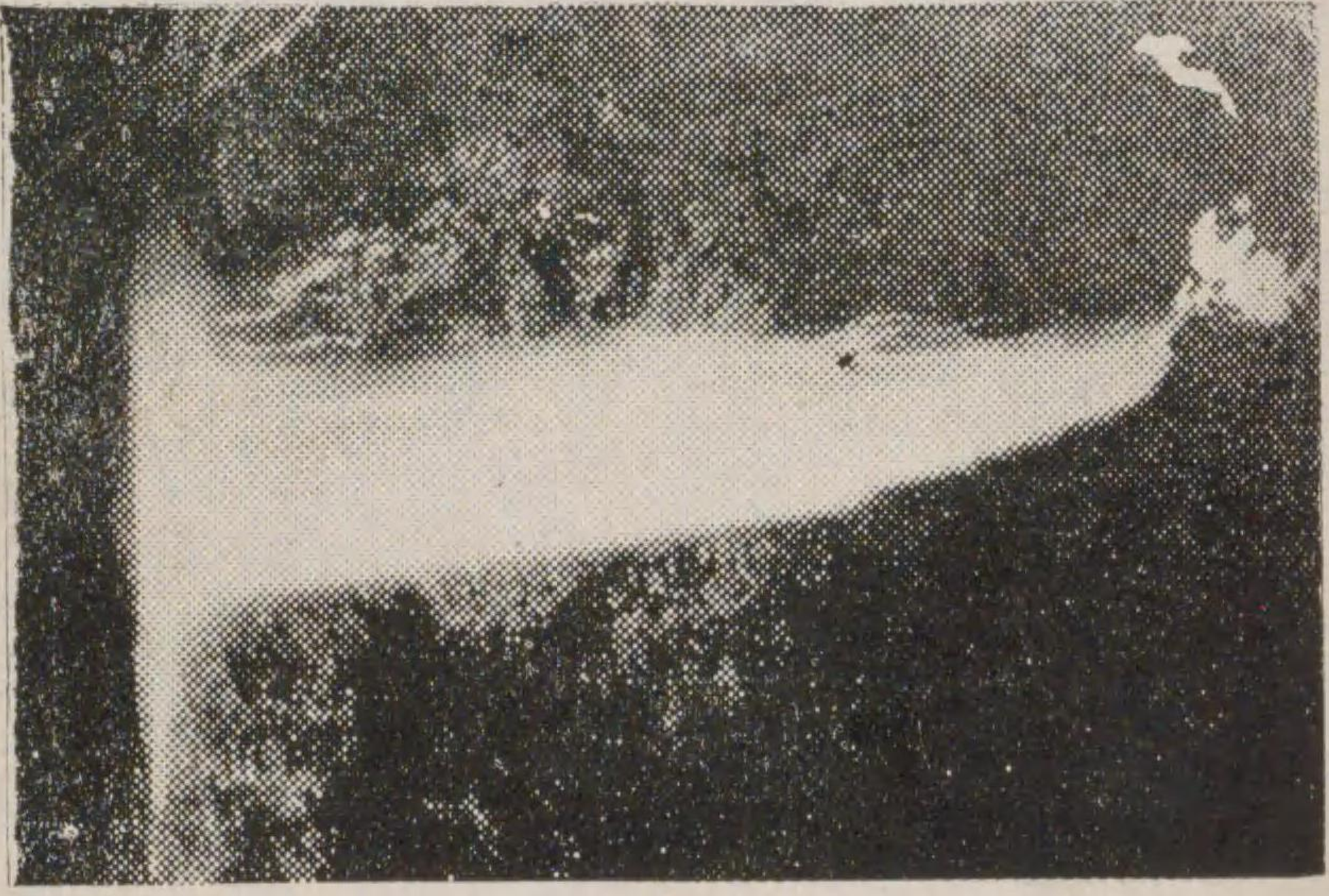
雲間より見ゆるは富士の姿にて
岩木にかゝる花の白雲

高照神社　縣社高照神社は岩木村字高岡に在る、正徳二年、津輕五代信壽か父君信政公の爲め創建した、信

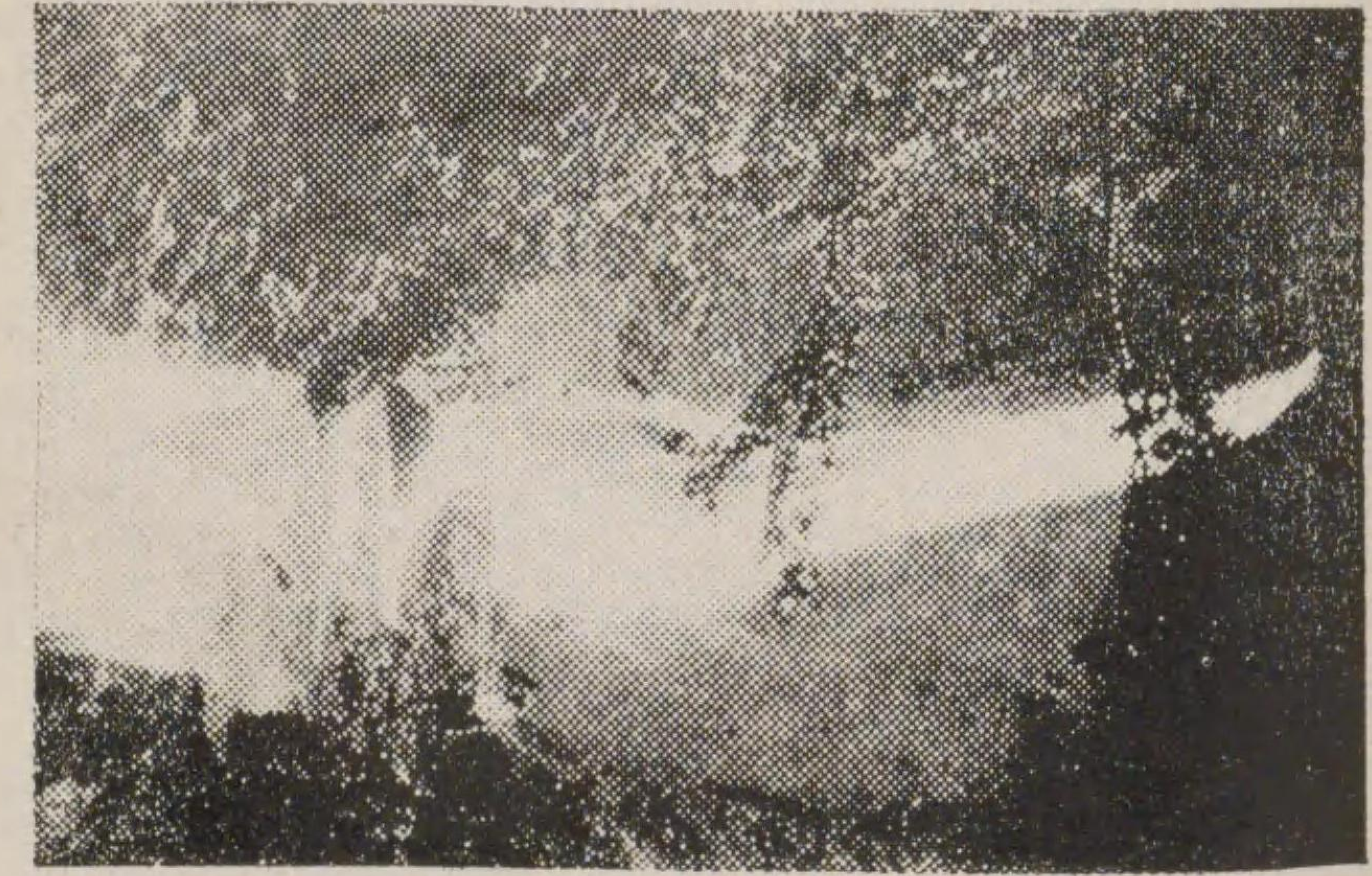
中津輕郡



同



同



目屋名勝暗門瀧

政公は津輕の英主で其の功績は甚大なる者である、故に高岡樣として後世まで尊崇されて居る

城址古蹟

大浦城　弘前市の西一里半、大浦村字賀田に在る、明應二年、大浦盛信以來の居城で、文祿三年、堀越に移り、慶長十五年、弘前城造營の時破却された

堀越城　堀越村に在る、東平川の險を恃む外要害に乏しい、永祿年中、南部の臣武田紀伊守の居城で、後大浦氏に歸した、文祿三年、津輕氏の居城となり、慶長十五年、弘前城成るにより空城となり、城内は神社の社地となつた

和德城　弘前市和德町に遺址がある、元龜年中、小山内讃岐の居城であつたが津輕爲信に攻められ、讃岐勇戰して討死し、城亦落ちた

福村城址　弘前市の東二里、豐田村大字福村に在る、森岡金吾の築いて居た所である

津賀野　和德村の大字である、郡中名字の津輕野で、津輕野萩臺などの名がある

宮館と中別所　船澤村部内で岩木山麓に位して居る、附近に古墳が數十基發見され、古き者には弘安、正

應等の年號が刻まれ、橘源、安倍等の姓氏が見ゑて居る

高館 岩木村に在る、建武元年落城した持寄城とは是か、舊記村名に同名の村がある

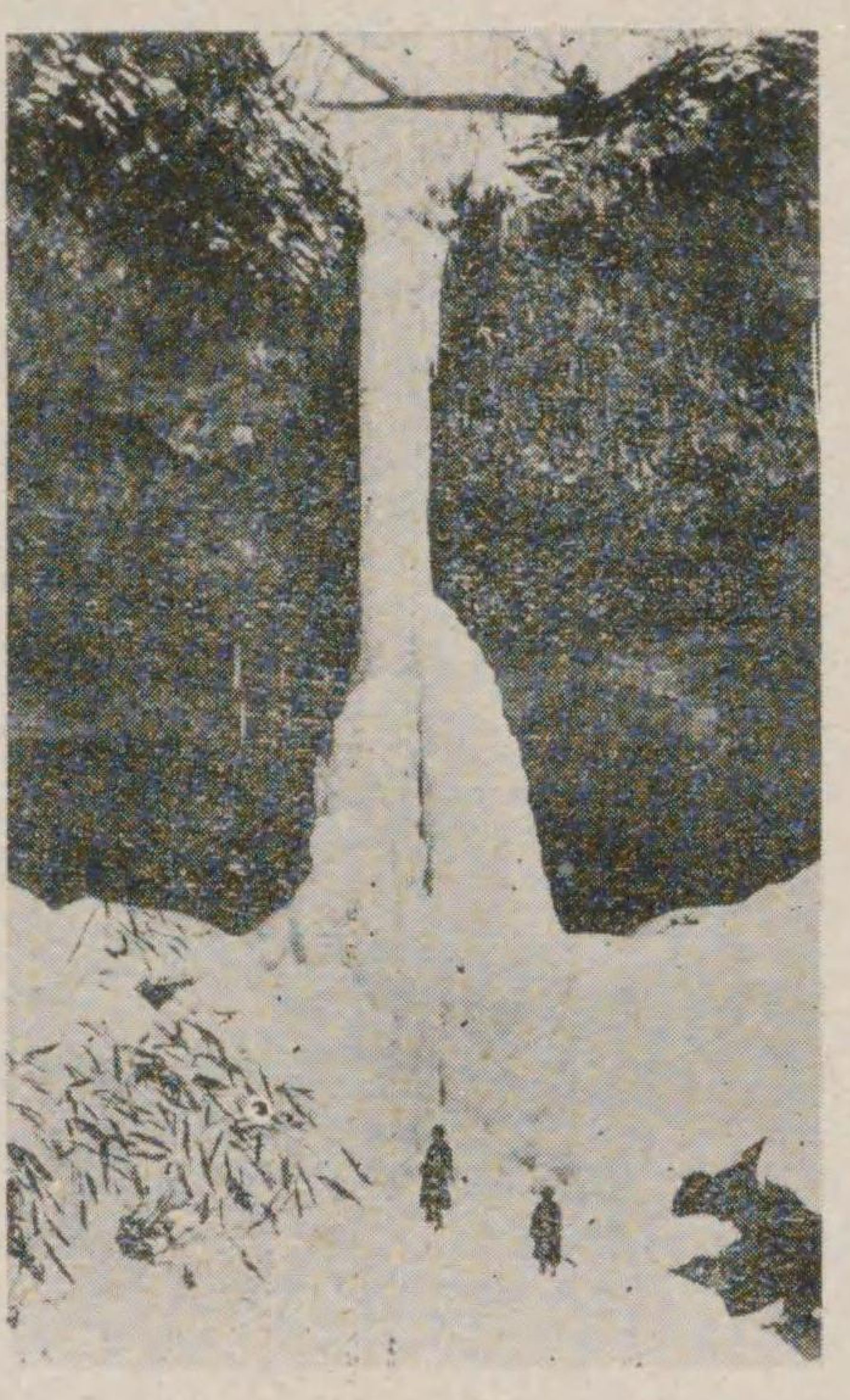
岩木川

本縣第一の河流で源を秋田縣との境泊嶽に發する、上流を村市川と云ひ、相馬川、栩内川、平川、十川、金木川を合せ、津輕の平野を縱貫して十三潟に注ぐ、延長約二十三里、灌漑の益を得る者二十一ヶ村である、但往々汎濫するので津輕信政公以來堤防を築き排水に努めて來た、目下國營事業として治水工事に當つて居る、岩木川は岩木山と相俟つて津輕の平野に美觀を添ゑて居る

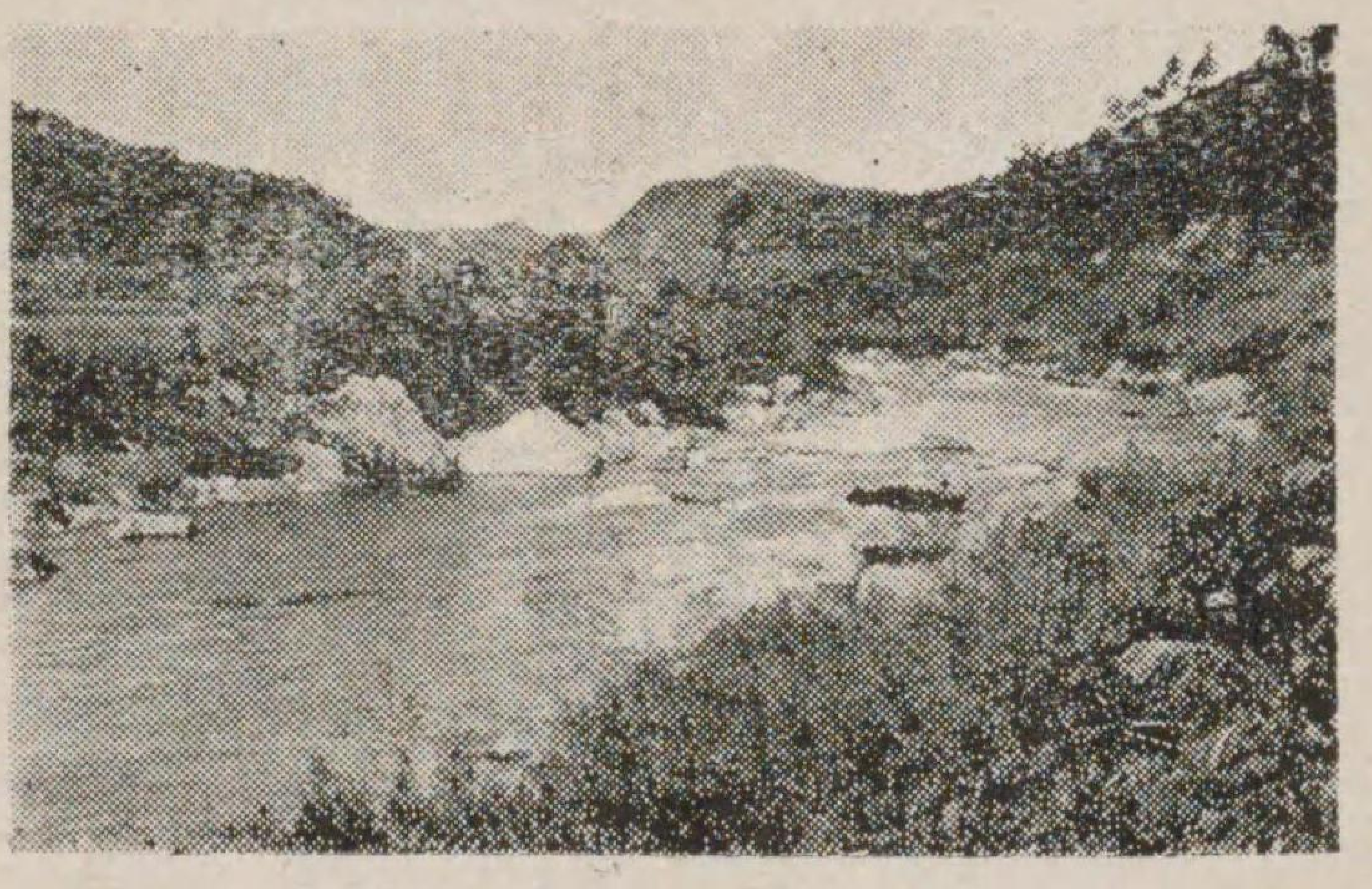
目屋溪

岩木川の上流目屋溪の奇勝は人多く之を婉賞するけれども實見した人は少ない、溪は弘前を距る十里餘、地僻なるが爲めである、溪中に渚瀑多く、特に暗門の瀧は高さ二十餘丈、幅二丈、三段階を爲し、水勢激烈、飛沫烟霧となり、夏時の晴天でなければ之を見ること容易でない

中津輕郡



乳井の瀧



目屋溪流

乳穗ケ瀧　水流糸の如くであるが年中涸れることなく、冬季には氷結してニホの形を爲す、故に名づく、藩政時は結氷の大小を以て年の豐凶をトした、其他、岩谷の觀音、清水の觀音、櫻庭の釣橋等の奇勝がある

津輕山革秀寺　中津輕郡藤代村に在り、爲信の遺命に因り、其の師長勝寺八世の僧格翁逸和尚の爲め開山した、爲信の法號瑞祥院の廟所で寺領三百石を賜り、伽藍莊嚴當國第一と稱せられた

護國山久渡寺　弘前市の南方清水村大字坂本の山腹に在る、眞言宗五山の一である、地高くして津輕を一望するを得、故に觀國臺(國見坂)と稱へた、境内に森岡金吾の碑がある

長慶天皇御山陵　(參考地)

長慶天皇の崩御地に就ては諸説あるが弘前市を距る二里、中津輕郡相馬村大字紙漉澤村も御山陵の參考地となつて居る

地は同村を去る五六町、小祠あり、村人之をなうへの堂と云ひ、隣村に五所村あるを昔は御所と書いた所である云々として居る

下北郡（北郡又斗南半島）

下北郡は本洲の盡頭に位して津輕半嶋と相對し、南方の一部上北郡に連る外は、三面海に面し海岸線六十餘里に及ぶ、その北端大間崎は、函舘と指呼の間にある。漁業最も盛んで、縣下第一と稱せられ、鑛山多く、牧畜又見るべきものあり、加ふるに木材の産出が多い。只農業の不振なるは、平野に乏しい爲である、人口の密度極めて薄いが、物産は豐富で、本縣の寶庫と稱せられ、開發の餘地充分である。藩政時代は南部氏に屬したか維新の際會津藩主松平氏の領となり斗南藩と號した。北斗以南皆帝州といふ義を取つて以て藩名としたと、一名斗南半嶋の名もこれに發してゐる。

田名部町

大湊鐵道田名部驛から十五町、田名部町がある。開拓古く現在人口一萬を超ゆ、半嶋唯一の都會である。昔時は田鍋、田南部とも書いた。舊舘址は現在田名部小學校のある所で、南部師行の時、武田修理、赤星五郎を目代としたが、後世蠣崎の乱があり、八戸氏之を討滅して族將新田盛政をして守らしめたと云ふ。元和三年、大南部

に併せられ、明治維新に至り會津松平氏の封地となつたが、幾干もなくして廢藩となつた。

近川開墾地　田名部町大字中野澤の支村近川附近は元、廣漠たる原野であつたが、今から約四十年前、北津輕郡の人佐々木弘造氏有志と計つて開墾に着手し、辛酸を嘗めてこれを完成した。現在は大部落をなし、斗南の理想郷として知られてゐる。近川驛がある。

恐山（宇曾利湖）

田名部町より西方三里、宇曾利山がある。別名恐山の名に依つて名高い。昔慈覺大師山中に鵜の鳥の飛ぶを見附近に水あるを覺り、この地を尋ね當てたので始め鵜反山と呼んだが、後宇曾利山に轉化したとも云ふ。海拔二千七十尺、噴煙鳴動絶ゆ間なき活火山である。山中に温泉湧出し、湛へて大小の湖水となる、中最も大なるは宇曾利湖と云ひ、周圍約二里、水は落ちて三途川となり、更に正津川に連る、今ウゴヒ鱒等を養殖してゐるが、ウゴヒの如き産卵期には手掴みの出來る程繁殖してゐる。此の地西に朝比奈獄、南に釜伏山の兩山聳へ、景觀雄大である。

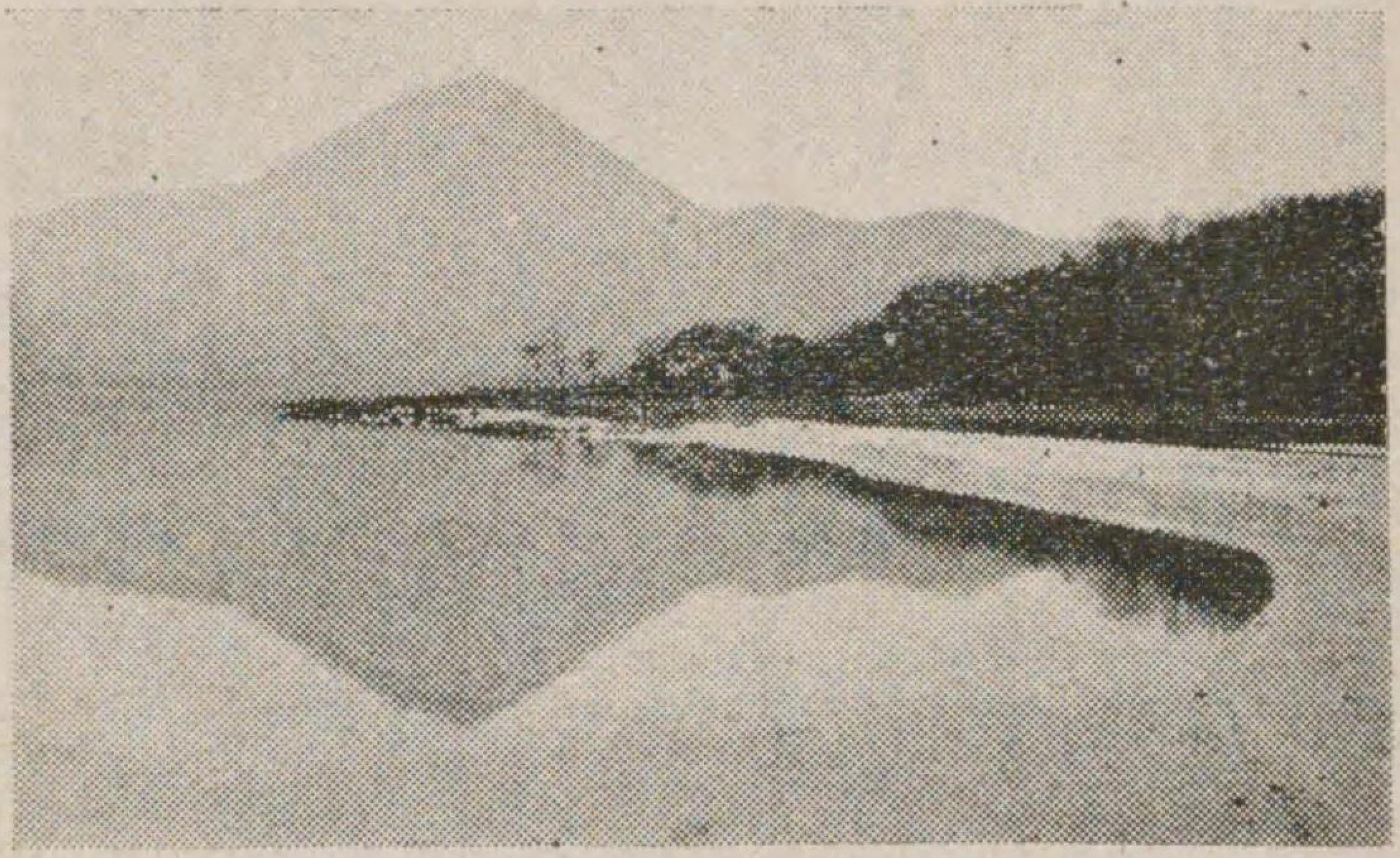
地藏堂　山中に靈場あり、宇曾利山地藏堂とも、釜伏山菩提寺とも云ふ、一千六十二年前（貞觀年中）慈覺

大師の開墓と傳へられ、大師の作といふ地藏の像がある、後數百年荒廢してゐたが、享祿三年(三九七年前)圓通寺安智棸覺和尚これを再興し、曹洞宗に屬した。寺域廣大にして約八十町に及び、廻らずに小轡を以てし、形八葉の蓮華に似てゐる、附近の沼澤、河川、洞窟、岩石の姿態何れも怪奇神秘を呈し、三途川、血の池、極樂濱、胎内くゞり、畜生道、八大地獄、六道の辻等の名あり、恰も佛説の地獄、極樂の形相を喩示し以て慈悲濟度の大悲を悟らしめんとするものである、山中温泉多く、冷の湯、古瀧の湯、藥師の湯、花染の湯、新瀧の湯等がある。何れも硫黄泉にして、リユウマチス、皮膚病等に効がある。此の地、怪岩重疊、噴煙熱湯天地を鳴動し、配するに滿山の緑林を以てし、夏期は靈鳥、佛法僧鳥の聲を聞く。山頂麓裾皆豪快、淸麗の景に滿ちてゐる。田名部町より山腹まで自動車の便あり、山上に恐山ホテルがある

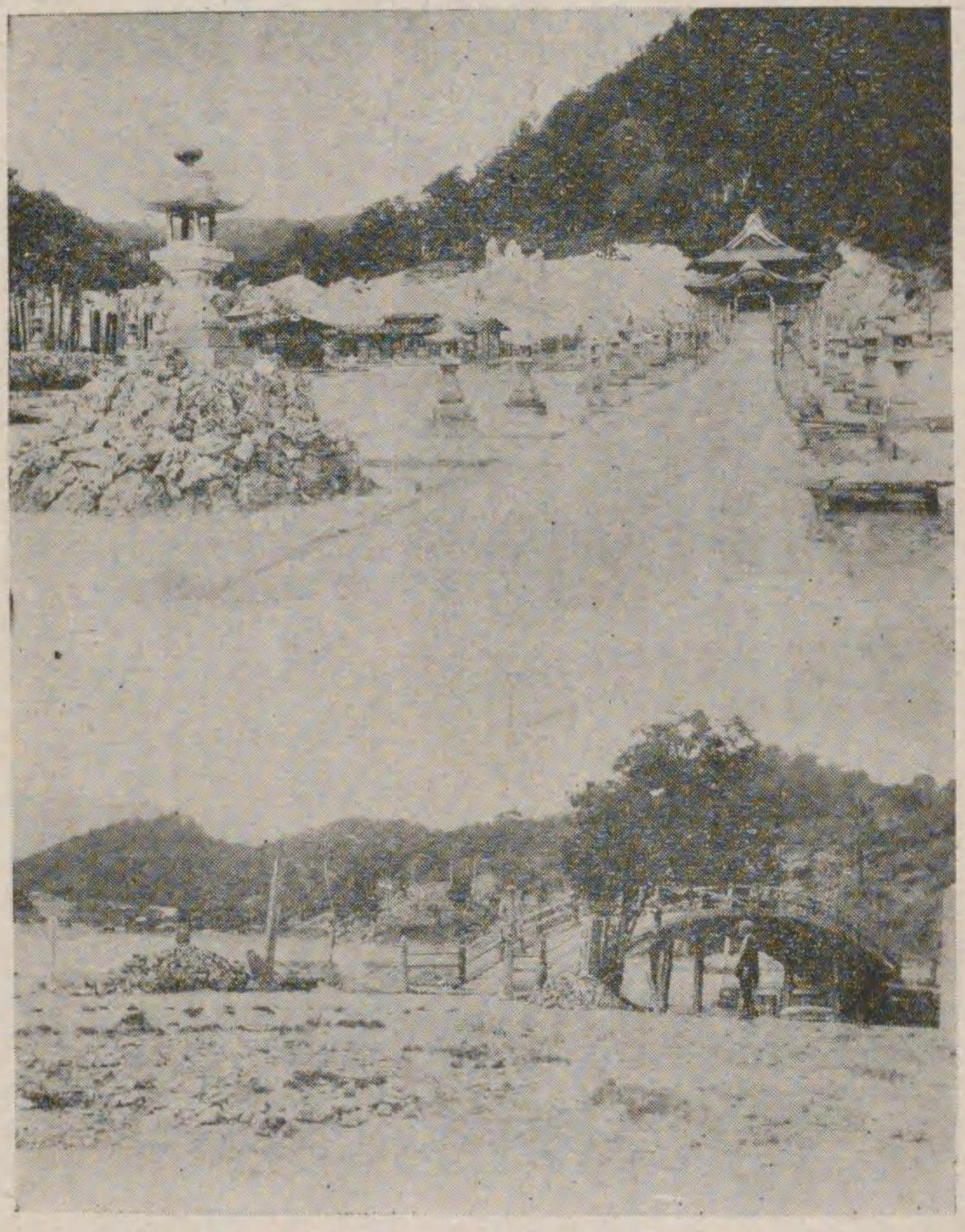
恐山　　　菊池塔焉

翠嵐如夢繞征鞍　徑入平湖現香壇
回首霧雲千萬態　碧蓮開闔八峰巒(八峰繞湖筍立爲八朶蓮華狀)
湖心落月鳥聲圓(山中有鳥半夜啼人呼曰佛法僧)　雁塔珠林鎖斷煙
穆々山風今若古　法燈照徹一千年

下北郡



恐山と宇曾利湖



上　恐山地藏堂　　下　三途川の太鼓橋

大畑村　津輕海峽に面し外南部と云ふ、往時波多城と稱し、畑某の居城であると、大畑川の下流にあり、商家軒を並べ繁榮な町である。支村赤川の北に綴濱といふがある。蜂窩の如き小孔無數に穿たれた岩石が羅列し奇觀である。一名赤岩ともいふ、赤川の西十八町、赤川の沿岸に冷泉あり、疥癬に効く。附近に藥研温泉がある。大畑本村より二里、田名部より大畑まで自動車の便がある。鹽類泉で脂肪過多症、慢性便秘、皮膚泌尿科の病に効がある。仙隣閣、古畑屋の二客舍があり幽邃閑寂の境で紅葉の名所である。

優婆堂　正津川の下流大字正津川に優婆堂がある。優婆像は惠心定朝の作に成り、元は上流の宇曾利山境内にあつたが、貞觀年中洪水に流されて此處に漂着したものであると

風間村　津輕海峽に面し燧岳の麓にある。下風呂、易國間、蛇浦の三大字より成り、鮑、柔魚、昆布、海苔石栞花等の海産物が豐富である

下風呂温泉　田名部より八里、自動車が立つ、北海の惠山を迎く望む海岸温泉、大湯、新湯の二浴場から成り、大湯は金瘡、打撲傷、中風に良く、新湯は頭痛、黴毒、疥癬等に適す。夏期、數十石の柔魚釣船、長蛇の如く海上に浮び、漁火數里に連りて美觀を呈す。大字易國間は始め異國間と書し往時アシタカと云ふ酋長の棲んだ所、夷語のイコンクマから轉化した地名である。

下風呂遊吟　　石澤岳陽

峭壁擁村泉氣馨　客樓遙遠山靑
浴來便覺病軀爽　靜抱釣竿垂碧汀

大奥村　下北半嶋の盡頭に位し、奥戸、大間の二大字より成る。その大間岬は本州の最北端である。對岸の函館と交渉繁く、鮑、昆布等を産する。大間岬の前方辨天島は周圍二十五町、全嶋岩石から成り附近一帶岩礁出沒し、潮流速く、燈臺を建てゝ航海の危險を避けてゐる。

奥戸の牧　大奥村役場所在地を大字大奥といふ。その開拓古く、盛岡放牧地九野の一、奥戸の牧と言はれ寶歷の頃は常に百四五十頭の牧馬があつたと言ふ。支村材木村八森岬附近は石材を産し、形木材に似て珍重される。

佐井村　大奥村の南方に在る。田名部より十四里三十町、荒澤、隧道石の二山を負ふて津輕海峽に面す。康正三年源頼義の勸請になると言ふ鄕社八幡宮があり、早く大邑を爲したことを立證してゐる。寺院は五ヶ寺あり、慶長十七年の開基になるものを最も古しとする。昔時は三河、尾張、仙臺、越前、兵庫等より廻船があり、元祿十一年の大暴風には港内諸國船の破損するもの二十七艘、溺死五十七人とあるに見ても、その繁榮が察知される。

天明、天保の飢饉に多く北海道に移住して衰退した。

矢越の岬　佐井の支村矢越の西南に矢越岬がある。長く海中に突出し、盡頭岩石多く、西方に二大奇石相對して海中に浮ぶ。鍵懸岩と稱し、高さ各々七八十尋、幅四五十間あり、海上を航する者、これを目標として舵をとる。地方名所の一である。

佛ヶ浦

佐井の支村福浦、牛瀧兩部落の中間一帶を佛ヶ浦と呼ぶ。場所は弦月形に深く灣入し岩岬灣の左右より突出して碧水を抱く。老樹蓊然たる險崖を背景に、一つ佛、夷佛、五百羅漢、蓮華岩等の奇岩妖石亂立し、その數幾十百かを知らない。神佛、人畜、鳥獸、妖仙、凡そ宇宙萬物の形容を網羅し或は渚汀に佇んで碧水に影を落し、或は絕壁を負ふて冲天に嘯く狀奇觀妙態の限りを盡し、正に天下の一大奇勝である。大町桂月曾て此處に遊び、日本山水中の化物屋敷と驚嘆し、金剛山の怪、妙義の奇も倒底及ばずとなし

〇

神のわざ鬼の手造り佛浦　　大町桂月

人の世ならぬ所なりけり

○

あきれ果て驚きはてゝ佛浦
念佛申す外なかりけり

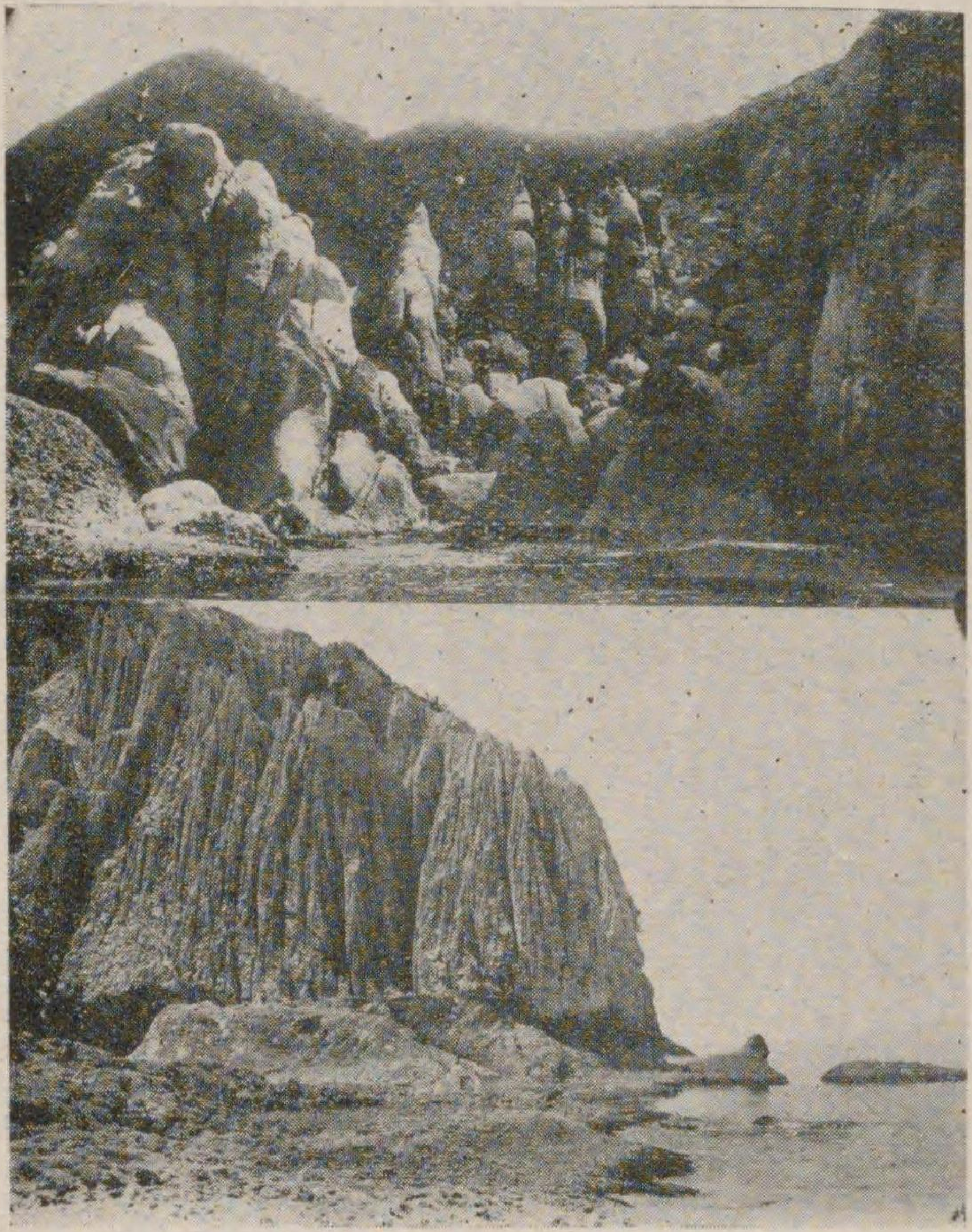
○

奇しき岩あやしき石もかばかりの
處ありとは思はざりしを

と歡賞し、天下に紹介した。此處は大湊鐵道から陸路を辿つてもよいが、交通不便の個所があり困難である。寧ろ青森市から牛瀧まで船路をとり、牛瀧より片舟に棹すが利便である?・青森、牛瀧間は奥佐運輸會社の定期船がある。

大湊村　東北線野邊地驛より鐵路三六哩三、青森より海路四〇浬である。元來一漁村に過ぎないが、支村宇田に要港部があり我國海軍警備の根據地として世界的に有名となつてゐる。天然の良港で將來を期待され、ために大湊興業會社が組織され、陸上に大地積を所有し、海面を埋立て船附場を設け、ホテルを建築する等大湊灣

下北郡



天下の奇勝佛ヶ浦

たるの素地を作つてゐる。

城ヶ澤　大湊の西南一里半、大字城ヶ澤がある。寶治年間（北條時賴時代）安東盛親の築く所で、正平年間には源良尹が修理してこれに居つたと舊記に傳へられてゐるが、年代と人とは明かでない。後安東氏滅されて八戸氏の領に歸し、一族若くは家臣によつて治められたのであらうと。

大湊雜詩一　　石澤岳陽

靜波如鏡碧灣環　釜臥秀峯浮翠髻
一港不知風浪險　松洲沙岬自成關

川内町　川内川を控へ陸奧灣に面してゐる。維新前舊南部藩の領した所、尙時羅漢柏の產地として名があつた。維新後衰退して振はなかつたが、安部城鑛山の發展後俄に復興し大正六年町制を布いた。最近鑛山の不振と共に稍々衰運に傾いてゐる。

蠣崎城址　川内町の西方三里、大字蠣崎がある。現在一寒村であるが、松前藩の祖蠣崎武田信廣の康正三年、八戸政經の襲ふ所となり、敗れて城ヶ澤の順法寺に入り、復敗れて松前に渡り、終に松前氏の祖となるを以て史家の間に名を知られる

蠣崎懷古

石澤岳陽

古舘址空草露繁　山雲帶雨暗平原
村翁爲説當年事　祠畔舊杉猶有根

安部城鑛山　川内町にある。古くから發見されてゐた。大正元年以來大規模に發掘されたが、近年は微々として振はない。其他西又、岩瀧、大正等の鑛山あるが何れも事業振はない。

脇野澤村　郡の南端、夏泊崎と相對する所九艘泊崎となり、その東にあるを脇野澤村と云ふ。舊藩時代諸國の船舶出入し繁昌したが現在は衰退して一寒村たるに過ぎない。附近に辨天嶋、鯛島の二島がある。

東通村　郡の東部にある、大西洋岸の大邑にして、面積十四方里、十二大字を包含し、海岸線三十海里に及ぶ。人口七千餘、水産物、木材を産する。大字大利は舊書大満家湊と記し、康正三年蠣崎藏人滅亡の當時、此處から松前に渡航したと云ふ。大字目名に、目名城址がある。

尻屋の燈臺　大字尻屋は郡の東北隅に位し、北東の海上二里の仲に突出するを尻屋岬と云ふ。全村水産を以て生計を樹て、公私の經營皆共有共營にして平和の別天地を形成す。岬の巖頭に有名な尻屋燈臺がある。明治九年の建設である。

一月二日夜過尻屋岬（明治十三年）

杉山梅居

波不至窓窓不鎖　今宵天定一船安
喧呼半夜人皆起　認是燈臺輝岬端

白糠港　村の東南端を大字白糠と云ひ、上北郡泊村に接して居る。舊稱目名見城、白糠武藏といふ人の居城であつたと。港内暴風雨を防げ、避難港たるに適し、これが修築の聲を聞く。山道より大湊線近川驛に出る。

上北郡（北郡、海上郡）

東郡往時は三戸郡と共に、糠部と稱され、都母蝦夷の棲窟であつた。寛永後は北郡と言ひ、三戸郡以北の總稱となつて來たが、明治十三年、上北、下北の兩郡に分轄された。又別に海上郡、階上郡の名もあつた。明治維新までは南部氏の所領に屬した。

七戸町

町は東北線沼崎驛より三里十九町、上北郡の中央に位し、舊七戸藩の城下である、人口約一萬、三百年來繁榮

の地で、今は、警察署、國立奥羽種馬牧場、縣立種馬育成所、原蠶種製造所等がある。近郊農村多く、商取引盛んに、富裕の町である。南方半里の地に在る工藤農場は、施設經營の模範的なことに於て有名である。

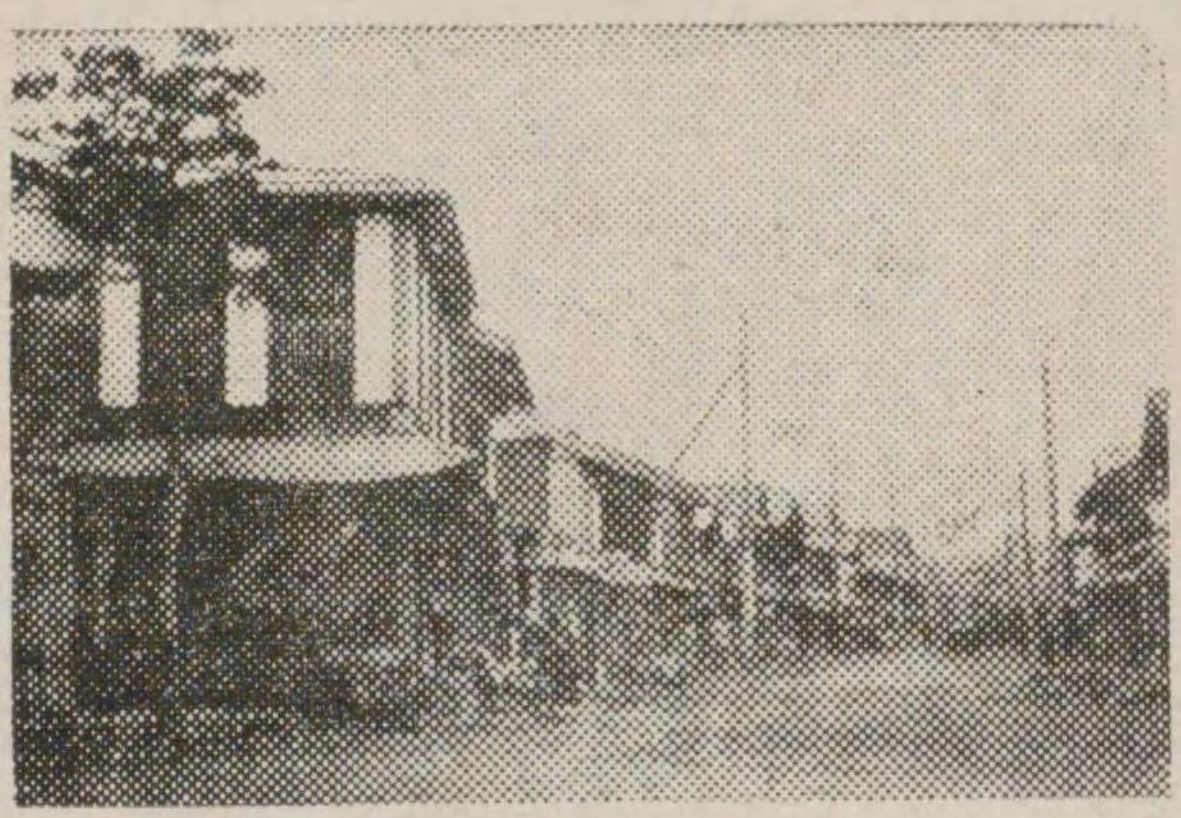
七戸城址 七戸町西方の丘陵に在る。東西に險崖高く聳え、大澤西南に迫る。北は鶴の子平に連り、東南に七戸の市街を展望する形勝の地である。建武元年以後久しく八戸氏の領有となつたが、その後は明かでない。天正二十年、七戸利直の二男重信此の地に二千石を知行し、後宗家を繼ぐに及んで、二男政信に五千石を與へて之に居らしめたが、文政年中、加增されて大名に列せられたことがある。

法蓮寺 七戸町の南方一里餘、大深内村羽内に在る、名高い法身國師の開基になり、安置されてゐる觀世音の像及び法身國師の像は、慧心僧都の作である。應仁二年十月十二日建立の法心國師の石碑ある法身塚が、寺の南方小高い景勝の丘陵に建てられてゐる。舊藩時代には代々藩公の歸依厚く、今尚附近の崇敬大なるものがある。

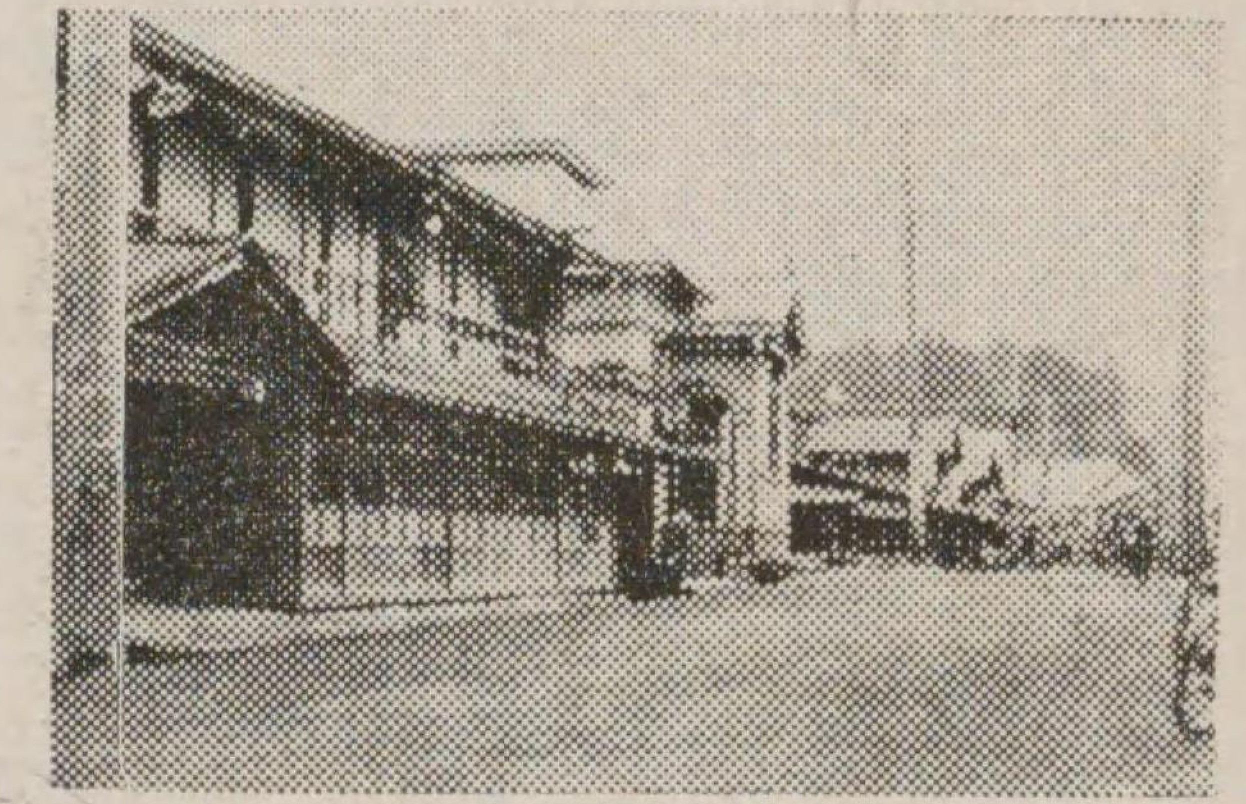
三本木町

東北線古間木驛から鐵路九哩二分、七戸町より南二里二十五町の所に在る。安政二年舊盛岡藩士新戸邊傳翁始

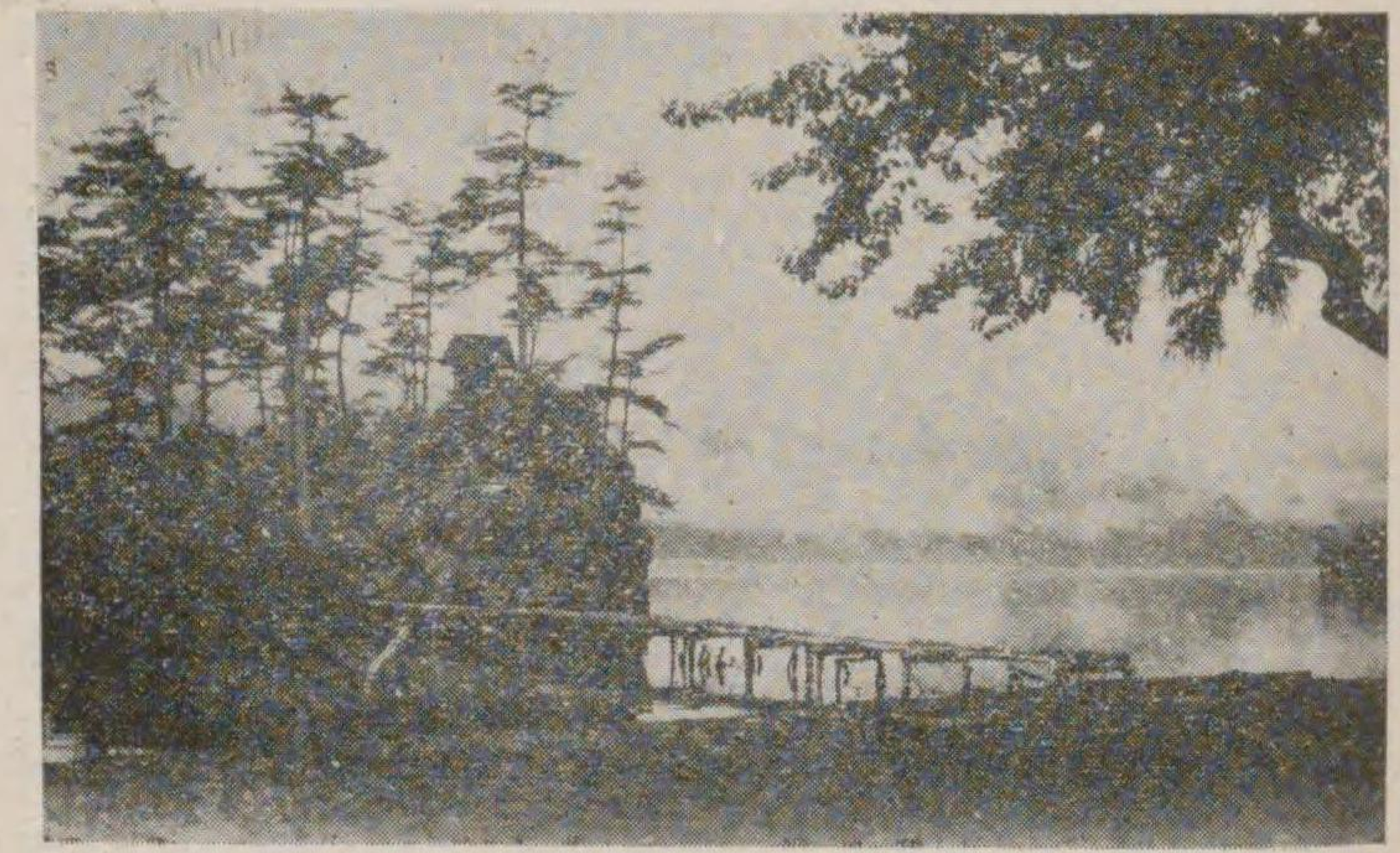
上北郡



七戸町市街



同上



十和田湖ぐみ嶋

めて此の地を開拓し、僅に七十年にして現在人口九千を算する大邑となつた。軍馬補充部、三本木支部、縣立畜産學校、營林署等があり、附近の六戸、藤坂、四和、法奥澤等諸部落の物資を呑吐する外、產馬の南部の中心を爲し中央馬市場があり、毎年秋季幼駒の糶市には、數千頭の出場馬あり、地方名物の一に數へられてゐる。又當町は水郷十和田湖遊覧の要路に當り、東北線古間木驛との間に、株式會社十和田鐵道開通し、加ふるに自動車の便あり、遊覧客何れも此處に宿泊、休憩するため、世界公園館支店、安野旅館等の大旅館がある。十和田への自動車數十臺は此處を基點として往復する。

太素塚　町の西南方老杉茂る小高い丘に開祖新戸邊傳翁を祀る小祠がある。翁の號、太素を冠して、太素塚と稱す。森をめぐらす土堤に起てば、三本木の市街及び一望遮るなき三本木平野が展開し、牧馬青嵐に嘶くを見る。

○　　　　慈鎮

東路のをくの牧なる荒馬を
なつくるものは春の若草

相坂孵化場　三本木の南方一里半、奥入瀬の溪流に連る相坂川に沿ふ所、相坂村がある。縣では明治三十

四年孵化場を此處に設け、年々數十萬粒の鮭卵を孵化して放流し、成績良好である。

野邊地町

野邊地町は郡の北部に在り、陸奧灣に面して居る。人口一萬を超ゆ上北第一の市街である。藩政時代は、北部の要港として京阪地方との貿易盛んに行はれ、殷賑を極めた。帝室林野局支所、縣立種馬所、營林署、稅務署等がある。大湊鐵道の東北本線に連絡する所である。西南に城址がある。

公園と競馬場　町の東隅に公園がある。山を背に、海を控へ形勝の地である。東南二十餘町の所に大平競馬場がある。良駿多く集り競馬の時は盛んである。

馬門温泉　海濱の漁村にあるため閑靜にして一浴するに足る大字馬門にある。附近の鳥井平は戊辰戰役の際、佐幕黨たる南部藩が、津輕藩兵を迎ひ戰つた所、當時津輕藩の死者二十餘名の墳墓が殘つてゐる。

十符の浦

○萬葉集　　　讀人不知

陸奧の十符の菅菰七符には
君を寢させて三符にわれねん

○金葉集　　　經信

水鳥のつゝらのまくら隙もなし
むべさゆけらし十符の菅菰

○　　　爲家

更けにけん賴めぬ風はおとづれて
七符さびしき十符の菅菰

等の古歌に殘る十符の地は、野邊地附近の海濱であると言はれる。蝦夷の浦和の荒寥たる砂漠に叢生する菅菰、これを刈つて織る里人の面影等思へば詩興切なるものがある。

壺の石文　鎌倉時代以前、北地の蝦夷の地を武薩體、都母と稱した。武薩體は今の上北郡相坂川以南で、以北は都母と呼んだ。都母、坪、或は壺と書く。壺の碑は何人が何處に建てたか不明で、洪水のために流失したとも傳へられ、又土中に埋めて一祠を建てたとも云はれる。今の千曳神社がそれである。碑の由來も說區々に渉り、眞相を窮め難い。

○山家集　　西行法師

みちのくは奥ゆかしくも思ほゆる
　壺の石文外の濱風

○　　讀人知らす

千曳とも萬曳とも云へ引かましを
　君のなさけのつなでならずば

○　　源頼朝

陸奥のいはでのしのぶはえぞしらぬ
　かきつくしてよ壺の石文

尾鮫の牧　小河原沼の北方、太平洋に面して六ヶ所村がある。附近は廣漠たる原野で藩政時代までは尾鮫の牧として、有名な馬の産地であつた。一説には宇治川先陣の池月はこの牧の産であるとも言はれる。

○　　讀人不知

陸奥のをふちの駒を野かふには
　あれこそまされなつくものかは

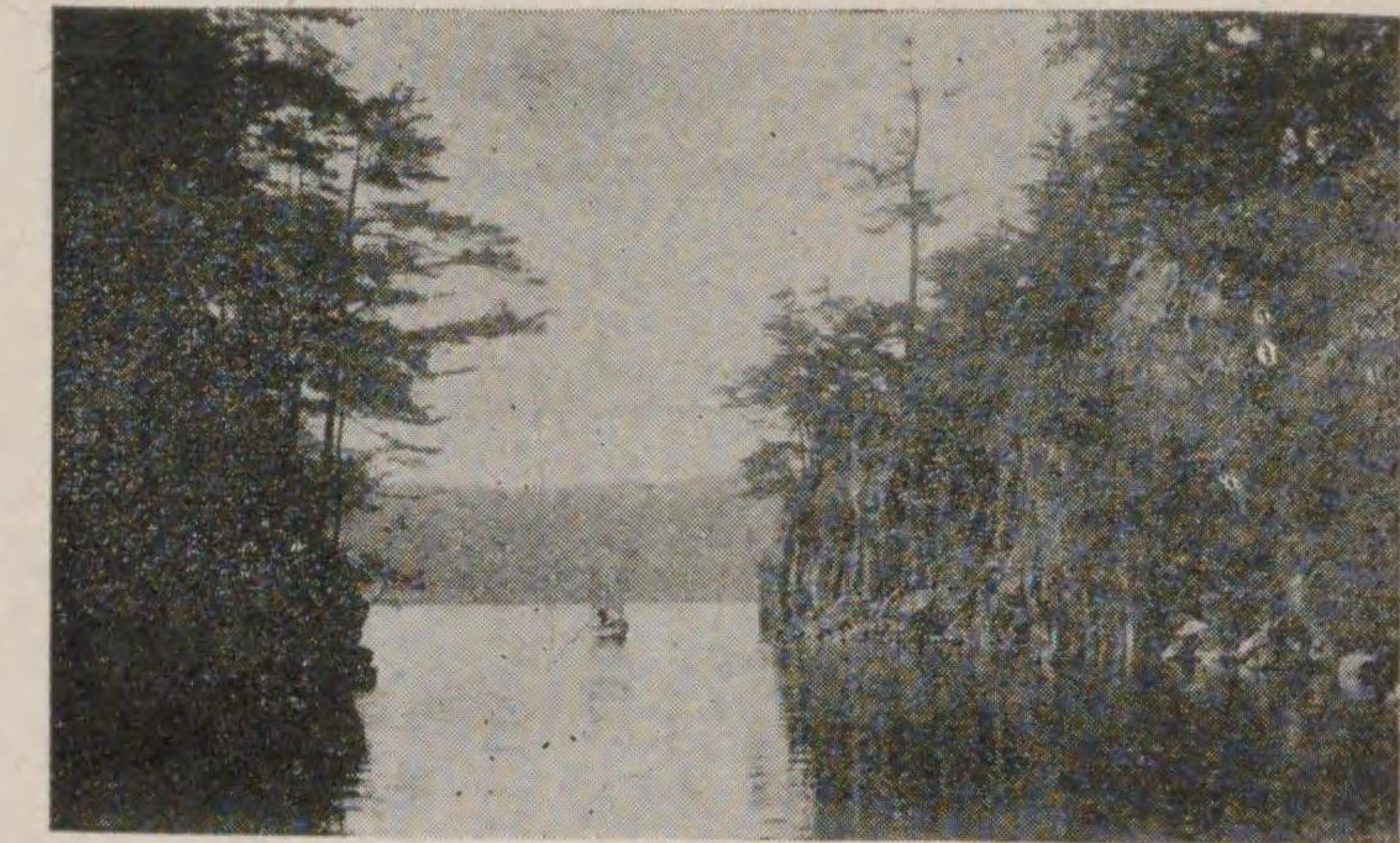
泊漁港　六ヶ所村の大字、本郡の東北端に位置し、東海岸唯一の良港である。漁船、小廻船の出入多く、海産物を輸出する。漁港として修築の聲が高い。

小河原沼　郡の東海岸に在り、沼崎驛より數町にして至る。一名倉内澤とも云ひ、その形、長く袋狀を爲す。周回十四里十四町、七戸川之に注ぐ。水面の高さ海水と同一な點から見て、元は港灣であつたらしいと云ふ沼口を開鑿し船舶を入れるを得ば、良港となると說く者がある。又開拓して耕地とする計劃を唱ふる者もある。鰻、鯉、鮒、ウゴイ、蜆貝等の魚介が豐富である。又水鳥多く群來し狩獵地として名高い。風景雅趣に富み、遊覧に適す。附近に姉沼、田床沼等多數の小湖がある。

氣比神社　古間木驛の東方十五町、往時の有名な木崎野の牧場で、祭神は足仲彦命、文明九年の勸請である古來木崎の馬子神堂と稱し、陰暦六月朔日、十五日の祭禮には遠く岩手、秋田の馬産家が參詣に來る。

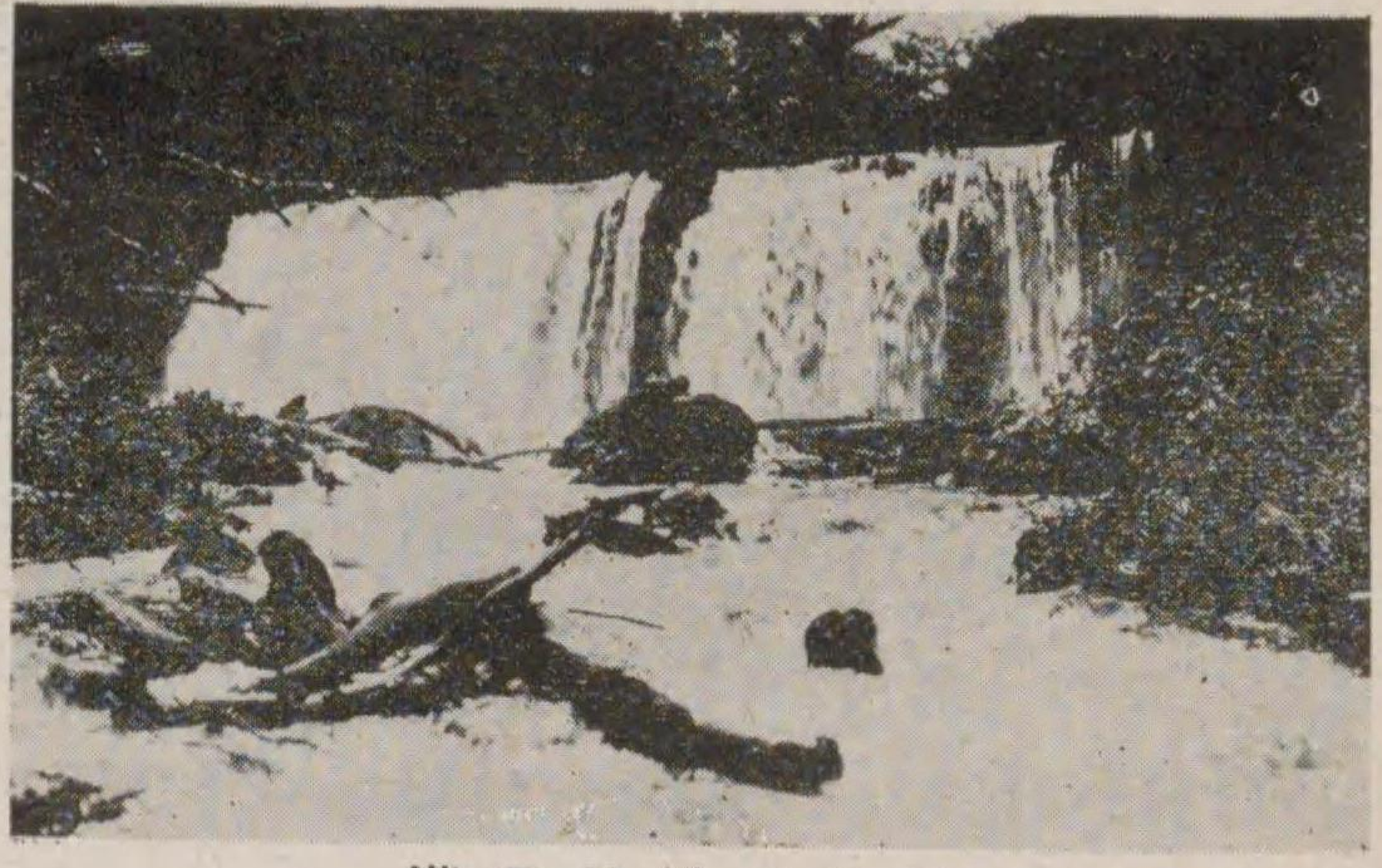
十和田湖　天下の勝景

上北郡



十和田湖自籠の入口

奥入瀬溪流



子の口銚子の瀧

十和田湖は、青森縣上北、秋田縣鹿角兩郡に跨り、周回凡そ十五里、海拔一千二百尺の高所に在る。四圍に深溪縱横、山嶽重疊し、山容水態の雅趣、海内に冠たりと言はれる。湖は形、稍々圓形に近く、その南岸より御倉中山の兩半島が馬蹄形に半圓を描いて、湖心に突出してゐる。此の兩半島の表裏兩面にある岩石、島嶼、草木の風致こそ、實に十和田をして名勝の名を爲さしむるものである。

湖を分つて、東湖、中湖、西湖、北湖と云ふ。奥入瀬口の、子の口より、御倉半嶋までを東湖、御倉、中山兩半嶋の間を中湖、中山半島より西方、休屋、發荷方面を西湖、瀧の澤及び對岸大疊附近より北を北湖と呼ぶ。

日暮の崎　子の口より湖上一里餘、御倉半島の先端を廻り、八雲崎を過ぎるところに日暮崎がある。全山そゝり立つ大岩石から成り、翠松一面に亂生す。此處から望む御倉山の斷崖絶壁は、湖中隨一の絶景と言はれる大町桂月は

大空を斷切る巖の幕の中
　神やまします龍やひそめる

と詠んで、奥入瀬溪流の九十九島、一目四瀑と共に、十和田の三絶景と賞揚した。これより稍々西に長蛇の如く天に嘯く千丈幕の奇觀があり、その下に姫小松、赤松の緑に覆はれた大小の岬が並んでゐる。

御占場　千本松から半月形の湖岸を北に十町、中山半嶋の中に御占場と言ふがある。十和田神社に參拜するもの此處より錢を湖中に投じて、吉凶禍福を占ふ。北方に千代ヶ浦、君ヶ代の岩、業平岩、小町岩等その他無數の岩岬、入江があり、何れも神秘の妙を極めてゐる。

自籠森の入江　中山半嶋の先端より西、西湖に入れば、水越、龍ヶ崎、鵜の島等あり、更に山腰湖中に突出して一大岩骨を露出し、水晶宮の如く天を摩す白岩に老松巨龍の蟠るやうな六方石の壯觀が目を驚かす。一轉して南には、不老の崎、瓢箪崎、尾上崎あり、九重の裏、高砂の浦を過ぎる所に、自籠森の入江がある。小灣を爲し、奥に自籠森と稱する巨岩がある。岩上に鐵梯あり、頂上に昇つて俯瞰すれば、蓬萊嶋、鎧島、兜島、惠比壽大黑島等、碁石の如く點在し、嶋上何れも姫小松の翠を載く。

『松島にはこの樹ありて、この岩なく、男鹿半嶋にはこの岩ありてこの樹なし、天下の風光十和田湖ひとりその美を壇にす』とは、文豪桂月の高葉である。

休屋（十和田神社）　惠比壽、大黑嶋の前面に休屋の部落がある。湖畔最古の部落で、湖景遊覧に至便の地である。十和田舘、世界公園舘、安野旅舘等の大旅舘が在る。脊後の山麓に十和田神社がある。傍に熊野神社と外に南祖坊と八の太郎とを祠つた二小祠がある。此處から鐵梯によつて中湖の御占場に通じてゐる。

十和田道

五線各特色がある

湖に達する路、略々十線に餘るも、沿道の風景最も美にして、且つ利便なるは、三本木町を起點とする奥入瀬口、青森市より至る八甲田越、南津輕郡黑石よりする淺瀬石口及び隣縣秋田の小坂口、毛馬内口の五ヶ所である

奥入瀬口（奥入瀬溪流）　東北本線古間木驛より、鐵路又は自動車で約三十分にして三本木町に至る。此處より湖水唯一の溢出口である奥入瀬川に沿ふて、凡そ九里半、湖口子の口に至る。路は坦々として、峻險の遮るなく、自動車の便がある。行くこと五里、途中燒山に至る。このあたりから奥入瀬の水はいよ〳〵激し、千古斧鉞の入らぬ大森林兩岸を覆ふ。途中石家堂（イシゲト）とて、昔女賊鬼神のお松の棲家であつたといふ所がある。拾餘坪の大磐石巨木の根に横はり、その下は自然の岩窟を爲してゐる。間もなく馬門岩に至る。これより溪中の小島次第に多きを加へ、島上何れも綠草、青苔を載いて清流に影を落す。阿修羅の瀑流附近最も多く、踞して一眸に幾十嶋を望むことが出來る。嘗て故大町桂月翁、十和田三絶景の一と激賞し

岩ごとに木あり苔ある川中の
九十九島を川烏とぶ

と詠嘆した。更に數丁兩岸いよ〳〵屹立して、沿道數十の瀑布急谷に懸る。まさに五歩に一瀑、十歩に一泉の目まぐろしさである。かくて、桂月の

右ひたり桂もみぢの蔭にして
瀧を見る目のいそがしきかな

の句をそのまゝの壯觀を過ぎ、子の口に至れば、溪盡き、天開け、忽然として、一大銀鏡を見る。これ十和田湖である。湖畔にホテル、休憩所があり、遊覧船又客を待つ。

八甲田越　青森市から、八甲田山を越ゆ、酸湯（スカユ）、蔦温泉を經て、奥入瀬本道の燒山に出で、十和田に至る路を八甲田越と云ふ。主として徒歩によらればならない。青森市より南方二里、横内村までは自動車の便があるこれより徒歩又は馬脊によること五里半、酸湯温泉がある。八甲田山の中腹にして强烈な硫黄泉である。附近には地獄沼、塞の川原等があり、又頂上近くには東北大學の植物研究所高山植物園があり、學術的に有名である。途中雲谷（モヤ）峠と云ふがあつて、青森市街及陸奥灣を俯瞰することが出來る。酸湯より十餘町、路は高田大岳にかゝる、このあたりから四圍の植物に著しき變化を示し、行くに從つて『ハヒ松帶』『トド松帶』『ブナ帶』と林相の變化

が明瞭に看取される。仰げば八甲田連山の赤倉、乘鞍、櫛ヶ峯、駒ヶ嶽等何れも海拔五、六千尺の高峰が頂を並べて重疊し、雄大開濶の景は到底筆舌の盡し得ぬところ、日本アルプスの豪壯に比して劣らぬと言はれてゐる。途中谷地温泉を經て、峯傳ひに下ること一里、右折して蔦川の溪流を下り、蔦温泉に至る。此の間酸湯より四里半、更に一里にして燒山本街道に出る。

蔦温泉は　壚類泉に屬し、湧出量は極めて豐富である。千古斧鉞の入らぬ鬱然たる濶葉樹の大森林に圍まれてゐる。林中に蔦沼、月沼、鏡沼、長沼、瓢簞沼、赤沼等の沼澤があり、風光明媚の地である。北方小丘の中腹に藥師堂があり、南方に相對して、大町桂月を記念する餘材庵がある。傍の大樹の下に桂月の墓が建てられてゐる桂月生前此の地を愛し、居を定め、遂に此處に病沒した。

淺瀨石口　奥羽線の川部驛より支線に乘り換へて終點黑石に下車、淺瀨石川に沿ふて約十里にして湖畔瀧野澤に達する路である。此の路は沿道の風色、奥入瀨口、八甲田越に比しべくもないが、温泉至るところに湧出し、温泉街道の名がある。黑石から温川(ヌルカハ)温泉まで、自動車と馬車の便がある。先づ黑石より二里にして、温湯(ヌルユ)温泉に着く、更に十二丁、板留温泉がある。附近に紅葉の名所として名高い中野がある。秋は觀楓の客で賑ふ。行くこと約二十丁にして二庄內温泉があり、更に沖浦温泉、温川温泉がある。別に沖浦、温川兩温泉の中間、一里

餘の奥に要目(カナウメ)温泉、切明(アリアケ)温泉がある。沿道僅に五里餘の間に七ヶ所の温泉があることによつて有名である。温川から二里餘にして湖畔瀧野澤に達する。此處には遊覧船の設備がある。

小坂口　奥羽線大舘驛より、支線小坂鐵道により小坂町に至り、此處から徒歩若しくは馬にて鉛山峠に出る。里程約五里、急坂を下ること約一里にして湖畔鉛山に出る。湖上休屋へ一里六町、子之口へ二里十町である陸路を休屋に至ることも出來る。

毛馬內口　大舘驛より秋田鐵道にて十八哩二、毛馬內に至る。大湯川に沿ふて、一路休屋まで自動車がある。途中二里にして大湯温泉がある。これより約三里中澤に達し、更に發荷峠の急坂にかゝる。路は羊腸として迂回す。半里にして湖畔發荷に出る。毛馬內より七里三町である。

三戸郡　（貳薩體、糠部）

三戸郡は本縣の東南部を占め、北は上北郡に接し、南は岩手縣九戸、二戸兩郡と境し、西は秋田縣鹿角郡に連り東は太平洋に臨んでゐる。往昔永く王化の霑ひ及ばず、郡內至る所蝦夷の棲窟たる有樣であつた。文治五年平泉藤原氏の滅亡と共に、鎌倉の家人として、役に從つた南部氏の祖光行糠部に封ぜらるゝに及んで、漸次開拓の實

を見るに至り、爾來本郡は永く南部氏の領有するところとなり、明治維新に及んだ。

八戸町

東北本線尻内驛より東方に向つて、鐵路三哩四、郡の東海岸、馬淵川の南岸に八戸町がある。寛文年間、盛岡城主南部重信の弟直房此處に分家し、長者山麓に城を築いて、開墾、移住を奬勵した結果、急激な繁盛を來し、現在は戸數四千に近く、人口又二萬に達する大市街地である。警察署、稅務署、區裁判所、縣立八戸中學校、實科女學校等があり、縣下第一の大郡たる本郡の、政治、經濟の中心地である。名産として、干菊、南部煎餅等があり又鄕土藝術の粋として、近年全國的に有名となつた、ゑんぶり、駒踊り等の素撲淡雅な舞踊は、この地を中心とする附近村落の所産である。

八戸城址　初代左衛門尉直房以來、八戸南部氏の居城にして、停車場を距る三日町の處に在り、京ヶ崎と云ふが、明治四年版籍奉還と同時に、樓閣を毀たれ、深濠又埋沒されたので、今は全く草莽と化し、蟲聲松籟そゞろに懷舊の情を深からしむるものがある。

公園と三八城神社　舊城址である長者山といふ丘陵の一部は、今公園となつて、八戸公園と稱し、梅櫻

桃李、躑躅等、四季紅を競ひ、山上遠く鮫浦の白帆を望み、脚下に馬淵、新井田の清流を俯瞰する景佳である。明治十四年八月、明治大帝東北御巡幸の折、親しく打毬の伎を御覧になつた由緒がある。

三八城神社は、南部氏の祖新羅三郎義光及南部藩祖光行、八戸藩祖直房を祀り、元祿二年の創建にかゝり、明治十二年八月縣社に列せられた。初め新羅神社と稱したが、後今の名に改稱されたものである。

南宗寺　寛文六年藩祖直房が建立した、臨濟宗の寺院で八戸町字糠塚にある。結構壯麗を極めたものであつたが、惜しいかな明治二十四年炎上し、同年再建され、規模稍々舊に劣ると雖も、依然地方の大伽藍である。

根城址　八戸町の西郊約二十町、三戸郡舘村字根城に在り、北方馬淵川の流れに近く、長苗代、石堂、河原木等の諸部落を一望の裡に收め得る地にして、稍々小高い丘陵となりてゐる。城の由來は沿革史に記する通りである。

櫛引八幡宮　舘村大字櫛引字八幡に在り、仁安元年九月、南部始祖光行が、甲洲巨摩郡南部の莊に創建しその後糠部の地を領有するや、糠部郡瀧澤村に遷し、更に後堀川天皇の貞應元年現在の地に遷座したが、寛正年間炎上、應永二十年再建の後、南部重直が、慶安元年新に造營したものであるといふ。明治六年鄕社に列せられその所藏になる寶物中、鎧四領及び兜一頭は、大正四年三月國寶に指定された。別の名を奧州二の宮と稱し、陰

歴八月十五日の大祭は、参詣者で殷賑を極める。

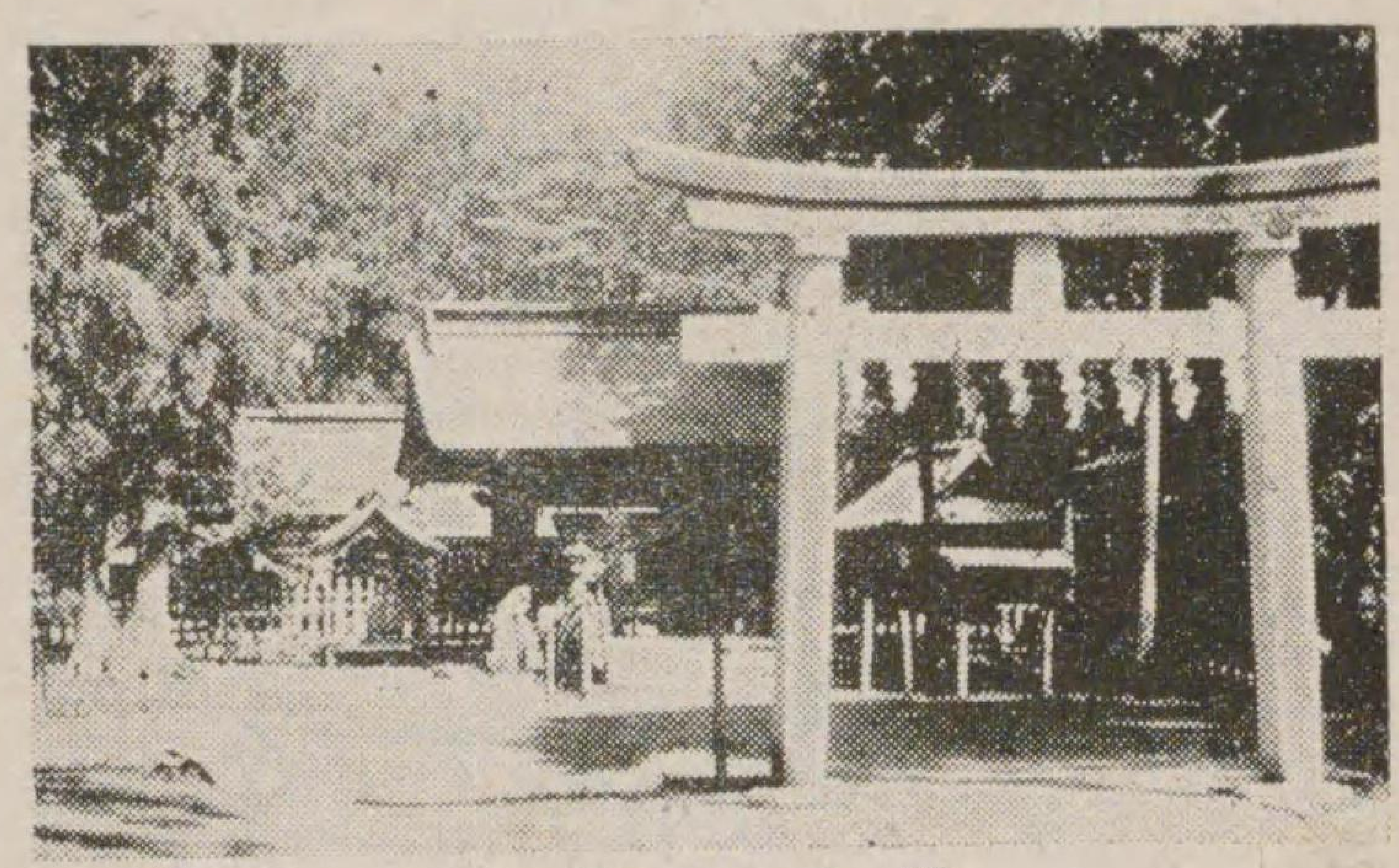
矢倉の懸崖 馬淵川の流れ、遠く山谷を走り、平野を縫ひ、やがて舘村大字櫛引に至る邊り、河岸の風光俄に改まり、或は怪岩屹立して天を睥睨し、或は奇石靑苔を載せて水聲に咽ぶ所、棹す片舟、水面に影を落す眺めは極めて佳麗である。

湊 八戸驛より一哩七にして、八戸線の終點湊驛に達す。徒歩するも僅に三十町、殆んど八戸町と接續してゐる。新井田河口に面し、沿岸並びに遠洋漁業の根據地として、東方里餘の鮫港と相俟つて、最近著しく發展し人口一萬二千を算す。隣村小中野又近來異狀の發展を示し、人口八千七百、縣水產講習所、縣水產試驗場があり附近輸出入貨物の集散地である。

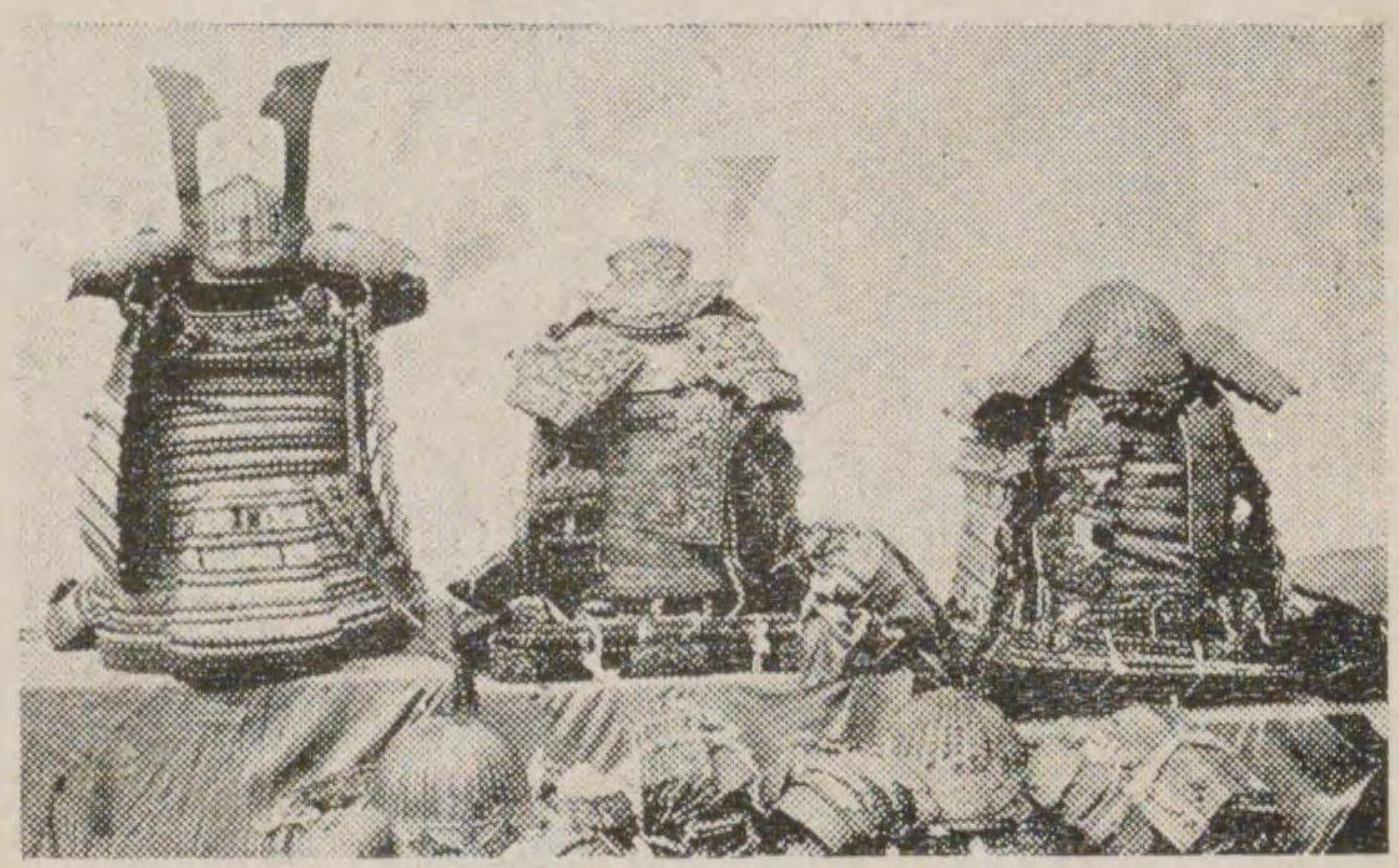
舘鼻の遠景 湊より東に十一丁、人力にて三十分、湊河口の南岸太平洋に面して突出する岬を舘鼻と云ふ大海原を奔る澎湃たる巨浪を脚下に蹴散らし、水天一髪の間に出沒する點々たる白帆を望む雄大な構想圖は、銚子犬吠岬のそれにも優る男性的風光美の最たるものである。

鮫港

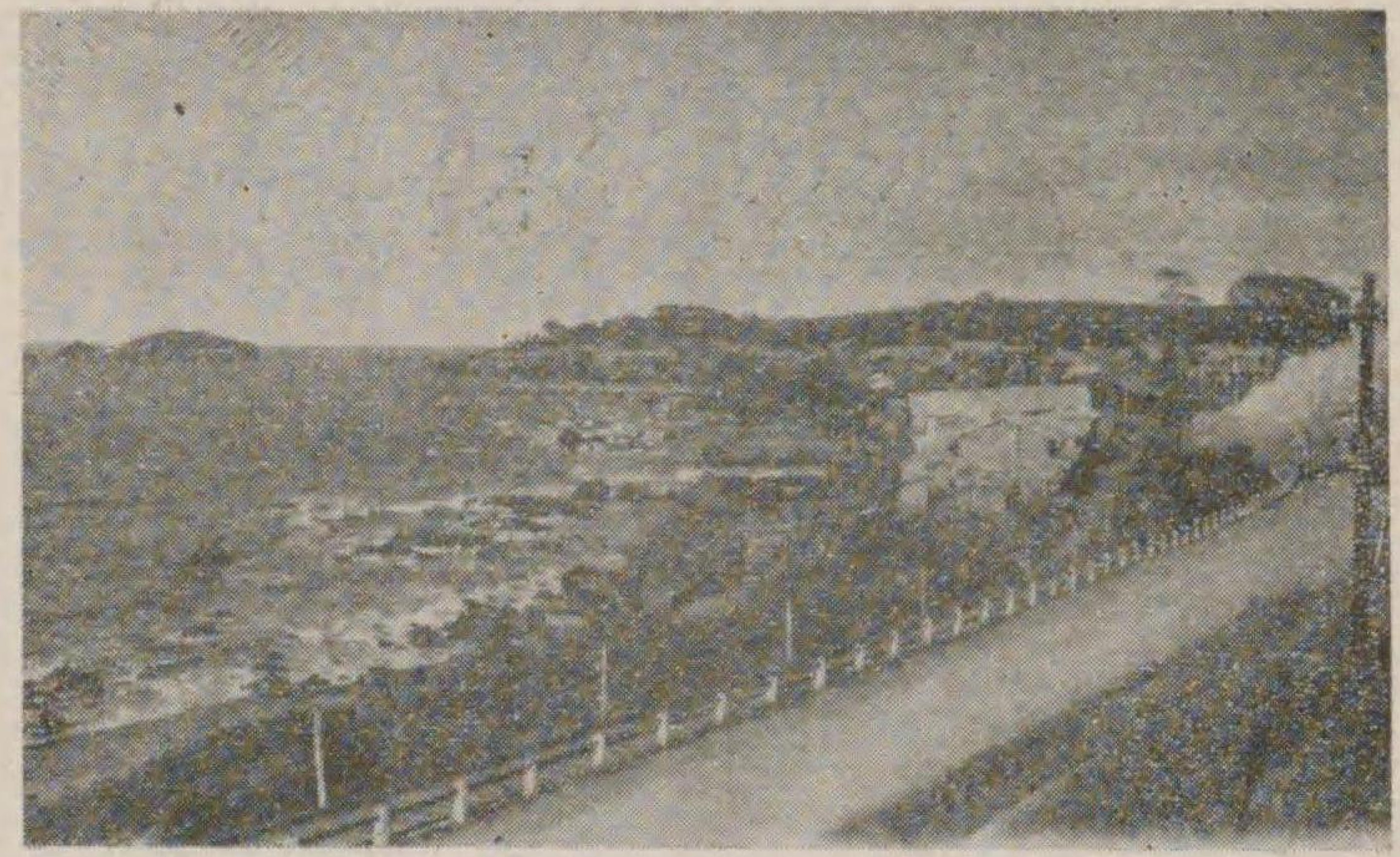
三戸郡



櫛引八幡宮



國寶甲冑（櫛引八幡藏）



鮫浦の全景

鮫港は、湊の東方海岸里餘の所にあり、港内水深く大船を入れ得るため、最近仙臺以北に於ける東海岸唯一の避難港として知られるに至った。ために港灣修築の議を決し、大正七年費用百五十萬圓を以て工を起し、更に大正十四年百萬圓を追加して、最近略々完成に近づいてゐる。

蕪嶋の鷗　鮫港附近は又景勝の美を以て知られてゐる。沿岸の一帶奇巖散在し、沖に島嶼多く、海水淸澄加ふるに、上北、三戸の沿岸及び遠く八甲田山脈の重疊を望むことが出來る。海岸を距る約三丁の沖に、一孤島あり、全島一面に野生の蕪が繁茂したるを以て、稱して蕪島と云ふ。春日化開く時は、黄色青波と相映じて、頗る美觀を呈する。ために『黄金花咲く蕪島』の俗謠がある。嶋に祠を建て辨財天を祀り、例年陰曆三月三日例祭には汐干狩を催す。又蕪の葉蔭には、無數の群鷗巣を構へ、產卵孵化し、人が近づいても更に驚かず、浦人も又これを辨財天の使ひと稱へて、敢て害する者なく、鮫の海ねことして、學界に紹介され、目下は天然記念物として保護されてゐる。

鮫の野　天女ヶ窪競馬場のある所で、毎秋此處に開かれる競馬會は、驥北の名駿を集めることによつて有名である。野は一面草花に覆はれ、秋瞭爛の頃は詩趣殊に深い。此處の鮫角と云ふは、本縣の最東端に位置し、角の上に見石と云ふ岩があり、起つて附近の壯快なる景を賞するに適してゐる。南方に巫女舞石と云ふ奇石があ

る。

惠比須濱　港の東方十町餘の所に東洋捕鯨會社鮫事業場があり、一帶を惠比須濱と云ひ、西の宮神社が建つてゐる。沿岸奇石多く春は潮干狩の客に賑ふ。

南方海岸　鮫村海岸は至る所怪岩奇石の景に乏しくないが、その最たるものは、鮫港から南行二十餘町の白濱より、大須賀、法須濱に至る約里餘の海岸である。就中、烏の足掛石、高岩等はその怪奇的な雅致に於て多く類を見ない。

金山澤洞窟　八戸町を南に三里、階上村大字金山澤に在り、又の名を脫龍洞或は蛇拔岩と云ひ、新井田川の支流洞中を貫流する。上流に大理石を產する小松倉と呼ぶ所があり、小脫龍洞と云ふ。

相內の觀音　平良崎村大字相內に在り、南部の始祖三郎光行、承久元年十二月入部の際由井ヶ濱より兵船にて八戸浦に着岸、此の堂宇にて越年したと傳へられてゐる。

田子の舘　田子九郎（後宗家を繼いで南部信直）の居城址にして、三戸町の南方四里、來滿山道の一驛である。田子又達戸とも作る。

石　龜　田子の西方三里、上郷村に在る。南部康政公の四男石龜紀伊守信房なる人の居りし所、來滿嶽を

踰いて秋田縣大湯に至る。

劍　吉　三戸の東北六哩、劍吉驛がある。北川村に屬す。南部信直の家老北松齋信愛の居舘があつた所、後信愛、花卷の舘に移ると共に居舘は破却された。

淺　水　今の淺田村の一部、野澤川に沿ふ。南部康政の三男遠江守長義の居城があつた所である。

五戸町　八戸町の西方五里、戸數千百餘、人口七千を超ゆ。五戸川に沿ふ郡內有數の大邑である。建武二年、三浦介平高繼勳功に依つて與へられた所と云はれ、その開拓古く、近郷物資の集散地として繁榮してゐる。

新田舘址　八戸町の東南一里、大舘村大字新井田にあり、北方の根城に對し、南舘と稱した。南部政長の次子政持の築造になつたものである。政持以後、地名を採つて新井田氏と稱した。天正二十年根城が破却されてからは、八戸氏之に移り、寬文四年遠野に移るに及んで廢城となつた。

對泉院　大舘村大字新井田に在る。建武の頃、新井田氏の開基になり、天文二年、大陰惠善和尙、庵を寺澤に移し、貴福山對泉院と稱した。菊花の名所として名高い。

松舘溪流（閉伊穴）　新井田の南方里餘にして、舘村大字松舘に至る。溪流多く、その激する所、白巖屛風の如く聳立し、遠く之を望めば銀河白亞を載せて走るが如き奇觀を呈す。中に一大洞窟あり、暗黑の洞穴數十里